千九百三十年「ロンドン」海軍條約樞密院審査委員會議事要錄

（昭和五年八月—九月）

「ロンドン」海軍條約樞密院審査委員會

○審査委員（昭和五年八月十一日指名）

委員長　伊東己代治
委　員　金子堅太郎
同　久保田　讓
同　山川健次郎
同　黑田長成
同　田健次郎
同　荒井賢太郎
同　河合　操
同　水町袈裟六

○審査委員會

第一回　昭和五年八月十八日（月）（樞密院側協議）
第二回　同　年同月二十三日（土）（政府側説明）
第三回　同　年同月二十六日（火）（政府側出席、質問應答）
第四回　同　年同月二十八日（木）（同　上）
第五回　同　年九月一日（月）（同　上）
第六回　同　年同月三日（水）（同　上）

第七回　同　年同月五日(金)(同上)
第八回　同　年同月八日(月)(同上)
第九回　同　年同月十日(水)(同上)
第十回　同　年同月十二日(金)(同上)
第十一回　同　年同月十五日(月)(同上)
第十二回　同　年同月十七日(水)(樞密院側協議)
第十三回　同　年同月二十六日(金)(樞密院側協議、審査報告書決定)

○審査委員會ニハ、國務大臣ノミノ出席ヲ求メ來リタルヲ以テ、説明員ハ出席セズ、從テ委員會議事要錄ハ、幣原外務大臣ノ口授ニ依リ作リ、濱口總理大臣ノ閲覽訂正ヲ經タルモノナリ。財部海軍大臣ノ説明ノ部分ハ、同大臣ノ口授ニ依リ作リタル海軍省ノ記錄ヲ照合シテ訂正ヲ加ヘタリ。但シ第七回委員會議事要錄ハ、幣原外務大臣病氣缺席ノ爲、濱口總理大臣ノ口授ニ依リ作リタリ。

第一回、第十二回、第十三回委員會ハ、樞密院側ノミノ會合ナルヲ以テ、議事要旨ヲ缺ク。

第一回「ロンドン」海軍條約審査委員會

一、場　所　樞密院事務所
二、日　時　昭和五年八月十八日午後一時開會二時三十分散會
三、出席者
　樞密院側　倉富議長、平沼副議長、伊東委員長、各委員、二上書記官長、書記官
四、議　事　（政府側ノ出席ヲ求メズ、樞密院委員間ニテ審査ノ方針ヲ打合セタルモノナリ。）

第二回「ロンドン」海軍條約審査委員會

一、場　所　樞密院事務所

二、日　時　昭和五年八月二十三日午後一時開會午後三時散會

三、出席者

樞密院側　倉富議長、平沼副議長、伊東委員長、各委員、二上書記官長、書記官

政府側　濱口總理大臣、幣原外務大臣、財部海軍大臣

四、議事要旨

伊東委員長　「ロンドン」海軍會議ノ經過及海軍條約ノ內容等ニ關シ、政府當局ノ說明ヲ承リ度シ。

濱口總理大臣　軍備縮少ノ實現ニ依リ、世界平和ノ確立竝ニ人類福祉ノ增進ニ貢獻センコトハ、帝國ノ對外政策ニ合致スル所デアリマシテ、帝國ガ、大正九年國際聯盟ニ加盟シ、又大正十年ノ「ワシントン」會議及昭和二年ノ「ジュネーヴ」會議ニ參加シタルモ、此ノ目的ニ出デタモノデアリマス。然ルニ、「ワシントン」會議ニ於キマシテハ、主力艦及大型航空母艦ニ付テハ、保有量ヲ制限シ之ガ建造競爭ヲ防止スルコトヲ得タノデアリマスガ、補助艦ニ付キマシテハ、僅ニ單艦ノ最大排水量及備砲ノ最大口徑ヲ制限スルヲ得タルニ過ギザリシ爲、同會議後數年ナラズシテ、主要海軍國ノ間ニ、補助艦建造競爭再燃ノ傾向ガ濃厚トナルニ至ツタノデアリマス。

此ノ時ニ當リ、軍備縮少ノ實現ヲ其ノ重要ナル使命ノ一トスル國際聯盟ハ、陸、海、空ノ三軍ニ亙ル軍備縮少會議ヲ開催センコトヲ企圖シ、其ノ前提トシテ、大正十五年五月軍備縮少會議準備委員會ヲ「ジュネーヴ」ニ開催シタノデアリマス。然ルニ、同委員會ニ於テハ、討議ノ範圍ガ餘リ廣汎ニ亙リ、且各國ノ意見モ亦多岐ニ分レ、何時具體的ノ結果ニ到達スルコトガ出來ルカ、容易ニ豫見シ難キ情勢デアリマシタ爲、米國政府ハ、問題ヲ海軍ニ限定シ、先ヅ主要海軍國間

ニ協定ヲ成立セシムルコトガ急務デアルト認メ、昭和二年二月、「ワシントン」條約締約國ニ對シ、「ジュネーヴ」ニ海軍軍備制限會議ヲ開催センコトヲ提議スルニ至リマシタ。「ジュネーヴ」會議ハ、佛伊兩國ノ參加ヲ見ナカツタノデ、結局日、英、米三國間ノ會議トナリ、同年六月二十日開催セラレマシタガ、八吋砲巡洋艦ニ關スル英米兩國ノ主張ノ懸隔甚シク、其ノ間帝國全權委員ガ極力斡旋ノ勞ヲ取リタルニモ拘ラズ、遂ニ調整ノ途ヲ發見スルコトヲ得ズ、八月四日所期ノ成果ヲ收ムルコト能ハズシテ休會ノ已ムナキニ至ツタノデアリマス。尤モ「ジュネーヴ」會議ハ、全然無意味ニ終ツタ次第デハアリマセヌ、海軍問題ニ對スル日、英、米三國主張ノ相違ヲ明確ニスルコトヲ得マシテ、將來ノ交渉ニ資スル所ガアツタノデアリマス。唯ダ同會議ニ於テ何等具體的協定ノ成立ヲ見ナカツタコトハ、主催國タル米國民ニ失望ヲ感ゼシムルト共ニ、同國ノ大海軍論者ニ好個ノ口實ヲ與ヘ、昭和四年二月ノ海軍建造法成立ノ原因トナリ、延イテ英國民ノ對米感情ヲ刺戟シ、英米兩國ノ關係ニ不快ナル陰影ヲ投ズルニ至ツタノデアリマス。

然ルニ、昭和四年三月、米國ニ於テ「フーヴアー」大統領就任シ、越エテ六月、英國ニ於テ「マクドナルド」內閣ガ成立致シマシタガ、「フーヴアー」「マクドナルド」兩氏ハ共ニ軍備縮少ノ熱心ナル主張者デアリマシテ、且豫テヨリ海軍問題ノ解決ニ依ツテ英米關係ノ改善ヲ圖ランコトヲ其ノ重要政策トシテ居ツタモノデアリマシタノデ、兩氏ノ就任ガ機會トナツテ、海軍軍備縮少問題ハ再ビ急速ニ進展スルノ氣運ニ向ヒ、六月中旬、新駐英米國大使「ドーズ」氏ノ着任ト同時ニ、英米兩國政府ノ間ニ非公式會談ガ開始セラレ、同年九月ニハ「マクドナルド」首相自ラ米國ヲ訪問シテ、同國政府當局ト懇談ヲ遂グル所ガアリ、兩國ノ間ニ、海軍協定ノ基礎トナルベキ諸原則ニ關シ、一應ノ合意ヲ成立セシムルコトヲ得ルニ至リマシタ。

斯クシテ、英國政府ハ、十月七日、日、米、佛、伊ノ四國政府ニ向ツテ「ロンドン」海軍會議ニ參加ヲ招請スル運トナツタノデアリマス。是ヨリ先キ、帝國政府ハ、英米兩國間ニ非公式會談ガ開始セラレマスルヤ、松平、出淵兩大使ヲシテ、英米兩國政府當局ト常ニ緊密ナル接觸ヲ保チ、機宜ニ應ジテ我意見ヲ開示セシメ、將來ノ會議開催ニ備ヘタノデアリマスガ、英國政府ノ會議招請ニ對シテハ、同月十六日、之ヲ受諾スルト共ニ、引續キ兩大使ヲ通ジテ、英米兩國政府ト夫々非公式交渉ヲ爲サシメタルノミナラズ、米國政府當局トハ、若槻、財部兩全權渡英ノ途、「ワシントン」ニ於テ隔意ナキ意見ノ交換ヲ行ハシメ、又兩全權著英後ハ、英國政府當局ト懇談ヲ重ネ、以テ會議開始前ニ豫メ協定ノ素地ヲ作リ、會議ノ成功ニ資センコトニ努メタノデアリマス。

「ロンドン」會議ハ、本年一月二十一日ニ正式ニ開會セラレマシタ。今次ノ會議ニ於キマシテハ、討議セラルベキ問題ノ重要且機微ナル性質ニ鑑ミ、特ニ非公式交渉ニ重キヲ置キ、討議ノ進捗ニ盡力シタノデアリマスガ、殊ニ議題ノ中最困難ト目サレタ補助艦保有量ノ問題ハ、幾多ノ迂餘曲折ヲ經タルモ、日、英、米三國全權委員ノ熱心ナル努力ノ結果、四月上旬ニ至リ、遂ニ三國ノ間ニ解決ヲ見ルコトガ出來タノデアリマス。當時ノ情勢ヲ見マスルニ、佛伊兩國ニ對スル交渉ハ、主トシテ英國ガ之ニ當ツタノデアリマスガ、其ノ交渉ハ全ク停頓シテ、到底解決ノ見込ガ立タヌ實情デアリマシタ。然シナガラ、主力艦代換建造休止ノ問題ニ付テハ、各國全權間ニ議ガ纏リ、又補助艦保有量協定問題以外ノ專門的事項（例ヘバ、潛水艦ノ使用制限ニ關スル規定等ノ如キ）ノ討議モ、專門委員會、法律委員會ニ於ケル連日ノ審議ニ依ツテ、佛伊兩國ヲモ含ム五國協定ノ基礎ヲ作成スルコトガ出來マシタノデ、此等合意ノ成立シタル事項ヲ一括シテ條約案ヲ作成シ、四月二十二日、各國全權之ニ調印ヲ了シ、佛伊兩國ニ對シテハ、補助艦保有量ノ協定ニ付尙ホ交渉ヲ繼續スルコトトシテ、一旦會議ヲ休止スルコトトナツタノデアリマス。今般御批准奏請ニ及ビマシタル千九百三十年「ロンドン」海軍條約ハ、斯クシテ締結セラレタモノデアリマス。

「ロンドン」海軍條約ハ、前文ノ外五編二十六條ヨリ成リ、前文ハ、本條約ガ競爭的軍備ニ常ニ伴フ危險ヲ防止シ負擔ヲ輕減シ、「ワシントン」會議ニ依リ開始セラレタル事業ヲ進展セシメ、軍備ノ一般的制限及縮少ノ漸進的實現ヲ容易ナラシムル目的ヲ以テ締結セラレタルモノナルコトヲ明ニシ、第一編ハ、「ワシントン」條約ノ修正補足ニ關スル五國協定デアリマシテ、主力艦代換建造ノ休止、主力艦ノ處分及航空母艦ノ定義ノ擴張ヲ規定シ、第二編ハ、補助艦船、制限外艦

船及特殊艦船ニ關スル五國協定デアリマシテ、基準排水量測定法、代換及處分方法、潛水艦艦型及備砲、制限外艦船ノ規格、特殊艦船表等ニ關スルモノ、第三編ハ、補助艦船保有量ニ關スル日、英、米三國協定、第四編ハ、潛水艦使用制限ニ關スル五國協定、第五編ハ、條約ノ效力其ノ他ニ關スル規定ヲ包含スルモノデアリマス。本條約ノ效力存續期間ガ千九百三十六年十二月三十一日迄デアルト云フコトハ、特ニ注意スベキ一要點デアリマス、卽チ、本條約ハ千九百三十六年ニ至ル迄ノ事態ヲ律スル短期協定デアリマシテ、其ノ間丈ケ關係各國ヲ拘束スルニ止リ、爾後各國ノ保有スベキ海軍力ニ至リマシテハ、千九百三十五年ニ開催サルベキ次回會議ニ於テ改メテ考慮セラルベキ事柄デアリマス、而シテ、其ノ際各國ハ何等ノ拘束ヲ受クルコトナク、自由ノ立場ニ於テ獨自ノ主張ヲナシ得ルモノナルコトハ、條約第五編第二十三條ノ明記スル所デアリマス。

以上ハ、「ロンドン」海軍會議ノ經過ニ付キ概要ヲ申シ述ベタモノデアリマス。尙ホ經過ノ詳細ハ外務大臣ヨリ、又兵力ニ關スル事項ハ海軍大臣ヨリ說明スルコトニ致シマス。

（次デ、妥協案ヲ承諾スルノ回訓ヲ發シタル理由ニ移リ）

余ハ茲ニ、今回ノ會議ニ於テ、兵力ノ保有量ニ關スル帝國最初ノ主張ガ充分ニ貫徹セザリシニ拘ラズ、所謂妥協案ナルモノノ骨子ヲ條約ノ基礎トスルコトヲ承諾スルノ回訓ヲ發シ、遂ニ條約ニ調印シタル政府ノ所信ニ付、一言說明スル所アラントス。

所謂妥協案ハ、彼我全權間ニ於ケル久シキニ渉レル討議ノ末、英米側ニ於ケル最後的讓步案トシテ生レ出デタルモノニシテ、我全權ノ凡ユル努力ニモ拘ラズ、之以上讓步セシムルコト能ハザルニ至リ、全權ヨリ之ヲ政府ニ請訓シ來レルモノナリ。依テ、政府ニ於テハ、交渉ノ經過ニ稽ヘ、案ノ內容ヲ精査シ、愼重ナル考慮ヲ加ヘタル次第ナルガ、之ガ對策トシテ、若シ絕對ニ妥協案ヲ拒否シ、我當初ノ主張ヲ押返シテ强硬ニ交渉ヲ試ムルカ、又ハ或種ノ讓步案若クハ中間案ヲ以テ更ニ交渉ヲ試ミントセバ、勢ヒ會議ノ決裂ヲ賭シテ掛ラザルベカラズ、妥協案ノ骨子ヲ動カスベキ如何ナル折衷

案モ、最後ノ決心ナクシテハ作成スル能ハズトハ、各方面ノ殆ド一致シタル意見ナリシナリ、何トナレバ、今回ノ妥協案ハ、前述ノ如ク、我全權ガ數十日ノ間、絕大ノ努力ヲ拂ヒ最善ヲ盡シテ英米側ヲ讓步セシメタル最後案ト云フベキモノニシテ、交渉ノ經過ニ照シ、之以上英米側ヲ讓步セシムルノ餘地ナカリシモノナレバナリ。若シ不幸ニシテ交渉決裂セバ、其ノ結果如何ト云フニ、先ヅ外交關係ノ上ヨリ觀察スルニ、交渉決裂ノ結果ハ、日英米ノ國交ニ惡影響ヲ及ボスベキコト、「ジュネーヴ」會議決裂後ニ於ケル英米間ノ關係ヲ見ルモ明カナリト思惟ス、卽チ、同會議ノ不成功ハ、米國ニ於テ大海軍論者ヲ刺戟シ、海軍建造法ヲ成立セシメ、此ノ反響トシテ、英國民ヲシテ對米惡感情ヲ抱カシムルニ至リタリ。若シ今回ノ會議ニ於テ、我國ガ英米ノ妥協案ヲ拒絕シ、會議ヲ決裂セシムルニ至ランカ、我國ト英米兩國トノ關係ニ深刻ナル衝動ヲ與フベキコトヲ考慮セザルベカラズ。申ス迄モナク、我國ト英米兩國トノ間ニハ、今後トモ平和的解決ト友好的協力トヲ要スル幾多重要案件アルベク、斯カル問題ノ處理ハ、交渉ノ決裂ニ伴フ感情ノ疎隔ニ依リ、自然圓滿ナル進展ヲ妨ゲラルルコトヲ免レザルベキノミナラズ、特ニ支那關係ニ付テハ、兎角我國ニ取ツテ不利ナル影響ヲ及ボスモノト覺悟セザルベカラズ、不幸ニシテ日本ト英米トノ國交惡化スルコトアランカ、極東ノ政局ハ安定ヲ期シ難カルベク、三國トノ友好的了解アリテコソ、始メテ極東ニ於ケル帝國ノ地位ハ鞏固トナリ、極東ノ平和ハ保障シ得ラルベキモノナリ。又會議決裂ノ列國海軍ニ及ボス影響ヲ考フルニ、米國ハ、海軍協定不成立ノ場合ハ、事實上日本ノ海軍力ヲ對米六割以下ノ比率ニ低下スル迄造艦競爭ヲ試ムルコトアルモノト覺悟セザルベカラズ。假令協定不成立ニ終ルモ、米國ハ斯ル造艦競爭ヲ試ムルガ如キ政策ヲ執ラザルベシト云フガ如キ、或ハ米國ノ造艦設備ハ、到底今後數年間ニ、我國ニ對シテ七對十以上ノ高率ヲ保ツニ足ルベキ建造ヲ許サザルベシト云フガ如キ見解ハ、米國特殊ノ國情竝ニ其ノ國民性ニ顧ミ、必ズシモ當ヲ得タルモノニアラズ、國力ノ强大ヲ自覺スル米國人ガ、勢ニカラレテ斯ル競爭ヲ開始スルコトハ、蓋シ想像ニ難カラズ。而シテ米國ノ現行法ニ依レバ、政府ハ別段ノ國際協定アル場合ヲ除ク外、八吋砲巡洋艦二十三隻ヲ建造スベキコトニナリ居ルヲ以テ、會議決裂セバ、米國ノ海軍論者ハ之ヲ利用セズト云フコトナカルベク、結局年

限ヲ指定シテ二十三隻全部ノ竣工ヲ急グコトモ、輿論ノ支持ヲ受クルニ至ルコトナキヲ保シ難シ。假リニ建艦設備ノ關係上、其ノ竣工ヲ今後數年ノ間ニ實現スルコト困難ナリトスルモ、米國民ノ大體ノ空氣ガ斯ル形勢トナレバ、造艦競爭ハ將來ニ渉ツテ永續スルコトトナリ、折角「ワシントン」條約ニ依リ其ノ端ヲ啓キタル海軍軍備制限縮少ノ氣運ノ發展成熟ニ向ツテ、重大ナル影響ヲ及ボスコトトナルベシ。現ニ米國ハ、補助艦ニ關スル協定成立セザルニ於テハ、「ワシントン」條約ニ規定スル主力艦ノ代換ヲ開始スベキコトヲ主張シ居リタル關係上、明年度ヨリ主力艦ノ建造モ開始スルコトトナルベク、我國ニトリテハ、協定不成立ノ結果ハ、勢ヒ造艦競爭ノ渦中ニ入リ、補助艦對米七割ノ建造ヲ實行セザルベカラザルコトトナルベク、其ノ上主力艦ノ代換建造ヲモ行ハザルベカラザルコトトナリ、造艦費ハ非常ニ膨脹シ、財政ノ困難ヲ招キ、國民ノ負擔ヲ過重ナラシムルノミナラズ、彼我國民的感情離反ノ結果ハ、通商、經濟、金融等ノ關係ニモ障礙ヲ來タスベク、彼此相俟ツテ、帝國財政經濟上ノ弱點ヲ暴露シ、其ノ對外信用ヲ傷クルニ至ルベク、國力總體ノ上ヨリ見テ、我國際的地位ハ當然低下シ、廣義ニ於ケル我國防上ノ憂患ハ却ツテ益々加ハラザルヲ得ザルベシ。

次ニ、財政上ノ關係ヲ考察スルニ、近年帝國財政ノ狀態ハ頗ル良好ナラズ、國民負擔ノ過重亦等閑ニ附スルヲ許サズ、此ノ場合ニ於テ、若シ今回ノ軍縮會議ガ不幸決裂シタル場合ニ、反動的ニ起ルコトヲ覺悟セザルベカラザル米國既定ノ造艦計畫ガ遂行セラルル場合ニ於テ、我國ガ之ト七割ノ比率ヲ保有スルガ爲ニハ、大型巡洋艦丈ケニ付テ見ルモ、米國ノ二十三隻二十三萬噸ニ對シテ、十六萬一千噸ノ勢力ヲ要ス、卽チ、我國ノ現有勢力十萬八千四百噸ニ對シテ、更ニ五萬二千六百噸、卽チ一萬噸級五隻餘ノ增加ヲ要スルコトトナルベシ。輕巡洋艦以下之ニ準ジテ增艦スルコトトナリ、之ガ維持費亦當然增加ヲ要ストセバ、政府ハ殆ンド一切ノ施設ヲ中止シテ尙足ラズ、結局多額ノ增稅ニ依ルノ外ナカルベシ。然ルニ、將來數年ノ後、國力ノ相當回復充實シタル後ハイザ知ラズ、我國現下ノ財政經濟狀態、國民負擔ノ狀態ノ下ニ於テハ、此ノ如キハ到底國力ノ堪ヘザル所ニ屬ス。今ヤ國民負擔輕減ノ要求、社會政策ノ要求、失業救濟ノ要求極メテ熾烈ナル今日ノ場合ニ於テ、是等一切ヲ犧牲トシテ軍艦建造ノ競爭ヲ爲スハ、國家大局ノ爲之ヲ避ケザルベカラ

ズ。

「ロンドン」會議ノ決裂ガ、國際關係上、財政經濟上、前述ノ如キ困難ニシテ忍ビ難キ結果ヲ招クニ至ルベキコトヲ思ヒ、且會議ノ目的ト、「ロンドン」ニ於ケル交渉ノ經緯ト、我全權ノ努力及其ノ努力ノ結果タル米國側ノ讓步トニ思ヲ致シ、冷靜沈着ニ國家大局ノ上ヨリ判斷ヲ下ストキハ、假令我方當初ノ主張ニ照シ不滿足ノ點アリトスルモ、今回ノ妥協案ノ骨子ヲ大體承認シ、之ニ適當ナル留保及希望條件ヲ附シテ協定ヲ纏ムルヲ以テ、國家ノ爲得策トスルノ結論ニ到達シタリ。而シテ今回ノ條約ニ依ツテ協定サレタル帝國海軍ノ兵力量ニ付テハ、軍部ノ專門的見地ヨリスレバ、作戰計畫ノ維持遂行上困難トスル點アルヲ免カレザルベシト雖、今回ノ條約ノ短期ニシテ、條約滿期後ノ事態ハ次回ノ會議ニ於テ協議セラルベク、次回ノ會議ニ於テハ、我國ハ各國ト共ニ、今回ノ條約ノ規定ニ拘束セラルルコトナク、自由ノ立場ニ於テ最善ノ方策トスル所ヲ主張スルコトヲ得ベク、其ノ期間內ニ於テハ、相當ノ途ヲ講ズルニ於テハ作戰計畫上ノ困難ヲ緩和シ、國防上不安ナキヲ得ベシト信ズルモノナリ。

要スルニ、「ロンドン」條約ノ善後策トシテ政府ノ留意スベキハ(1)列國間平和親交ノ增進(2)國民負擔ノ輕減(3)國防ノ安固、此ノ三者ヲ適當ニ調和スルノ一點ニアリ、條約成立ノ上ハ、政府ハ此ノ點ニ向テ最善ノ努力ヲナスベク、其ノ結果ハ、昭和六年度以降ノ財政計畫ニ於テ之ヲ實現センコトヲ期ス。

幣原外務大臣　大正十一年「ワシントン」會議ノ閉會後幾クモナクシテ、米國以外ノ列國ハ、着々補助艦建造計畫ヲ定メ之ヲ實行スルニ至リマシタガ、米國ハ其間暫ク傍觀者ノ地位ニ立チ、自ラ斯ル計畫ニ手ヲ染ムルコトヲ見合ハシテ居タノデアリマス。然シ乍ラ、同國ノ側ヨリ見レバ、列國ハ、「ワシントン」條約ガ主力艦ヲ制限シ、且其ノ建造ヲ休止シテ得タル財政ノ餘力ヲ以テ、補助艦ノ建造ニ利用スルニ至リタルモノト認メ、斯カル形勢ノ發展ニ不滿ノ念ヲ抱クコトトナツタノデアリマス。殊ニ昭和二年「ジュネーヴ」會議ノ不成功ニ了ハリタル以來、米國ノ大海軍論者ハ之ヲ屈强ノ口實トシテ、盛ニ海軍充實ノ必要ヲ唱ヘ、遂ニ昭和四年ニハ米國海軍建造法ノ成立ヲ見ルコトト成リ、米國ハ俄然八吋砲巡

洋艦ノ建造ニ付テ日英兩國ノ跡ヲ追ヒ、且結局ニ於テ遙ニ之ニ凌駕セムトスルノ勢ヲ示シマシタ。英國ノ勞働黨ハ此形勢ノ發展ヲ憂慮シ、同年五月ノ總選擧ニ際シテハ、英米親善及軍縮協定ノ促進ヲ重要政綱ノ中ニ加ヘテ國民ニ訴ヘマシタ。總選擧ノ結果、同黨ハ遂ニ多數黨トナリ、其ノ領袖「マクドナルド」氏ガ昨年六月內閣ヲ組織スルコトニナリマスト、同ジク軍縮協定ノ熱心ナル主張者タル米國ノ新大統領「フーヴァー」氏ト呼應シテ、軍縮協定ノ促進ニ全力ヲ擧ゲタノデアリマス。六月中旬、新任駐英米國大使「ドーズ」氏ハ、「ロンドン」ニ着任スルヤ否ヤ直ニ「マクドナルド」首相ト會見シテ本問題ノ非公式協議ヲ始ムルト共ニ、其ノ經過ニ付テハ、隨時極メテ率直ニ松平大使ニ內報シ、日英米三國政府當局者間ニハ、絕エズ特ニ密接ナル接觸ヲ保ツコトトナリマシタ。

十月七日ニ至リ、英國政府ハ海軍會議ニ帝國政府ヲ招請スルノ公文ヲ送リ、同月十六日、帝國政府ハ之ヲ受諾スルノ趣旨ヲ回答シマシタ。次デ我全權委員ハ任命セラレ、若槻、財部兩全權ハ往路米國ヲ通過シテ、一面同國輿論ノ開拓ニ勗メ、他面大統領、國務長官等ヲ訪フテ具體的ノ諸問題ニ涉リ篤ト意見ヲ交換シタノデアリマス。尙ホ兩全權ハ英國到着後松平全權ト共ニ輿論ノ善導ニ意ヲ用ヒ、又英國首相ト非公式會商ヲ重ネ、豫メ會議ニ於ケル帝國ノ立場ヲ有利ナラシメ置クコトニ努力シマシタ。

本年一月二十一日、英國皇帝親臨ノ下ニ、會議ハ豫定ノ通開會サレマシタガ、議長ニ推サレタル「マクドナルド」首相ハ、公式會議ニ於テ艦船保有量ヲ論議スルトキハ、徒ラニ列國ノ國民的感情ヲ刺戟シ、遂ニ「ジュネーヴ」會議ノ覆轍ヲ踏ムニ至ルコトヲ慮リマシテ、各國ノ委員ト謀リ、開會後ニ於テモ尙ホ非公式會談ニ重キヲ置キ、之ニ依テ協定ノ途ヲ啓カムコトヲ期シタノデアリマス。此等ノ非公式會談ニ於テハ、我全權ハ、政府訓令ノ三要點、卽チ世界ノ最大海軍力ニ比シ補助艦ノ總括的噸數ニ於テ七割、八吋砲巡洋艦ノ噸數ニ於テ七割及潛水艦現有勢力七萬八千噸ヲ保有スルノ主張ヲ提ゲテ、英米兩國側ト反覆交涉ヲ重ネマシタガ、先方ハ、或ハ補助艦ハ主力艦ノ補佐タルベキモノデアルカラ、主力艦ト同樣ノ比率ヲ適用スルコトガ當然デアルト云ヒ、或ハ日本ハ一方ニ大陸ヲ擁シ、他方ニ大洋ヲ控ヘ、軍略上頗ル有

利ノ地位ヲ占メテ居ルノデアルカラ、英米ニ對スル六割ノ海軍力ヲ以テ優ニ國防ノ安固ヲ圖リ得ル筈デアルト論ジ、或ハ太平洋方面ニ於ケル防備ノ現狀維持ヲ約スル「ワシントン」條約ノ規定ハ、日本ガ六割ノ海軍力ヲ有スルコトヲ前提トシテ之ヲ定メタルモノデアルカラ、若シ日本ガ七割ノ海軍力ヲ有セムトスルナラバ、防備現狀維持ノ規定ハ之ヲ再考シナケレバナラヌト主張シマシテ、大體「ワシントン」條約ニ於ケル主力艦ノ比率ヲ補助艦ニ適用セムトスル根本觀念ヲ固持シマシタ。潛水艦ニ至ツテハ、英米側ハ四萬噸ヲ日本ニ振當テムコトヲ提議シマシテ、之亦我要求ニ歩ミ寄ルノ色ヲ示サナカツタノデアリマス。

斯クテ二月中旬頃ニハ、「ロンドン」ニ於ケル我國ト英米側トノ交涉ハ、一時停頓ノ狀態ニ陷ツタノデアリマスガ、我全權ハ、此狀態ヲ打開セムガ爲ニハ、我方及英米兩國側ニ於テ、全權委員若ハ隨員ノ間ニ、全然個人的ニ、又何レノ代表部ヲモ拘束セザル條件ニテ、內協議ヲ爲サシムルコトヲ得策ト認メマシテ、英米側ト協議シ、互ニ其內協議ニ當ルベキ者ヲ指定シテ、自由ノ討議ヲ行ハシメマシタ。

先ヅ、英國側ニ於テハ、米國側ヲシテ、八吋砲巡洋艦ニ付第十六隻目以上ノ起工延期ヲ肯ンゼシムル樣ニ努力スルコトヲ承諾シマシタガ、我方ハ、若シ米國ガ第十六隻目以上ヲ起工スルトキハ、之ニ應ジ我現有ノ十二隻以上第十三隻第十四隻ヲ起工スル權利ヲ保有シナケレバナラヌコトヲ主張シタルニ對シ、英國側ハ到底之ニ同意シマセヌ。最近米國上院ニ提出セラレタル「ドーズ」大使ノ報告ニテ承知スル所ニ依リマスレバ、「マクドナルド」首相ハ、「ドーズ」大使トノ豫備交涉ニ際シ、日本ニ八吋砲艦十二隻以上ノ保有ヲ許スガ如キ提案ハ、到底英國自治領ノ同意ヲ得ル見込ナキコトヲ確信スト述ベタル趣デアリマス。又潛水艦ニ付テハ、英國側ハ、我强硬ナル態度ニ顧ミテ、遂ニ四萬噸振當ノ主張ヲ緩和シ、今回協定ノ豫定期限タル昭和十一年末ニ至ル迄我方ニ於テ全然此ノ種ノ艦船ヲ建造セザル場合ニ於ケル保有量ヲ基準トシテ、五萬二千七百噸ヲ認メル意嚮ヲ示シマシタガ、補助艦ノ總括的保有量ニ至ツテハ、尙ホ日本ヘノ振當量ヲ、六割ニ近キ比率ニ止メムトスル主張ヲ固執シテ讓歩シナカツタノデアリマス。

次ニ二月末ニ至ツテ、米國ハ大體以上ノ英國案ヲ認メタル上、艦齢超過艦一萬噸ヲ小型巡洋艦ノ保有量ニ加ヘ、總括的六割七分強ノ比率トナサムコトヲ提議シマシタ、而シテ其ノ艦齢超過艦ハ代換建造セザルコトヲ條件トスルモノデアリマス。斯カル提議ハ固ヨリ我方ノ承認シ得ベキモノデアリマセヌカラ、我方ヨリ有ラユル考案ヲ旋ラシテ對案ヲ作成シ以テ先方ノ讓歩ヲ迫リマシタケレドモ、英米兩國側共ニ容易ニ同意ヲ與ヘマセヌ、三月初旬、始メテ辛ウジテ艦齢超過艦ヲ加ヘ、總括的七割ノ原則ヲ認メムトスルニ至ツタノデアリマス。

其ノ間、英米兩國相互ノ間ニ於テモ亦内協議ヲ進メ居リ、三月初ニ至リ、既ニ全ク協議ノ纒マリタル趣デアリマシタガ、當時英米兩國ト佛伊兩國トノ交渉ハ、佛國内閣更迭ノ關係モアリ、容易ニ進展スルノ模様ナク、英國ノ内政上ノ時局亦樂觀ヲ許サザル事態デアリマシタカラ、英米側ハ、出來得ルナラバ速ニ日英米三國間ノ協定ダケナリトモ成立セシメムトシテ、焦リ氣味ニ見受ケラレマシタ。遂ニ三月十二日、日米兩國全權會見ノ席上ニ於テ、米國側ハ最終讓歩案トシテ、八吋砲巡洋艦ニ付テハ、第十六隻目ハ昭和八年、第十七隻目ハ昭和九年、第十八隻目ハ昭和十年以前ニ起工セズ、從テ昭和十年ノ次回會議以前ニハ一隻モ竣工セルモノガナイ様ニスルコトヲ確認シ、潛水艦ニ付テハ、英米兩國各六萬噸ノ立場ヲ棄テ、日英米ノ三國ニ對シテ五萬二千七百噸ノ保有量ヲ振當テ、總括的比率ニ於テモ、前述艦齢超過艦ヲ小型巡洋艦保有量中ニ加フルノ案ヲ撤回シ、全ク艦齢内ノ艦船ヲ以テ總括的六割九分七厘餘ヲ認ムルニ至リマシタ。然ルニ此ノ讓歩案ハ、米國海軍部側ニ異論アリ、米國代表部内ノ議ガ纒マラナカツタ趣デアリマシテ、翌日、米國側ヨリ日本ニ對スル小型巡洋艦ノ振當量ヲ低下セムコトヲ懇請シ來リマシタガ、我方ニ於テハ到底考量ノ餘地ナキコトヲ力説シテ拒絶シタル末、結局驅逐艦振當量ノ增加ニ依リ總括的比率ヲ低下セシメザルコトヲ得タノデアリマス。英國側ニ於テモ、代表部内ニ強キ異論アリタルニ拘ラズ、此ノ上米國讓歩案ノ數字ヲ動カサナイナラバ、英國全權ハ意ヲ決シテ之ニ同意スルコトニシヤウト云フ内意ヲ漏ラシテ來マシタ。米國側ハ、其ノ讓歩案ガ米國側ヨリ出デタルモノト世間ニ傳ハルトキハ、不當ナル讓歩トシテ國内ノ非難ヲ招クコトヲ慮リ、單ニ三國ノ非公式協議中自然ニ現ハレ來リタル假妥協案ト看

做サレムコトヲ希望シ、我方モ之ニ了解ヲ與ヘマシタ。

茲ニ於テ我全權ハ、從來交渉ノ經緯ニ顧ミ、更ニ新事態ノ發生ヲ見ザル限リ、此ノ上先方ヲシテ讓歩セシムルコトヲ至難デアルト認メ、此ノ假妥協案ヲ基礎トスル協定ハ、假令專門的見地ヨリ困難トスル所ガアリトシテモ、之ニ對シテハ他ニ相當緩和ノ方案ガアルデアラウ、此ノ際大局上協定ノ成立ハ我國ニ有利デアルト云フ意見ニテ、政府ノ訓令ヲ請フコトニナリマシタ。當時尚ホ佛伊兩國ノ態度見据付カズ、其ノ方面ノ事態ガ如何ニ推移スルカニ依ツテハ、我態度モ再考シナケレバナラヌ場合モ起リ得ルノデアリマスカラ、我全權ハ深ク之ニ注意シテ居タノデアリマスガ、佛伊ト英米トノ交渉ハ、別ニ局面ノ轉換ヲ來タスベキ新事態ノ發生ナクシテ已ンダノデアリマス。

斯クテ帝國政府ハ、其ノ全權ヨリノ請訓ニ對シ千思萬考ノ末、四月一日、回訓ヲ發送スルコトニナリマシタ。即チ、帝國政府ニ於テハ前述ノ假妥協案ノ骨子ニ同意スル、但シ今回ノ協定ハ昭和十一年限リノ協定デアルコトヲ明ニスル必要ガアル、又此ノ妥協案ニ依ルト、日本ノ製艦技術竝工業能力ノ維持ニ困難ヲ來ス所ガアルカラ、別ニ之ニ對スル適當ノ方案ヲ協定シナケレバナラヌト云フ趣旨ノ回訓デアリマス。依テ我全權ハ翌二日此ノ趣旨ヲ英米兩國側ニ通達シ、爾後數回ノ會談ニ於テ、艦齢ノ調節及艦齢前繰上代換ノ方式ニ依リ、製艦技術及工業能力維持ノ問題ヲ解決シ、又條約正文中ニ、本條約ハ其ノ有效期限ヲ昭和十一年十二月三十一日迄トスルコト、竝ニ次回會議ニ於テハ、各國共ニ今回ノ條約規定ニ依リテ其立場ヲ拘束セラルベキモノニ非ザルコトヲ明記スルコトトナリマシタ。此ノ點ニ付テハ、最終總會ニ於テ、若槻全權ヨリ左ノ如キ聲明ヲ致シテ居リマス。

「若シ今回ノ條約ニシテ將來久シキニ亘ル事態ヲ律セントスルモノナルニ於テハ、日本國民ハ其ノ國防ニ關シ不安ノ念ヲ懷クコト無キヲ保シ難キモ、現協定ハ一九三六年迄ノ間關係各國ヲ拘束スルニ止リ、爾後各國ノ保有スベキ海軍力ニ至ツテハ、次回會議ニ於テ更メテ考慮セラルベキ趣旨ナルニ鑑ミ、日本ハ、此ノ種條約ノ締結ガ必然國民ノ安全感ヲ鞏固ナラシムベシトノ確信ニ基キ、且熱烈ナル平和促進ノ希望ト交讓妥協ノ精神ヨリシテ、欣然本條約ニ承認

ヲ與ヘタル次第ナリ。今回協定セラレタル我兵力量、特ニ八吋巡洋艦ノ保有量及「オプション」ノ權利行使ノ場合ニ於ケル保有總噸數ハ、本條約有效期間後何等制限ヲ受クルモノニ非ズシテ、本條約ノ規定ハ、次回會議ニ於ケル我國ノ立場ヲ何等拘束スベキモノニアラザルコト、關係各國間ニ明瞭ナル諒解アリタルハ、帝國政府ノ重要視スル所ナリ。」

尙ホ、帝國ノ從來主張セル主義ニ基キ、小巡洋艦ト驅逐艦トノ間ニ、相互ニ保有噸數一割ヲ融通スルコトヲ認メシメ、以テ大體ノ協定ヲ終了シマシタ。

「ワシントン」條約ニ規定セラルル主力艦及航空母艦ノ問題ニ付テハ、累次會議ノ結果、主力艦ハ更ニ今回ノ協定有效期間終了迄、所謂海軍休日ヲ延長スルコトトナリ、且日本ハ一隻、英國ハ五隻、米國ハ三隻ノ主力艦ヲ處分シテ、「ワシントン」條約ノ豫定スル隻數九、十五、十五ノ關係ニ立タシムルコトニ定メ、又一萬噸以下ノ航空母艦ヲモ、「ワシントン」條約ニ規セラレタル一萬噸ヲ超ユル航空母艦ノ保有噸數中ニ算入シテ制限ヲ加フルコトニ決シ、少許ノ點ニ於テ「ワシントン」條約ノ規定ヲ改訂シタノデアリマス。

以上重要事項ノ交渉ト並行シテ、制限方式、艦齡、艦型制限、潛水艦使用制限、特殊艦船、制限外艦船等ノ諸問題モ審議セラレ、制限方式ニ關スル決定ガ伊國ノ不同意ニ依テ除外セラレタル以外、總テ本條約規定中ニ包含セラルルコトトナリマシタ。

佛伊兩國ニ付テハ、佛國ハ自國ト海軍力ノ均勢ヲ得ムトスル伊國ノ主張ヲ全然峻拒スルト共ニ、其ノ國防上ヨリ打算シタル所要量ヲ提案シテ英米兩國側ト折衝シ、英米兩國ヨリ、地中海ニ關スル何等カノ政治的安全保障ヲ得ザル限リハ其ノ所要海軍力ノ縮少ニ同意シ得ラレナイト云フ主張ヲ固執シマシタガ、伊國ハ又、徹頭徹尾佛國トノ均勢ヲ主張シテ讓ラナカツタノデアリマスカラ、英米兩國ハ遂ニ佛伊兩國ト協定ニ到達スルノ望ヲ斷ツノ外ナキニ至リマシタ。茲ニ於テ英國ハ此事態ニ處スル方策ヲ講ズルノ必要ニ迫ラルルコトトナリ、協議ヲ遂ゲタル結果、萬一日英米三國以外ノ國ガ、

其ノ三國ノ何レカ一國ニ脅威ヲ與フルガ如キ海軍計畫ヲ遂行スルトキハ、其ノ一國ハ直ニ自國ノ保有量ヲ增加シテ之ニ對應スルコトガ出來ル、斯カル場合ニハ、三國中ノ其ノ他ノ二國ハ、現協定ノ基礎ニ變化ヲ與フルコトナクシテ、同樣ノ比率ヲ維持シツツ、其ノ保有量ヲ增加スルノ權利ヲ有スル旨ノ協定ヲ條約中ニ設クルコトトナリマシタ。斯クノ如ク、佛伊兩國ハ、結局今回ノ會議ニ於テハ、補助艦保有量ノ協定ニ參加シナイコトトナリマシタケレドモ、其ノ終局ノ參加ハ英國ノ切望スル所デアリマスカラ、今回ハ一應會議ヲ終了スルモ、閉會スルノデハナイ、休會ニ過ギナイモノデアル、從テ佛伊兩國トハ引續キ交渉ノ餘地ガ存スルノデアルト云フ形式ヲ採リマシテ、條約ニモ五國相並ンテ調印シ、但シ日英米三國ノ關スル限リニ於テハ、其ノ三國ノミノ批准書寄託ヲ以テ條約ノ效力ヲ發生セシムルコトニ決シマシタ。遂ニ四月二十二日、本會議ノ總會ニ於テ條約ノ調印ヲ了シタノデアリマス。

條約調印後ノ情勢ヲ見マスルニ、世界ノ輿論ハ、一般ニ本條約ヲ歡迎シ、殊ニ英米兩國ニ於テハ、本條約ニ依リ、日英米三國間ニ、總テノ艦種ニ亘ツテ造艦競爭ヲ避ケ得タルコトヲ悅ンデ居ル實情ハ、縷々申述ベル迄モアリマセヌ。尤モ英國ニ於テハ、保守黨中「ウインストン、チャーチル」氏ノ一派及「ゼリコー」「ビーティー」兩元帥ヲ首班トスル海軍軍人ノ一部ハ、英國海軍ガ本條約ニ依リテ其ノ傳統的優勢ヲ破壞セラレ、米國ニ對シテモ日本ニ對シテモ不利ノ地位ニ陷リタリトテ、本條約ニ反對シテ居リマス。又米國上院ニ於テモ反對論ヲ唱フル者ガアリ、本案審議ノ際意見ヲ聽取セル海軍軍人二十四名中、條約ヲ贊認セルハ僅々二人ニ過ギマセヌ。此等多數軍人ノ反對理由ハ、本條約ガ對英均勢ヲ確保セズ、又米國ニ取リテ最不利益ナル太平洋防備制限約定ノ存續スルニ拘ラズ、日本ニ對シ「ワシントン」條約ノ定ムル所ニ超過セル比率ヲ認メタノハ謂ハレナキ讓步デアルト云フ點デアリマス。斯クノ如ク、英米兩國共ニ政治家軍人ノ中ニハ、各々其ノ特殊ノ立場ヨリ條約ニ反對スル者ガアリマスケレドモ、輿論ノ大勢ニハ殆ド何等ノ反響ヲ與ヘテ居リマセヌ。一般人心ノ歸向ハ、自ヲ明瞭デアルト信ジマス。

財部海軍大臣「ロンドン」會議ノ經過並ニ成績ニ付キマシテハ、只今內閣總理大臣及外務大臣ノ述ベラレマシタ所、並ニ

御手許ニ差上ゲテアリマス説明書等ニ依ッテ御諒解ノコトト存ジマスルガ、尙ホ專門ノ立場カラ見マシタ所ヲ若干補足致シマス。

帝國政府ガ「ロンドン」會議參加ニ決シマシタ趣旨ニ基テ、海軍トシテハ、凡ソ次ニ申上ゲル樣ナ對策ヲ立テタノデアリマス。

第一、主力艦ニ就テハ、華府條約規定ニ依ル代換ノ開始ヲ、各國共ニ成ルベク繰延ブル事、尙ホ之ガ纏ラナイ場合ハ、艦型ノ縮少、艦齡ノ延長並ニ代換建造ノ年度割ヲ繰延ベ、每年ノ建造量ヲ小ニシテ、製艦費ノ輕減ヲ計ル事。

第二、別ニ補助航空母艦ナルモノノ存在ヲ認メズ、凡ベテ航空母艦トシテ華府條約規定ノ各國保有量ノ內ニ於テ之ヲ賄ヒ、以テ海上航空兵力ノ過大トナラザル樣ニスルト共ニ、製艦費ノ節約ヲ計ル事。

第三、補助艦ニ關シテハ、多年國防用兵計畫當事者ガ研究ノ結果到達致シマシタ現作戰計畫ヲ遂行スルニ、最モ有效ニシテ且經濟的ナル兵力、則チ隣國亞米利加ノ兵力ニ對シ、總括的ニ七割ノ勢力ヲ持チ、其ノ內容ニ於テ八吋巡洋艦、則チ遠洋作戰ニ適スル大型巡洋艦ハ七割、又潛水艦ハ配備ノ方法並ニ艦型ノ大小等ヲ考慮シテ決定シタ約七萬八千噸ヲ保有シ得ル樣ニスル事。

如斯クシテ、米國ノ保有兵力量ノ減少ニ伴テ我モ亦縮少シ而カモ國防上遺憾無イ樣ニスル事。

第四、一般ニ艦型ヲ小ニシテ艦齡ヲ延長シ、以テ每年ノ製艦量ヲ減ジテ國費ノ節約ヲ計ル事。

大體之等ノ對策ヲ立テマシテ、軍縮會議ニ應ズルコトニシタノデアリマス。爾後ノ交渉經過ニ付キマシテハ、只今外務大臣ヨリ報告サレマシタ通リデアリマスガ、其ノ結果到達シマシタ本條約ノ內容ヲ要約シテ申上ゲマスト、

一、主力艦ニ關シマシテハ、華府條約規定ノ代換期ヲ五年間繰延ベル事ニ協定サレマシタ。又同條約ノ規定ニ依リマスレバ、日、英、米ノ主力艦隻數ガ九、十五、十五ニナリマスノハ千九百三十六年頃デアリマスガ、日本一隻、英國五隻、米國三隻ヲ今次ノ協定ノ結果トシテ廢棄スル事ニナリマシタカラ、同年ヲ待タズ之ガ實現サレ、三國間ノ比率ガ明

確ニナリマシタ。

二、一萬噸以下ノ小航空母艦ハ制限外デアリマシタガ、之ヲ大型ノモノト等シク華府條約規定ノ各國保有量內デ賄フ事ニ協定サレ、事實上航空母艦ナルモノヲ少クスル事ニナリマシタ。

三、補助艦ヲ一括シテ考ヘマスト、今次ノ協定ニ依ル英、米ノ保有兵力ハ、從來豫想サレテ居タ所ヨリモ餘程少ク、五十四萬噸又ハ五十二萬六千噸ニナリマシタ。之ハ我國ニトッテモ極メテ好都合デアリマス。而シテ我國ノ保有量ハ三十六萬七千噸デアリマシテ、米國ニ比シテ六割九分七厘五毛ニ當リ、略ボ所期ニ達シテ居リマス。英國トノ割合ハ六割七分七厘五毛ニナリマス。

尙ホ此ノ協定ニ依ル兵力量ヲ各國ノ現有勢力ニ較ベマスルト、日本ハ約五萬噸、英國ハ六萬七千噸、米國ハ四萬七千噸許リ（議會通過ノモノ全部ヲ現有勢力ト見レバ約十五萬噸）ノ減少ニナリマス。

四、八吋砲巡洋艦ハ、日本ハ既定計畫ヲ其ノ儘遂行シ、米國ハ、既ニ議會ニ於テ二十三隻ノ建造ノ協贊ヲ得テ居ルニ係ラズ、之ヲ十八隻ニ減ジ、且其ノ內十五隻丈ヲ千九百三十五年迄ニ完成スル事ニナリ、又英國ハ、會議ノ始マル前ニ決定シタ縮少計畫ヲ遂行スルコトニナリマシタ。尙ホ米國ハ八吋砲巡洋艦ヲ十五隻ニ止メ、代リニ六吋砲巡洋艦ヲ增加スル撰擇權ヲ持テ居リマスガ、此ノ「オプション」ヲ行使セズシテ十八隻ヲ全部建造スル場合ニハ、千九百三十六年以後ニ於テ我對米比率ガ低下スルコトトナリマスガ、千九百三十五年迄ハ、我原主張ノ比率ヲ維持スルコトガ出來得ルノデアリマス。

五、六吋巡洋艦ハ、現有兵力ヨリ日、米共若干殖ヘルコトニナリ、英國ノミ減ズル結果トナリマシタガ、我國ノ保有量ハ對米七割デアリマス。今回ノ會議ニ於テ、此ノ型ノ船ノ大キサヲ八吋砲艦以下ニ小サク制限スルコトガ出來ナカッタ爲ニ、將來此種巡洋艦ハ怖ルベキ武器ニナルト思ヒマス。米國ハ、昭和二年ノ壽府會議ノ當時、此ノ型ノ船ハ自國ニ無用トシテ現有ノ七萬餘噸ニ滿足シテ居リマシタガ、今回ハ更ニ七萬餘噸餘計持ツ事ニナッタノデアリマス。

六、驅逐艦ハ、米國ハ殆ンド現有勢力ヲ半減シ、英國モ四萬六千噸許リ縮少シマシタ。我國モ二萬七千噸程減ズル事ニナリマシタガ、日本保有兵力ノ英、米ニ對スル比率ハ七割デアリマス。

七、同ジク補助艦ノ一タル潛水艦ハ、英、米共ニ全廢論ヲ捨テ、又我國ニ對シテ不平等ノ割當ヲスル事ハ止メマシテ、日、英、米三國五萬二千七百噸均等ト云フコトニナリ、我國當初ノ要求ヨリモ二萬五千噸許リノ減少ヲ見マシタ。之ハ既定ノ作戰計畫ヲ遂行スル上ニ於テ困ルノデハアリマスルガ、英國モ約七千五百噸、米國モ約三萬噸現有勢力ヨリ減ジタノデアリ、又我國トシテハ、潛水艦減少ノ代リニ驅逐艦等ヲ七割持チ得ルコトニナツタノデアリマスカラ、此ノ代償ヲ充分ニ利用シ、尙ホ足ラザル所ハ制限外ノ兵力、例ヘバ、航空兵力、制限外艦船ノ如キモノデ補ヘバ、國防計畫上支障ナキモノト信ジテ居リマス。

尙ホ潛水艦ヲ戰時非人道的ニ使用シナイ協定ガ、五國間ニ成立シマシタ。

八、制限外艦船ノ問題、竝ニ從來極マツテ居ナカツタ艦種ノ艦型、艦齡、備砲等ノ問題ハ、先年ノ壽府會議ニ於テ假リニ協定サレタ所ヲ基礎トシテ適當ニ協定サレマシタ。

九、一國ノ海軍軍備上、造船能力ガ至大ノ關係ヲ持ツコトハ申ス迄モアリマセン。今次ノ協定兵力量ハ大體ニ於テ現有勢力ヨリ減ジタノデアリマスカラ、動モスルト數年一切造ラナクテモ宜イ艦種ガ出テ參リマス。之ハ造船能力維持上好マシカラヌ事デアリマスガ、此ノ點ヲ考慮シテ若干ノ繰上造船ヲナシ得ル權利ヲ認メテアリマス。

要スルニ、此ノ條約ハ帝國ノ主張全部ヲ其ノ儘貫徹シ得タモノデハアリマセヌガ、然モ之デ此ノ條約ノ有效期間國防ノ不安ヲ招クモノデナイト確信致シテ居リマス。尙ホアラユル機會ニ於テ之ヲヨリ善キモノニスル意志ヲ表明シテ置クコトガ必要ト認メマシテ、條約中ニモ次ノ會議ニハ各國共自由ノ立場ニアルコトヲ表明シ、尙ホ調印式當日、若槻全權ハ調印ニ同意スルニ至ツタ趣旨ヲ聲明サレタノデアリマス。

本條約ヲ通觀致シマスルニ、英、米ノ補助艦保有量ハ、兩國ガ華府會議竝ニ壽府會議ノ際ニ主張致シマシタ所ト較ベテ

著シク縮少セラレテアルノデアリマス。例ヘバ、華府會議ノ時、米國ハ英、米補助艦總量ヲ五十四萬噸（巡洋艦、驅逐艦四十五萬噸、潛水艦九萬噸）、而シテ日本ニハ其ノ六割ト提案シマシタガ、英ノ全權「バルフォア」氏ハ、艦隊附屬ノ用務ニ服スル補助艦ノ量トシテ澁々之ヲ應諾スルガ如キ口吻ヲ洩ラシタニ過ギマセヌ、英國ノ國情上、艦隊附屬以外、例ヘバ交通路ノ保護ノ爲ニ多數ノ補助艦ヲ要スル事實カラ思ヒ合ハセルト、假リニ補助艦協定ガ出來タニシテモ、其ノ實際ノ保有量ハ蓋シ莫大ナルモノデアリマセウ。又壽府會議ノ時、米國ハ會議ノ劈頭英米ノ補助艦ヲ六十四萬噸（巡洋艦三十萬噸、驅逐艦二十五萬噸、潛水艦九萬噸）乃至五十一萬噸（巡洋艦二十五萬噸、驅逐艦二十萬噸、潛水艦六萬噸）ノ間ニキメ、而シテ日本ニ其ノ六割ヲ割當テント提案シタノデアリマスガ、英國ハ、其ノ國情上巡洋艦ノ多數ヲ必要トスル事ヲ强調シ、隻數ニ於テ七十隻、之ヲ英國ノ申出シマシタ艦型ニ依テ逆算スレバ、實ニ六十萬噸ニ上ル巡洋艦ヲ要求スルガ爲ニ、米國ハ聊カ之ニ引摺ラレテ、英、米巡洋艦四十萬噸、驅逐艦二十二萬噸、潛水艦六萬噸、合計六十八萬噸ニ妥協スル形勢ニナツタノデアリマス。之レハ我全權ノ努力ニ依ツテ壞ハレマシタガ、會議決裂前英國ノ提示シタ最終案ニ於テモ、有效艦齡內ノモノ五十九萬噸、外ニ艦齡超過艦ヲ其ノ四分ノ一丈ヲ保有シ得ルコトニシタイト云フノデアツテ、總量ハ約七十四萬噸ニナリマス、斯樣ニ過去ニ於テ、英國ハ少クモ六十餘萬噸ノ補助艦ヲ保有センコトヲ主張シ、米國ハ何處迄モ之ト均勢、而シテ日本ニ對シテハ始メ先ヅ六割ヲ割當テルノヲ例トシタノデアリマス。然ルニ今回ハ英國五十四萬噸、米國五十四萬噸又ハ五十二萬六千噸デ滿足シ樣ト云フノデアツテ、實ニ豫期以上ノ縮少ト云ハネバナラヌト思ヒマス。其ノ斯クアリ得タモノハ、英國ガ勞働黨ノ天下デアリ、米國ガ「フーヴァー」氏ノ如キ熱烈ナル軍縮論者ヲ大統領ニ載イタル爲デモアリ、又今日ノ世界的不景氣ト云フガ如キ時代ノ力モ大ニ加ハツテ居ルト思フノデアリマス。若シ英、米双方又ハ何レカノ當事者ガ代ツテ居ルカ、或ハ世ノ中ガモット好景氣デアツタラ、果シテ斯樣ナ結果ニナリ得タラウカ、則チ今回ノ會議ノ此ノ現象ハ極メテ稀有ノモノト云フベキカト思フノデアリマス。兎ニ角英、米兩國ガ豫想外ノ小兵力デ滿足セントスル此ノ機會ヲ捉ヘテ協定ヲスルト云フコトハ、帝國國防ノ大局ヨリ見テ極メテ有利ナコトデ、

自分ハ、專門的ニハ多少不滿ノ點アルトシテモ、此ノ機會ヲ逸シテハナラヌト考ヘマシタ。又我國ガ米國ニ對シテ少クモ七割ノ兵力ヲ持チタイト云フ事ハ、華府會議當時カラノ主張デ、シカモ今日迄幾度カ戰ツテ容レラレナカツタ問題デアリマス。今回ノ會議ニ於テモ、下交渉ノ時カラ英、米何レモ反對シテ居タ事ハ、先程外務大臣說明ノ通デアリマス。然ルニ永イ間折衝ノ結果、遂ニ略ボ之ヲ容認スルニ至リマシタ、素ヨリ內容ニ於テハ不滿ノ點モアリマス、然シ之ハ今後ノ會議デ爭フトシテ、先ヅ其ノ外輪外廓ヲ此ノ機會ニ於テ獲得スル事モ、極メテ重要ト考ヘタノデアリマス。

此二點ハ、本條約ヲ審査サレマス上ニ必要カト存ジマシテ、申添ヘテ置キマス。之ニテ私ノ說明ヲ終リマス。

伊東委員長　總理大臣始メ外務大臣、海軍大臣ガ、暑氣ニ拘ラズ出席說明ノ勞ヲ執ラレタルヲ謝ス。質問等ハ次回ニ讓ルコトトスベク、政府當局各位ハ之ニテ御退席アリ度シ。

次回開會ノ期日ハ追テ通報スベシ。次回ヨリハ、三大臣全部ノ出席ヲ必ズシモ要セザルベキニ付、審査ノ問題ニ依リテハ、其ノ主管大臣ノミノ御出席ヲ求ムルコトトスベシ。

散　會

（各大臣ノ說明ハ、豫メ準備シタル草稿ニ依リタルモノナリ。草稿ハ、再ビ各大臣ノ閱覽訂正ヲ經テ、樞密院書記官ニ送付シタリ。）

第三回「ロンドン」海軍條約審査委員會

一、場　所　樞密院事務所

二、日　時　昭和五年八月二十六日午後一時開會午後三時四十五分散會

三、出席者

樞密院側　倉富議長、平沼副議長、伊東委員長、各委員、二上書記官長、書記官

政府側　濱口總理大臣、幣原外務大臣、財部海軍大臣

四、議事要旨

金子委員　新聞紙ノ傳フル所ニ依レバ、政府ハ我々ト一戰ヲ辭セズト云フガ如キ言辭ヲ弄シ、樞密院ト政府トガ相對峙シテ抗抗スルモノナルガ如キ感想ヲ抱カシムルモノアリ。我々ハ決シテ斯カル態度ヲ執ルモノニアラズ、樞密院創設ノ趣旨ヲ體シ、政府ト和衷協同シテ御諮詢案ヲ審議セントスルモノナリ、決シテ政府ニ向ツテ反對ヲ事トシ、內閣ヲ窮地ニ陷レントスルガ如キ考ヲ有スルモノニアラズ。近來、樞密院ノ議事ニ關聯シ、種々ナル記事ノ發表ヲ見ルハ面白カラザルコトナリ。我々ハ誠心誠意審議ニ當ラントスルモノナルガ故ニ、政府當局ニ於テモ、率直ニ萬事ヲ打明ケテ答辯セラレンコトヲ希望ス。

先ヅ外務大臣ニ質問シ度シ。政府ハ、酷暑ノ候ニ我々ガ休暇中ナルニ拘ラズ、何故殊更ニ本案ノ審議ヲ急グモノナリヤ、其ノ理由如何？

幣原外務大臣　理論上將又法律上、何時迄ニ本條約ノ御批准アルコトヲ要スト云フ理由ナキモ、唯ダ實際ノ便宜上ノ問題トシテ、速カニ御批准ノ成立ヲ希望スルモノナリ。關係各國ノ批准モ未ダ全部揃ヒタル次第ニアラズ、米國及英本國ハ既ニ批准ヲ濟マセ、英國海外領土ノ批准手續モ近ク完了ノ見込ナルガ、英國當局ノ內話スル所ニ依レバ、「アイルラン

ド」自由國ハ、議會休暇中ナル爲批准ノ手續ヲ進ムルコト能ハズ、依テ英本國政府ニ於テハ、「アイルランド」ニ於テ臨時議會ヲ召集スルカ、又ハ議會ヲ開クコトナク批准ヲ行フ特別ノ便法ヲ講ズル樣交渉セントスル意嚮ヲ有スル由ナリ。我國トシテモ、便宜上ノ問題トシテハ速ニ御批准アルヲ望マシキ事ト考フルモ、何時迄ニ其手續ヲ完了スベシト云フガ如キ法律上ノ理由存スルニアラズ。

金子委員　外務大臣ノ答辯ニ依レバ、本條約ノ批准ハ何時ニナリテモ差支ナシトノ趣旨ト了解スベキヤ？

幣原外務大臣　便宜上ノ問題トシテハ、一日モ早ク御批准決定ヲ見ルコトヲ希望スルモノナリ。例ヘバ、實際問題トシテ、本條約ニ規定セル主力艦ノ處分ノ如キ、本條約ノ實施ガ遲ルレバ、維持費等ノ關係ニ於テ其レ丈餘分ノ經費ヲ要スル譯ナリ、從テ實際ノ便宜上ノ問題トシテ、速ニ御批准アランコトヲ望マシキコトト考フルモノナリ。

金子委員　若槻、財部兩全權出發前ニ於テ、一度印度洋經由渡英ノコトニ決定シ、船室ノ豫約迄了シキタルニモ拘ハラズ、出發直前ニ至リ、米國側ノ要求ニ依リ急ニ豫定ヲ變更シ、米國經由會議地ニ赴クコトトナリタリト云フハ、如何ナル理由ニ依ルカ？

幣原外務大臣　兩全權ハ、最初印度洋經由ノ途ヲトルカ決定シ居ラザリシ折カラ、正式ノ案内アリタリト云フ譯ニハアラザルモ、米國側ヨリ、若シ日本全權渡英ノ途上米國ヲ經由セラルルニ於テハ、米國トシテ欣快トスル所ナリトノ意嚮ヲ通ジ來リ、全權ニ於テモ、米國經由ヲ有益ト考ヘ、之ニ決定シタリト云フ迄ニテ、別ニ複雜ナル經緯アリシニアラズ。

金子委員　海軍大臣ハ「ロンドン」會議ヘ出發前、海軍大臣官邸ニ各方面ノ人士ヲ招キ、我要求ノ三大原則ヲ高調セラレ、此ノ要求ハ絶對ニシテ、如何ニシテモ貫徹セザルベカラズト云ハレタリトノコトナルガ、右ハ事實ナリヤ？

財部海軍大臣　事實ナリ。主ダチタル人士ニ對シ、三大原則ヲ說明シ、之ヲ會議ニ於テ主張スル積リナル旨ヲ述ベタリ。然レドモ、此ノ主張ガ通ラザル場合ニ、會議ヲ決裂サセルカ否カト云フ事實問題ニ處スルコトハ、自ラ別問題ナリ。本

條約ノ骨子トナリタル所謂假妥協案ハ、三大原則ガ全部成功セルモノト云フコトヲ得ザルモ、會議ノ經過ニ徵シ、英米側ノ步ミ合ヒ來レル程度ニ於テ其ノ妥協案ヲ不成立ニ終ラシムルコトハ、大局上我ニ不利益ナリト確信セルヲ以テ、之ガ受諾ニ同意セルモノナリ。

金子委員　若槻全權ノ「シアトル」其ノ他米國各地ニ於ケル聲明ハ如何ナル内容ノモノナリヤ？

幣原外務大臣　若槻全權聲明ノ寫ヲ所持シ居ラズ、又其ノ内容モ記憶シ居ラズ、然レドモ、若槻全權ガ、右聲明中ニ於テ我七割要求ノ主張ヲ述ベラレ居ルトスルモ、右ハ全權トシテ不當ノコトニアラズト思考ス。

金子委員　右聲明ノ寫ヲ得度シ。

幣原外務大臣　（諒承）

金子委員　「ロンドン」ニ於テ、松平「リード」兩全權間ニ行ハレタル私的會談ノ經過如何？

幣原外務大臣　非公式會談ハ、松平「リード」間ノミナラズ、齋藤「クレーギー」間ニモ行ハレ、兩々相俟チテ進行セルモノナリ。此ノ點ニ關シテハ前回ニ詳細申述ベタル通ナルガ、再ビ繰リ返ヘシ說明スベシ。（前回外務大臣說明中、此ノ點ニ該當スル部分ヲ再說）

金子委員　右自由會談開始後ハ、海軍顧問及海軍專門委員等ハ全然相談ニ與ラザリシト聞ケル處、右ハ事實ナリヤ？

財部海軍大臣　事實ニ非ズ、逐一相談シタリ。數字ノ如キハ、專門委員ノ手ヲ借ルコト絶對ニ必要ナリ。自分モ歸朝後右樣ノ噂ヲ耳ニシタルコトアルモ、全然事實ニ相違セリ。

金子委員　全權ガ妥協案ニ關スル請訓ヲ爲ス前ニ於テ、潛水艦問題ニ付、安保大將ガ米國專門委員ト會談シタル處、米國委員ハ讓步ノ意嚮ヲ示シタリ、然ルニ若槻全權ハ安保大將ノ努力ヲ無視シ、潛水艦保有量五萬二千七百噸ヲ承諾シタリトノ話ヲ聞ケリ。右ハ事實ナリヤ？

財部海軍大臣　自分モ同樣ノ噂ヲ耳ニシタルコトアリ、然レドモ事實ニ相違ス、或ハ爲ニスル人ノ言ナルベシ。稍痕跡ア

ル事ナルモ、右ハ請訓前ノ出來事ニアラズシテ、回訓接到後ノ出來事ナリ。回訓接到ノ後、安保大將ガ、造艦能力維持、潛水艦驅逐艦融通等ノ問題ニテ、米國側ノ「ブラット」大將ト會談シタル際、「ブラット」大將ヨリ、貴下ノ立場ハ良ク了解セリト答ヘタル事實アリ。然レドモ、右ハ米國全權側ノ意見ヲ代表シタルモノニアラズ、自分達モ其ノ後「ブラット」大將ニ會見シ、又米國全權トモ交渉シタルガ、潛水艦保有量ニ付テハ絶對ニ讓歩スルコトヲ拒ミタリ。元來私談ノ際ニハ、明確ニ意見ヲ斷言スルコトヲ避ケ言辭ヲ濁スコトモアリ、自分達ニ於テ其ノ後交渉シタル結果ニ依レバ、潛水艦保有量ノ問題ニ關シテハ、英米側ニ於テ讓歩セズ、我要求ヲ貫徹スルコト能ハズシテ終リタリ。

金子委員　妥協案ノ性質如何？

幣原外務大臣　既ニ說明セル通、一方ニ於テハ松平「リード」間、他方ニ於テハ齋藤「クレーギー」間ニ夫々會談ヲ行ヒ、此ノ兩者ノ會談ノ進捗ニ伴ヒ自然生レ出デタル假妥協案ニシテ、右以外ニ格別ノ意義アルモノニアラズ、又我全權ニ於テ之ニ承諾ヲ與ヘタルモノニモアラズ、唯ダ全權ニ於テ、右案ヲ政府ニ傳達シテ請訓スルニ至レルモノナリ。

金子委員　米國上院ニ於テハ、總テ祕密協約ハ上院ニ報告セザルベカラズトノ强硬ナル主張アリタルガ、「スチムソン」國務長官ハ、之ヲ提出スルコト能ハズト拒絶シタルヲ以テ、其ノ結果、祕密協約ヲ否認スル趣旨ニテ留保ヲ附スルコトトナリタリ。我政府當局ニ於テモ、樞密院ニ祕密協約ヲ提出セラルルコト可然ト思考ス。

幣原外務大臣　右ハ金子子爵ノ思ヒ違ヒニアラズヤト思考ス。米國上院ニ於テ祕密協約ノ存在肯定セラレタルコトナシ、唯ダ上院ガ海軍問題ノ交渉ニ關スル「ドーズ」大使及米國政府間ノ往復電報、其ノ他會議開會後政府ト全權トノ間ニ往復セラレタル文書ヲ總テ提出センコトヲ求メタルニ對シ、政府ハ內部關係ノ文書ナルヲ以テ提出スルコト能ハズト拒絶シタルモノナリ。又米國政府當局ハ上院ニ對シ、今次ノ「ロンドン」條約ニ關聯シテ祕密協約ノ存スルモノナシ、條約ノ解釋ハ條約其ノモノニ依リテ判斷セラルベキモノナリトノ趣旨ノ說明ヲ與ヘタリ、茲ニ於テ、上院ハ其說明ニ基キ、祕密協約ナシトノ了解ノ下ニ批准ヲ與フベキモノト議決シタル次第ナリ。

金子委員　然ラバ祕密協約ハ全然存在セザルモノナリヤ？

幣原外務大臣　全然存在セズ。

金子委員　憲法第十一條第十二條ノ解釋ニ付、議會ニ於テ、海軍條約ニ關聯シ質問アリタルガ、總理大臣ハ之ニ答辯ヲ與ヘ居ラズ、總理大臣ハ本問題ニ關シ果シテ如何ニ思考セラルルヤ？

濱口總理大臣　本問題ニ付テハ、議會ニ於テ答辯セル通ナリ、卽チ、今次ノ海軍條約ニ付テ執リタル政府ノ措置ニ付テハ、憲法ノ解釋ヲ決定スル必要ヲ生ゼザリシモノナリ。

尙ホ、發言ノ機會ナカリシ爲答辯ヲ差控エ居リタルモノナルガ、金子子爵ハ和衷協同審査ニ當ルト述ベラレタル處、政府モ勿論其ノ趣旨ニテ說明ニ當リ居ルモノナリ。樞密院ト一戰ヲ交フルト云フガ如キ考ハ毫モ有シ居ラズ。又御諮詢案決定時期ノ問題ニ付テハ、外務大臣ノ述ベタル所ト全然同意見ナルガ、自分トシテハ、同時ニ國際關係以外ノ對內關係ヨリモ御批准ノ一日モ速ナランコトヲ希望ス、卽チ、御批准決定ト否トハ豫算ノ編成ニ關係スル所大ナルヲ以テ、豫算編成以前ニ御批准決定アランコトヲ希望スル次第ナリ。

金子委員　自分ハ追テ帷幄上奏、及軍事參議院ニ於テ省部意見ノ一致ヲ要スル旨ノ覺書ヲ作成シタリト云フガ如キ問題ニ付テモ質問シ度キ考ナルガ、之ハ他日ノ討議ニ讓ルコトトスベシ。唯ダ總理大臣ノ答辯ハ批准ヲ早ク了シ度シト云フ趣旨ナリシガ、幣原外務大臣ハ批准ハ何時ニテモ可ナリト述ベラレ、其ノ間矛盾スル所アルヲ指摘シ置クベシ。

幣原外務大臣　矛盾トハ如何ナル點ニ關シテナリヤ？自分ハ法律上又ハ理論上ハ何日迄ト日限ヲ切リ本條約ノ批准ヲ了スルコトヲ必要トスル理由ナキモ、實際ノ便宜上ノ問題トシテハ一日モ早ク御批准アランコトヲ希望スル旨ヲ述ベタルモノニシテ、其ノ點ニ於テ總理大臣ノ述ベタル所ト異ナル所ナク、其ノ間ニ矛盾スル所ナシト思考ス。

伊東委員長　自分モ矛盾スル所ナシト思考シ、良ク了解セリ、從テ外務大臣ハ其ノ點ニ介意セラルルニ及バザルベシ。

財部海軍大臣　軍事參議官ノ非公式會合ニ於テ省部互涉問題ノ取扱方ヲ協議シ、其ノ後正式ニ勅裁ヲ經テ海軍部內ニ內令

トシテ發令セラレタル覺書アリ、其ノ覺書ハ此ノ席上朗讀スルモ可ナリ。

金子委員　右覺書ノ寫ヲ得度シ。

（財部海軍大臣ヨリ覺書寫ヲ金子委員ニ手交ス）

伊東委員長　本日ハ此ノ程度ニテ質問ヲ打切リ度シ。

河合委員　一言述ベ度シ。自分ハ「ロンドン」海軍會議ニ於ケル我七割ノ要求ハ恐ラク懸値ニハアラザリシモノト思考スルモ、海軍大臣ノ說明ニ依レバ、之ヲ貫徹スルコトハ非常ニ困難ナリトシテ多少ノ讓步ヲ豫想サレ居リタルガ如シ。然ラバ何故先ヅ懸値アル主張ヲ出サザリシヤ？元來會議前ニ我主張ノ眞實ノ內容ヲ發表スルコトハ策ノ得タルモノニアラザル如シ、如何？又今次會議ニ當リ財部海軍大臣ガ自ラ「ロンドン」ニ赴キタルハ不利ナリシニアラズヤ？海軍大臣自身後悔セラレ居ル由ヲ海軍首腦部ノ人々ニ自白セラレタリトノコトナルガ、事實ナリヤ？又將來此ノ種會議開催セラルル場合ニハ如何セラルル心算ナリヤ？

財部海軍大臣　日本ノ七割主張ハ懸値ニアラズ、然レドモ之ガ貫徹ハ非常ニ困難ナリシモノナリ。河合顧問官ハ當初幾分ノ懸値アル案ヲ提出シタル方ガ可ナリシニアラズヤト述ベラレタルモ、七割主張ハ、前內閣時代ニ決定ノ上在英大使竝ニ在米大使ニモ之ヲ訓示シ、既ニ其ノ趣旨ヲ以テ英米側ト話ヲ進メ居リタル關係上、急ニ之ヲ改メテ八割九割ト提議スルコト能ハザリシモノナリ。實際ノ談判ニ當リテハ、事情ハ豫想シ居リタル所ト自ラ異ルモノアリ、當初英米ノ噸數ヲ低下セシムルコトハ非常ニ困難ナリト豫想セラレ、如何ニセバ我方ニ都合好キ程度迄低下セシメ得ルカ見込ヲ立ツルコト能ハザリシガ、恰モ英國ニ於テ勞働黨內閣成立シ、又米國ニ於テ「フーヴァー」大統領就任シ、加フルニ世界的不景氣ニ際會シ、此等ノ事情競合ノ結果、英米ノ噸數ノ低下ヲ見ルコトヲ得タルモノナリ。自分ハ此ノ好機ヲ捉ヘザルベカラズト考ヘタリ。「ロンドン」會議ニ於テ、日本ノ七割主張ガ其ノ外廓丈ニテモ貫徹シ得タルコトハ確ニ一進步ナリ。固ヨリ其ノ內容ニ於テハ必ズシモ滿足ナルモノニアラズ、卽チ大型巡洋艦ノ七割ハ要求通之ヲ認メシムルニ至ラザリシガ、

元來八吋砲巡洋艦ニ對シテ六吋砲艦ヲ輕巡洋艦ト稱スルハ用語ニ於テ不適當ナリ、本條約ニ所謂(乙)級巡洋艦ハ大型タルコトヲ得ルモノニシテ、現ニ米國ニ於テハ九千噸ノ(乙)級巡洋艦ヲ考案シ居レリトノコトナルガ、右ハ確ニ大型巡洋艦ナリト云フベク、我國ガ(乙)級巡洋艦ノ艦級ニ於テ七割ヲ取得セルコトハ一進步ナルコト疑ナシ。又驅逐艦ヲ多量ニ保有スルモ實益ナシト云フ者アルモ、驅逐艦モ亦必要ナルモノニシテ、平時竝ニ戰時共ニ驅逐艦ノ活動ニ待ツモノ頗ル多ク、此ノ種艦船ノ相當量ヲ保有シ居ルコトハ重要ナル實益アリ。我主張ヲ宣傳セルコトニ付テハ當時ヨリ可否ノ說アルコトヲ承知セリ、然レドモ華府會議、壽府會議ノ際國論不一致ノ爲累セラレタルモノアリシ經驗ニ顧ミ、我主張ヲ貫徹スル爲ニハ先ヅ國論ノ統一ヲ圖ルヲ急務ト思考シ、之ニ努力シタル次第ナリ。其ノ結果ニ付テハ自分ヨリ申述ブルコトヲ避クベキモ、唯ダ日本ノ輿論ガ一致シテ全權ノ主張ヲ後援セルコトハ、「ロンドン」ニ在ル者ノ大ニ心强ク感ジタル所ナルコトヲ一言致シ置クベシ。自分ガ「ロンドン」ニ赴キタルコトノ利、不利ニ關スル御質問ニ對シテハ、答辯ニ惑フモノナリ、何レニ答辯ヲ爲スモ自畫自贊トナルヲ免レ難ク、答辯ヲ差控ヘ度シ。又將來ノ會議ノ場合ニ如何ニ措置スベキカニ付テハ、今日ヨリ何トモ言明スルコトヲ得ズ。自分ノ經驗ニ依レバ、海軍大臣不在期間ノ長短及行先ノ遠近ニ依リ利害異ルモノト思考ス、例ヘバ、行先ガ英國ノ如ク遠ク、不在期間ガ六七ケ月以上ニ及ブ如キ場合ハ不便ナルモ、之ニ反シ行先モ近ク（例ヘバ支那）不在期間モ短キ場合ニハ必ズシモ不便ト云フコト能ハザルベシ。過般海軍將官達トノ會談ニテ自分ハ此趣旨ノコトヲ話シタルモノナリ。何レニスルモ將來ノコトニ關シテハ今日ニ於テ何等明答スルコト能ハズ。

黑田委員　自分ハ外交文書ニ關シ相當時間ノ質問ヲナシ度キモ、次回ニ讓ルベシ。

伊東委員長　總理大臣ハ豫算編成ノ都合モアリ本條約御批准決定ノ一日モ速ナランコトヲ希望スル旨述ベラレタル處、右ハ自分ニ於テ了解シ難キ所ナリ、本條約ハ全權歸朝以來一ケ月以上ヲ經過シタル後初メテ御諮詢相成リタルモノナルガ、今日ニ至ツテ豫算編成迄ニ批准ヲ了セザレバ不都合ナリト云フハ解シ難シ、豫算ハ假リニ條約ノ通ニテ編成シ置キ、若

シ批准ナカリシ時之ヲ改訂スルモ亦可ナリト思考スルモ、ソハ他日ノ機會ニ讓リ、今日ハ之以上論ゼザルベシ。

散　會

（參　考）

兵力ニ關スル事項處理ノ件

海　軍　大　臣

左ノ通奉仰允裁候

兵力ニ關スル事項ノ處理ハ關係法令ニ依リ尚左記ニ依ル儀ト定メラル

海軍兵力ニ關スル事項ハ從來ノ慣行ニ依リ之ヲ處理スヘク此ノ場合ニ於テハ海軍大臣海軍軍令部長間ニ意見一致シアルヘキモノトス

理　由

海軍大臣ハ海軍軍政ヲ管理シ本省ノ一局ヲシテ海軍軍備其ノ他一般海軍軍政ニ關スル事務ヲ掌ラシムルコトハ海軍省官制ノ明示スル所ナルト共ニ海軍軍令部長ハ國防用兵ニ關スルコトヲ參畫スヘキコト海軍軍令部條例ノ定ムル所ニシテ兵力ニ關スル事項ハ海軍省及海軍軍令部兩者ノ所掌事項ニ包含セラルルヲ以テ其ノ關係ニ對スル從來ノ慣行ニ付此ノ際一層明白ナラシムル要アルニ依ル

内閣總理大臣宛

兵力ニ關スル事項處理ノ件報告

海　軍　大　臣

本件ニ關シ別紙ノ通本大臣ヨリ上奏裁可ヲ經タリ

（別紙前書ノ通一葉添）

内閣總理大臣宛

兵力ニ關スル事項處理ノ件照會

海　軍　大　臣

本件ニ關シ官房機密第、、、、號ヲ以テ報告致置候處今後共之ニ據ルコトニ可致候條右得貴意候

内閣總理大臣

海　軍　大　臣　宛

兵力ニ關スル事項處理ノ件回答

官房機密第、、、、號ノ照會受領致候

第四回「ロンドン」海軍條約審査委員會

一、場　所　樞密院事務所

二、日　時　昭和五年八月二十八日午後一時開會午後三時散會

三、出席者

樞密院側　倉富議長、平沼副議長、伊東委員長、各委員（久保田委員缺席）、二上書記官長、書記官

政府側　濱口總理大臣、幣原外務大臣、財部海軍大臣

四、議事要旨

金子委員　我々ハ今日熱心ニ且眞面目ニ本條約ノ審議ニ當リ居ルモノナリ、然ルニ外務省ニハ、傳統的ニ樞密院ニ對シ反抗ノ態度ヲ執ル傾向アリ、曩ニ不戰條約ノ審議ニ際シ、植原外務參與官ガ樞密院攻擊ノ言辭ヲ弄シテ問題トナリタルコトアリタルガ、今回モ亦外務省ニ於テ樞密院ニ對シ反感ヲ表白セル事例ヲ見ルハ甚ダ遺憾ナリト云ハザルベカラズ。新聞紙ノ傳フル所ニ依レバ、數日前日比谷ニ開催セラレタル一會合ニ於テ、永井外務政務次官ハ海軍條約ニ關スル演說ヲナシ、若シ樞密院ガ譯ノ分ラヌ言動ニ出デ海軍條約ノ成立ヲ阻礙スルナラバ、我々ハ斷乎トシテ樞密院ニ對シ痛擊ヲ加ヘルデアラウト云フ樣ナコトヲ放言シタリト云フ。Japan Times ニハ、永井次官ガ樞密院ノ Superannuated and cranky gentlemen ニ對シ痛烈ナル打擊ヲ加ヘルトノ暴言ヲ吐キタル由ノ記事アリ。外務大臣ハ此事實ヲ知ラザルカ？何故永井次官ノ斯クノ如キ言動ヲ默過スルカ？

幣原外務大臣　外務省ガ傳統的ニ樞密院ニ對シ反抗ノ態度ヲ執ルトイフガ如キコトヲ聞クハ洵ニ意外千萬ナリ。不戰條約ガ樞密院ニ附議セラレタル際ハ、予ハ職責ニ當リ居ラザリシヲ以テ其ノ當時ノ經緯ニ付テハ眞相ヲ承知セザルモ、永井政務次官ガ今回演說中樞密院ヲ評シテ Superannuated and cranky ト云フガ如キ言辭ヲ用ヒタリトハ想像スルコト能ハ

ズ、新聞記事ハ恐ラク演說ノ速記ニ依リタルモノニアラズシテ、世人ノ興味ヲ牽ク爲ニ面白可笑ク紛飾シタルモノナルベシ。

金子委員　外務大臣ニ於テ斯カル事ナシト信ゼラルルト云フノミニテハ事實ノ有無判明セズ、本人ニ付テ其ノ眞相ヲ確メラレタシ。

今次ノ海軍條約ニ於テ補助艦保有量ノ制限ヲ協定シタルハ日英米ノ三國ナルガ、此ノ協定ニ於テ最モ不利益ナル地位ニ立ツモノハ日本ナリ。外務大臣ハ之ヲ以テ成功ナリト稱シ居ラルルモ、決シテ成功トハ認ムルコトヲ得ズ。「ロンドン」會議ニ於テ最モ辛キ目ヲ見タルモノハ日本ナリ。佛伊兩國ハ英米ニ拮抗シ最後迄自國ノ主張ヲ固持シテ屈セズ、堂々タル態度ヲ以テ會議ヲ終始セリ。日本ハ何故佛伊ト聯絡シ其强硬ナル態度ヲ利用セザリシカ？會議ニ於テ商議ガ大洋組大陸組ニ分レテ行ハルルコトトナリ、日本ハ大洋組ニ入リタル爲、大陸組ノ佛伊ト聯絡スル手段ヲ失フニ至リタルハ失敗ナリ、若シ佛伊ト提携シテ英米ニ當ルノ方策ニ出デタリトセバ、日本ハ今次ノ協定ノ如キ不利益ナル條件ヲ科セラルルコトナカリシナラント考フ。

幣原外務大臣　佛伊兩國ノ今次海軍會議ニ對スル態度ヲ見ルニ、佛國ハ當初ヨリ會議ニ對シ熱心ヲ缺キタリ。蓋シ佛國ニハ陸軍空軍ト引離シテ海軍ノミニ關スル協定ヲ行フコトヲ好マザル對內的事情存セリ。若シ陸海空三軍ニ付同時ニ協定ヲ締結スルモノトセバ、陸軍空軍ニ關シテハ各國ニ比シ優勢ナル地位ヲ保持スルコトヲ得ベキガ故ニ、海軍ニ關スル部分ニ於テ不充分ノ點アリトスルモ、全體トシテ大國タル面目ヲ保ツコトヲ得ベシ、然ルニ海軍ノミニ關スル協定ニ在テハ、佛國ニ割當テラルル補助艦保有噸數ハ日英米諸國ニ比シ著ク低キモノナルベク、爲メニ三等國四等國ニ低下セルガ如キ感想ヲ與ヘ、國內ノ不滿ヲ買フベキコト必定ナリ。又伊國ニ對スル關係ニ於テハ、佛國トシテ其ノ海軍力ヲ以テ保護セラルベキ利益ハ伊國ノ遠ク及ブ所ニアラズ、然ルニ「ワシントン」條約ニ於テ伊國ニ均勢ヲ許シタルハ重大ナル失態トシテ國民一般ノ激烈ナル非難ヲ招キタル所ナリ、仍テ今次ノ會議ニ於テハ、理論上ノ補助艦保有量ヲ莫大ナル噸數ニ定

メ、實際上ニ於テハ伊國ノ追從ヲ不可能トシ、以テ伊國ノ海軍勢力ヲ佛國ノ勢力以下ニ低下セントスル案ヲ立テタリ。然ルニ伊國ハ「ワシントン」ニ於テ得タル對佛均勢ヲ失ハザルコトヲ金科玉條トシ、一歩モ讓ラザル强硬ナル態度ヲ以テ佛國ニ對峙セリ。斯クノ如ク佛伊兩國ノ參加セル協定ハ到底成立ノ見込立タザル事情存シタルモノナルガ、此ノ情勢ハ佛伊兩國自身ニ於テ最モ能ク知ル所ナルガ故ニ、兩國共ニ會議ニ對シテ我等ト同樣ノ熱ヲ有セズ、其ノ補助艦協定ニ參加スルノ至難ナルベキコトハ、當初ヨリ略ボ豫想セラレタル所ナリ。日本ガ佛伊ト提携シテ英米ニ當ル態度ヲ執リタル場合ヲ想像スルニ、恐ラク佛伊ハ日本ヲ歡迎シテ共同戰線ヲ張リタルナルベシ、斯クシテ日本ハ英米ニ對抗シ之ニ反對スルコトニ於テハ、協定ヲ破壞スルノ目的ヲ達スルコトヲ得タルベシト雖、協定ヲ成立セシメムトスルノ目的ニ對シテハ、最後迄佛伊兩國ノ誠實ナル協力アルベキコトヲ期待スルヲ得ズ。日本ハ佛伊ト立場ヲ異ニシ、誠意ト決心トヲ以テ會議ニ臨ミタルモノナリ。而シテ英米ノ立場ヲ考フルニ、佛伊トノ協定ヲ希望シタルコト云フヲ俟タズト雖、其ノ可能性ニ至リテハ當初ヨリ確信ヲ有セズ、結局佛伊ノ協定參加ヲ斷念スルノ已ムヲ得ザルコトアルベキヲ覺悟シタルモノト認メラル。此際日本ガ佛伊ト相結ンデ英米ニ當リタリトスルモ、英米ガ之ニ恐ヲナシテ唯々諾々我要求ニ屈服スベシトハ考ヘラレズ、却テ英米ノ態度ハ之ガ爲益々硬化シテ、日本ノ參加ヲモ斷念シ、遂ニ英米二國間ニ海軍協定ヲ成立セシムルニ至ルベキコトヲ豫想セザルベカラズ。

英米二國間ニ海軍協定ガ成立シタル場合ノ結果ヲ考フルニ、第一ニ其ノ協定ハ英米共ニ事實上日本ノ保有量ヲ六割以下ニ低下セシムル如キ多量ノ補助艦噸數ヲ保有スルコトトシ、第二ニ英米間ニハ「ロンドン」條約第二十一條ト同樣ノ所謂保障條項ヲ設ケ、卽チ日本ガ英米ニ對シ六割以上ノ比率ヲ示スベキ補助艦建造ヲ行フ場合ニ於テハ自働的ニ英米ニ於テ自國ノ保有量ヲ增加スルト云フガ如キ內容ヲ有スル條項ヲ協定スルコトアルベシ。事茲ニ至ラバ、日本トシテハ英米二國協定ノ成立ニ據リ、常ニ危險ヲ感ズル地位ニ立ツコトトナルベシ。

今回「ロンドン」海軍協定ニ依リ、英米ガ曩ニ壽府會議ニ於テ主張シタル補助艦保有噸數ノ標準ヲ低下シタルハ、日本

ガ大陸組ヲ離レテ大洋組ニ入リ英米トノ協調ヲ圖リタルガ爲ナリ。若シ斯カル協調ナカリセバ、英米ノ補助艦保有量ハ遙ニ高噸數ニ昂リ、日本ハ事實上之ニ比例シテ多量ノ建造ヲ行ハザルヲ得ザルコトトナリ、我國ノ前途極メテ憂慮スベキ形勢ヲ誘致スルニ至ルベキモノト信ズ。

以上ノ形勢ニ鑑ミ、日本トシテハ佛伊ト進退ヲ共ニスルコトヲ賢明ナラズト考ヘタル次第ナリ。

金子委員　米國ハ驅逐艦二十五萬噸ヲ現有ス（正確ナル數字ハ約二十九萬噸ナリ）、然レドモ此ノ二十五萬噸ノ大部分ハ老朽艦ナリ、從テ今回ノ協定ニ於ケルガ如ク之ヲ十五萬噸ニ減少シ、其ノ餘分ノモノヲ廢棄スルトスルモ何等苦痛無キ譯ナリ。然ルニ日本ハ右協定ニ依リ、比較的新シク有效ナル驅逐艦ヲ廢棄スルコトトナルベシ。斯クノ如キ協定ノ内容ナルニ拘ハラズ、外務大臣ハ何ガ故ニ之ヲ日本ニ對シ有利ナリト云フカ？又潛水艦ニ付テハ、米國ハ之ヲ不必要ナリト主張シタルモノナリ、其ノ潛水艦ニ付テ日本ガ英米ニ對シ均勢ヲ得タリトスルモ何等ノ功名ト云フコトヲ得ズ。又英國ノ保有スベキ「ホーキンス」級四隻ハ何レモ口徑七吋半ノ備砲ヲ有ス、此ノ四隻ノ軍艦ヲ條約ニ規定シタル八吋砲巡洋艦ノ外ニ持ツコトトナルモノニシテ、英國トシテ甚ダシキ横暴ヲ遂ゲタルモノト謂ハザルベカラズ、之ニ反シ古鷹級ヲ八吋砲巡洋艦ノ部ニ入レタルハ、我國ニ取リ此ノ上モナキ不利ニアラズヤ、日本ハ何ガ故ニ斯カル事ヲ承諾シタルカ？

幣原外務大臣　第一ニ、驅逐艦問題ニ付テハ、成程米國ノ現有スルモノハ大部分老齢艦ナリ、然レドモ事ヲ以テ直チニ日本ニ不利益ナル協定ナリトハ云フコトヲ得ズ、日本ハ米國ノ十五萬噸ニ對シテ七割ヲ稍ヤ超過シタル驅逐艦ヲ保有スルコトヲ得ルコトトナリ居リ、比率ニ於テ不滿足トスル理由無シ。又日本ハ新式有力ナル驅逐艦ヲ廢棄セザルベカラズト云ハレタルモ、其ノ内容ヲ見ルニ、日本ガ千九百三十六年迄ニ艦齢超過トシテ廢棄スル驅逐艦約二萬六千噸程アリ、此ノ廢棄スベキ驅逐艦ハ何レモ艦齢超過艦ニシテ、其ノ老朽ノ程度ニ於テハ米國ノ舊式驅逐艦ニ比シ稍ヤ新シキモノモアルベキモ、何レニスルモ艦齢超過艦ナルコトニ於テハ差異無ク、從テ驅逐艦ニ關スル協定ヲ以テ、特ニ米國ニノミ有利ナルモノト考フルハ當ラズ。又代換ニ付テハ日本ニ對シ特例ヲ設ケ、一定ノ噸數ノ範圍内ニ於テ代換ノ繰上ゲヲ行フコ

トヲ得ルコトトナリ居ルモ、之ハ工業力維持等ノ關係ヨリ日本ノ要求ニ依リ設ケラレタルモノニシテ、日本ノ利益ナリ。

第二ニ、潛水艦ニ付米國ハ之ヲ不必要ナリト爲シタルコト貴説ノ如シ、然レドモ米國ガ潛水艦ニ重キヲ置カズ之ヲ無用ノモノナリト主張シタルニ拘ラズ、米國ヲシテ其ノ無用トスル潛水艦ヲ維持セシメテ之ヲ協定保有量中ニ算入シ、且日米ノ保有量ヲ對等ト定ムルコトヲ得タルハ、少クトモ米國ノ利益ト考フルコトヲ得ズ、米國側ヨリ之ヲ見レバ、不必要ナルモノヲ保有シ而カモ日本ニ均勢ヲ認メタル點ニ於テ、恐ラク苦情アルベシ。

第三ニ、英國ガ「ホーキンス」級四隻ノ七吋半砲巡洋艦ヲ有スルコト事實ナリ、然レドモ右四隻ノ中「ホーキンス」、「ヴィンヂクチーブ」ノ二隻ハ千九百三十六年以前ニ艦齢ニ達シ當然廢棄セラルルモノニシテ、他ノ二隻即チ「フロビッシァ」、「エフィンガム」ハ右期限迄ニ艦齢ニ達セザルモ、特例ヲ設ケテ廢棄ヲ繰上グルコトヲ得ルコトトナリ居レリ、斯クノ如ク「ホーキンス」級四隻ハ何レモ條約有效期限内ニ廢棄セラルルコトトナルモノニシテ、特ニ英國ノ横暴ト云フコトヲ得ズ。

金子委員　外務大臣ハ米國上院ニ於ケル海軍協定ノ議論ヲ讀マレタルヤ否ヤ？米國上院ノ議論ヲ見ルニ、日本ハ軍艦ノ建造ヲ中止シ、其ノ間ニ米國ハ日本ヲ追越シ、日本ニ比シ優勢ナル海軍ヲ有スルコトトナル協定ヲ日本ニ於テ承認シタリ。斯カル無理ナル協定ヲ認諾シタル日本ノ忍耐ニ對シ敬意ヲ表スト云フ趣旨ノ言辭ヲ用ヒ居レリ。

幣原外務大臣　本來補助艦ヲ「ワシントン」會議以後眞先ニ建造シ始メタルハ、米國ニアラズシテ米國以外ノ諸國ナリ、從テ米國ハ他國ノ造艦ノ進捗ニ鑑ミ、自國モ亦巡洋艦建造ヲ計畫スルコトヲ必要トスルニ至リタルモノナリ。「ジュネーヴ」會議ノ開催ヲ米國ガ唱ヘタルハ此ノ造艦競爭ノ形勢ニ鑑ミタルモノナルガ、同會議ハ失敗ニ歸シタルヲ以テ、米國トシテハ他國ノ造艦ニ追付ク協定ヲ結ブコトヲ必要トスルニ至リタルモノナリ。苟モ一定ノ比率ヲ以テ軍備ノ制限ヲ協定セムトスルニ於テハ、先ニ進ミタルモノガ歩調ヲ緩メテ後レタルモノヲ待ツハ寧ロ公平且自然ノ筋合ト言ハザルベカ

ラズ。又金子顧問官ガ引用セラレタル米國上院ノ論議ハ「スチムソン」ノ言葉ヲ指サルルモノト了解スル處、「スチムソン」ハ條約ヲ辯護スル立場ニ在リタルモノニシテ、其ノ立場ヨリ條約ノ成立ニ付他國ガ讓歩シタル點ヲ特ニ擧ゲルコトハ當然ナリ。又「スチムソン」ノ言葉ハ、日本政府及全權ガ苦シキ立場ニ在リタルコトヲ說明シ、米國ガ日本ヲ追越ス造艦ヲ行フコトヲ承認シタル日本ノ立場ハ非常ニ苦シキモノナリシナラン、日本ガ之ヲ認諾シタルハ區々タル論議ヤ財政ノ困難ト云フガ如キ理由ニ依ルモノト見ルベカラズ、別ニ深ク信ズル所アリテ意ヲ決シタルモノト認メラレ、米國全權一同ハ此ノ大英斷ニ對シ帽子ヲ取ツテ敬意ヲ表シタリト言フ趣旨ヲ述ベタルモノナリ。右「スチムソン」ノ言葉ニ依リ、本條約ニ依リ不利益ヲ蒙リタルモノハ日本丈ケナリトノ斷定ヲ下スコトヲ得ズ。

金子委員　「ホーキンス」級四隻ハ廢棄セラルルヤモ知レザルモ、同時ニ或ハ代換ヲ行フヤモ知レズ、然ラバ其ノ代換ハ七吋半砲巡洋艦ヲ以テ充ツルナラム。

幣原外務大臣　御質問ノ趣旨了解ニ困難ナルモ、甲級乙級巡洋艦ノ保有量ハ條約ニ定メアリ、又右兩級巡洋艦ノ範圍ハ備砲口徑六吋以上六吋以下（精確ニ云ヘバ六、一吋）ニ依リ分レ居ルモノナルヲ以テ、若シ七吋半ノ備砲ヲ有スル巡洋艦ヲ建造スルトスレバ甲級巡洋艦ノ種類ニ入ルベク、限定セラレタル甲級巡洋艦ノ保有量中ニ於テ故ラニ斯カル劣勢艦ヲ新造スルガ如キコトハ想像シ得ラレズ。

金子委員　外務大臣ハ英國ガ「ホーキンス」ト同型ノ巡洋艦ヲ造ラザルベシト想像セラレ居ルガ如キモ、夫レハ想像ニ過ギズ、實際ニ於テハ其ノ型ノ巡洋艦ヲ建造スルヤモ知ルベカラズ。

幣原外務大臣　七吋半備砲ヲ有スル「ホーキンス」級ハ、英國ニ於テ之ヲ不利益ナル型ノ巡洋艦ト考ヘ廢棄ニ決シタルモノナルガ故ニ、再ビ同一ノ型ノ巡洋艦ヲ建造スベキ謂ハレナシ。

財部海軍大臣　金子顧問官ノ御質問ハ恐ラク誤解ニ出ヅルモノナラン、「ホーキンス」級ハ廢棄シ、其ノ代換ヲ行ハザルコトトナリ居ルヲ以テ問題トナルコトナシ。

日本ガ昭和十一年迄八吋砲巡洋艦ヲ建造セズ、此期間ニ米國ガ之ヲ十五隻建造スルコトトナリタルハ、米國海軍當局ノ喜ビ居ル所ナルベシ。米國海軍ハ、今回ノ條約ニ依リテ初メテ釣合ヒノ取レタ艦隊ヲ作ルコトヲ得ルニ至リタルモノニシテ、之ガ爲ニ保有兵力量ヲ今回ノ程度ニ低下スルコトヲ甘受シ、又我國ニ補助艦總括七割ヲ讓ルニ至レルモノト推測ス。

華府會議前、日本ハ八八艦隊ノ建造ニ著手シ、殆ド完成セントシタルモノナルガ、若シ完成シタリトスルモ、其ノ維持費ニ困却シタルベキハ告白セザルヲ得ザル所ナリ。今日補助艦ニ付、日本ハ相當有利ナル對米比率ノ兵力ヲ整備スルニ努力シ、米國ハ此點ニ於テ日本ニ相當ノ決心アルモノト觀察シ居ルガ如キモ、內實財政上困難ナル情況ニアリ。故ニ米國ノ兵力量ヲ低下シ、且補助艦總括七割ヲ得タルハ、我國ニ取リ有利ナリ。八吋砲巡洋艦對米七割及潛水艦七萬八千噸ノ主張ハ、實ハ壽府會議以後ニ定メタルモノニテ、此ノ二原則モ亦重要ナルモ、總括七割ハ海軍整備上最モ重要ナリト思考シタリ。

金子委員　非公式會談ハ松平「リード」ノミノ間ニ行ハレタルモノニアラズ、齋藤「クレーギー」ノ間ニモ行ハレタリトノコトナルガ、何故ニ斯クノ如ク二ツノ會談ヲ行ヒタルモノナルカ？松平「リード」間ノ會談ヲ以テ問題ノ解決ヲ圖ルニ充分ナリシニアラズヤ？其ノ間ノ事情了解シ難シ。

伊東委員長　自分モ同樣ノ疑問ヲ抱キタル者ナルガ、其ノ間ノ事情ニ付說明ヲ得度シ。

幣原外務大臣　「クレーギー」ハ英國人ニシテ、從テ齋藤ガ「クレーギー」ト會談ヲ試ミタルハ、英國ニ對スル關係ニ於テ問題ノ解決ヲ促進センガ爲ナリ。卽チ米國全權ノ「リード」ニ對シテハ松平全權ニ於テ交涉ニ當リ、英國ノ「クレーギー」ニ對シテハ齋藤ニ於テ交涉ニ當リタル次第ナリ。潛水艦五萬二千七百噸均勢、大型巡洋艦ノ米國側起工延期ノ如キハ、齋藤「クレーギー」會談ヨリ出デ來リタルモノナリ。總括七割ノ問題ハ、齋藤「クレーギー」會談ニ於テハ成功セズ、松平「リード」會談ニ於テ略ボ目的ヲ達スルコトヲ得タルモノナリ。斯クノ如ク、最後ノ妥協案ハ松平「リード」

會談ノミナラズ、齋藤「クレーギー」會談ニテ成立シタル事項ヲ含ムモノナリ。

財部海軍大臣　「クレーギー」ハ全權ニ非ズ、其ノ資格ハ英國外務省ニ於ケル「アメリカ」局長ニ過ギザルガ、其ノ夫人ハ米國人ニシテ、海軍問題ニ關シテハ「マクドナルド」ノ智嚢ト見ラレ、影ノ形ニ添フ如ク「マクドナルド」ト常ニ俱ニ在リ、「マクドナルド」ハ本問題ニ關シテハ「クレーギー」ニ全幅ノ信頼ヲ置キタルコト周知ノ事實ナリ。斯クノ如ク「クレーギー」ハ其ノ地位ニ拘ラズ海軍問題ノ解決ニ付テハ有力ナル人物ナル實情ニ顧ミ、齋藤ヲシテ「クレーギー」ヲ通ジテ英國側トノ交渉ヲ進メシメタルモノナリ。

黒田委員　外交文書ニ關スル質問ヲ試ミ度シ。今回ノ條約文ニ誤字誤謬ノ存シタル儘、之ヲ　陛下ノ御手許ニ差出シタルコトハ甚ダ恐懼ニ堪エザル失態ト考フ。最近輸出禁止條約ニモ此ノ種ノ失態アリタリ（他ノ諸條約名ヲ擧ゲ逐次其ノ誤謬ヲ示シタリ）。

尚ホ今回參考トシテ「ロンドン」條約第十九條ノ解釋ニ關スル交換公文ヲ提出セラレタルガ、右ハ參考文書ト言ハルルモ、其ノ實質ハ甚ダ重要ナルモノニテ、然カモ之ニハ多數ノ誤譯アリタリ。

幣原外務大臣　誤謬ハ固ヨリ良キコトニアラザルヲ以テ、將來充分ニ注意シ其ノ事ナキヲ期スベシ。今回ノ條約文ニ於テ誤謬アリト指摘セラレタルハ「ピリオド」「コンマ」等ニ關スルモノニシテ、誤謬トハ云ヒ難ク、實ハ印刷ノ不鮮明ニ依ルモノナリ。又條約第十九條ノ解釋ニ關スル交換公文ハ參考トシテ提出シタルモノニシテ、其ノ内容ハ重要ナル性質ノモノニアラズ、卽チ新ニ解釋ヲ協定シタルモノニアラズシテ、當然ノ解釋ニ付日米間及英米間ノ意見交換ヲ示シタルモノニ過ギズ。右交換公文ハ、國際協定トシテハ形式内容共ニ具備セザルモノナリ。

黒田委員　交換公文ノ性質ヲ誤解シタルモノニアラズ、右ガ參考トシテ提出セラレタルモノナルコトニ付テハ十分了解シ居レリ。

濱口總理大臣　條約文ニ誤謬ヲ存シタルコトハ遺憾ナリ。將來充分ニ注意ヲ拂フコトトスベシ。

金子委員　總理大臣ハ遺憾ノ意ヲ表セラレタルモ、外務大臣ハ誤謬ニ非ズト主張セラレ、其ノ答辯ハ甚ダ當ヲ得ザルモノト考フ。今次ノ條約文中ニ存シタル誤謬ハ「ピリオド」、「コンマ」等ニ關スルモノニシテ、英文ヲ了解スルモノニハ誰ニテモ直チニ發見スルコトヲ得ルモノナリ。外務省事務官ノ英語ノ力不足シ居ルトスルモ、外務省ニハ英國人ヲ傭ヒ居ラルル筈ナル故、此ノ種ノ誤謬ハ、英國人ヲシテ點檢セシムレバ直チニ訂正スルコトヲ得ベキモノナリ。

幣原外務大臣　誤謬トシテ指摘セラレタル所ハ寫眞版印刷ノ不鮮明ニ基クモノナリ、從テ之ヲ訂正スルコトハ英語ノ學力ニ關係スルモノニアラズ、寧ロ精巧ナル寫眞機ヲ必要トスル問題ナルベシ。

伊東委員長　誤謬ガ存シタルモノナル以上、誤謬ナルコトヲ認メ潔ク遺憾ノ意ヲ表セラルルコト適當ナルベシ。然ルニ新聞紙等ニ其ノ非ヲ蔽フ宣傳ヲ行フガ如キハ面白カラザルコトナリ。

幣原外務大臣　誤謬ヲ辯解セントスルモノニアラズ、唯ダ事ノ眞相成行ヲ說明シタルニ過ギズ。

田委員　前回ノ說明ニ於テ、海軍大臣ハ潛水艦ノ二重定員ニ付テ述ベラレタル所アリタルガ、經費增減ノ點ヨリ詳細ナル說明ヲ得度シ。（前回ノ委員會ニ於テ、海軍大臣ヨリ、潛水艦ニ關シ日本ノ要求通リノ協定ヲ遂グルコト能ハザリシハ遺憾ナルガ、之ニハ次善ノ方法トシテ、例ヘバ二重定員ト云フガ如キ方法ニ依リ、補充ノ效果ヲ擧グルコトヲ得ベキ旨ノ說明ヲ與ヘタリ。前回ノ議事要錄ニ脫シタルヲ以テ玆ニ追加ス。）

財部海軍大臣　潛水艦ノ乘組員ノ生活ハ非常ニ苦シキモノナリ、從テ或期間活動シテ根據地ニ歸還ノ上ハ乘組員ノ入レ替ヘヲ行フコトヲ必要トス、故ニ乘組ノ定員ヲ二重ニ增加スレバ、乘組員ニ休養ノ時間ヲ充分ニ與フルコトトナリ、同時ニ潛水艦保有噸數全部ヲ有效ニ用ユルコトヲ得ベシ。例ヘバ、潛水艦五萬二千噸ヲ常ニ有效ニ前線ニ活動セシメントセバ、乘組員ノ休養等ノ關係ニ依リ、其ノ三倍約十五萬噸ノ潛水艦ヲ必要トスベシ。然ルニ定員ヲ二重ニ增加スレバ、休養ヲ與ヘタル人員ヲ以テ前線ヨリ歸來シタル乘組員ノ入レ替ヘヲ行ヒ、直チニ潛水艦ヲ前線ニ送リ返スコトヲ得ルモノニシテ、此ノ方法ニ依リ潛水艦保有量ノ不足ヲ一定程度補充スルコトヲ得ベシ。

伊東委員長　其ノ問題ハ兵力量ニ關スル問題ヲ討議スル場合ニ讓ルコトト致度シ。

散　會

（前回金子委員ノ請求ニ基キ、外務大臣ヨリ別紙若槻全權聲明寫ヲ審査委員ニ配布シタリ。）

昭和四年十二月十二日

「シャトル」商業會議所及「シャトル」日本協會午餐ニ於ケル若槻全權ノ演說要譯文

「シャトル」商業會議所及「シャトル」日本協會ノ御招キニ預リ、其ノ席上ニ於テ當地ノ代表的ノ方々カラ御丁重ナル御挨拶ヲ受ケ、只今ハ又遙ニ「ワシントン」カラ合衆國政府ヲ代表シテ來ラレタ「バレンタイン」氏カラ御懇篤ナ御詞ヲ戴イテ、我々洵ニ衷心感謝ニ堪ヘナイノデアリマス。此ノ席上私ノ胸中ニ湧イテ來ル感動ノ數々ヲ申述ブルコトハ困難デアリマスガ、取リ立テテ申上ゲタイ一點ハ、私ガ諸君ノ示サレマシタ友誼ト好意トニ對シ、之ヲ米國全體ノ感情ヲ代表スルモノト考ヘマシテ、深ク鳴謝シ且之ヲ誇リト感ジテ居ルト云フコトデアリマス。而シテ諸君ガ我々ニ對シ誠ニ溫イ感情ヲ有セラレ、我々ノ幸福ヲ顧念セラルルヲ知ルノハ、特ニ我々ノ滿悅トスル所デアリマス。

私ハ、我々ガ米國ニ到着スルヤ否ヤ、此ノ地ニ於テ我々ヲ御歡迎下サッタ諸君ニ對シ、少シク我々ノ日本出發當時ノ光景ヲ申上ゲテ見タイト思ヒマス。

有ラユル階級ノ男女數千ハ、降リシキル雨ヲ冒シテ、東京驛頭及横濱埠頭ニ蝟集シマシタガ、此ノ群集ノ顏ニ表ハレテ居リマシタ感想ハ唯ダ一ツデアリマシタ。夫レハ卽チ、今次會議ノ成功ヲ深ク且痛切ニ希望スルノ念ニ外ナラヌノデアリマシタ。其ノ盛ナル光景ハ、我同胞ノ純然タル自然的感情ノ發露デアリマシタガ故ニ、層一層强イ印象ヲ受ケタノデアリマス。是レ實ハ日本國民ガ如何ニ心カラ政府ニ對シ他國政府ト協力シテ、軍備ノ縮少及世界平和ノ樹立ヲ計ランコトヲ希望スルカヲ示スベキ一ツノ實證ニ過ギナイノデアリマス。日本ガ今次會議ニ對スル招請ヲ受諾シテ以來、日本ノ諸新聞ハ擧テ同

會議ニ對スル國民ノ興味ガ如何ニ津々浦々迄行渡ッテ居ルカ、又同會議ニ付如何ニ多クガ期待サレテ居ルカヲ、日々其ノ紙上ニ反映シテ居ルノデアリマス。

東洋史ヲ公平ナ眼ヲ以テ研究スル學者ハ、日本國民ノ平和的態度ヲ直チニ了解スルニ違ヒアリマセン。世界ノ歷史ニ於テ十九世紀中葉以前ノ日本ノヤウニ、國內ニ於テモ亦國外ニ對シテモ、長期間ニ亙ッテ平和ヲ維持シタ國民ハ殆ンドナク、此ノ平和ハ實ニ三百年ノ久シキニ亙ッテ繼續シタノデアリマス。而シテ日本國民ハ尙ホ武道ヲ深ク尊重スルモノデハアリマスケレドモ、秩序アル平和ノ價値ヲ永ク習得シマシタ結果、其ノ思索ノ習性上ニ一ノ强キ影響ヲ受ケタノデアリマス。從テ我々ガ强イ陸海軍ヲ編成シマシタノモ、開國ノ當時、全世界ノ國際關係ガ主トシテ實力政治ニ依リ決定セラレタルガ爲ニ外ナラナイノデアリマス。若シ夫レ斯ノ如キ事態カ微カッタナラバ、日本ハ決シテ莫大ナル資金ヲ費シテ現代的軍事施設ヲ組織スルコトヲ考ヘルニ至ラナカッタコトト思ハレルノデアリマス。

近代日本ノ建設者ハ、絕ヘズ自己ノ一大理想トシテ、安全及平和裡ニ國運ノ伸長ヲ計ッタノデアリマス。其ノ當然ノ結果トシテ、我陸海軍政策ハ自衞ノ根本原則ヲ基調トスルモノデアリマシタ故ニ、其ノ陸海軍政策實現ノ爲ニ採用スベキ手段ハ、我國ガ萬一蒙ルコトアルベキ危險ト並行スベキコト自明ノ理デアリマス。若シ世界ヲシテ以前ノ狀態ニ止マリ、國際聯盟規約無ク、一般平和ニ關スル「ケロッグ」條約無ク、又現代人ガ戰爭ヲ無益ナリトノ教訓ヲ覺ラザル狀態デアルナラバ、軍備ノ縮減ハ殆ンド望ミ難ク、日本トシテハ其ノ安全ヲ舊來ノ方法タル組織的武力ニ求ムルノ外ハ無カッタニ違イナイノデアリマス。

幸ニシテ、今ヤ洋ノ東西ニ亙ッテ、國際的協力及了解ノ新タナル時代ニ入ラントシテ居ルノデアリマス。此ノ新時代ハ日本ノ熱心ニ歡迎シ且進展セシメント希望スル所ノモノデアリマシテ、此ノ希望ハ一九二二年ノ華府會議及一九二七年ノ壽府會議ニ於テ日本ノ明カニ示シタ所デアリマス。我平和政策及日本國民心ノ平和的態度ニシテ、時ニ或ハ猜疑誤解ノ煙幕ニ依リ覆ハレタコトノアリマシタコトハ事實デアリマス。華府會議ハ此ノ有害ナル煙幕ヲ消散セシメ、且來ルベキ會議ニ

對スル基礎ヲ定メ、我々ヲシテ之ガ爲ニ更ニ努力セシムルノ途ヲ供スルニ與テ力ガアツタノデアリマス。又華府ニ於テハ支那ニ對スル列强ノ協力及協調ノ政策ニ關スル協定ガ成立シ、平和並軍縮ニ付保障ガ與ヘラレタノデアリマシテ、是レ今日日本ノ東洋政策ノ基調トナツテ居リマス。壽府海軍軍縮會議ニ於キマシテハ、日本ハ單ナル制限ニ止マラズシテ海軍軍備ノ縮少ヲ主張シタノデアリマスカラ、是亦日本ガ侵略的意圖ヲ有セズシテ、唯ダ國防ノミヲ考慮シ居タル他ノ證左ニ外ナラヌノデアリマス。「ケロッグ」條約ガ日本國民ニ提議セラレマスルヤ、國策ノ手段トシテ戰爭ヲ拋棄スベシトノ同條約ノ義務ハ如何ナル政黨ト雖ドモ又民論ノ如何ナル方面ニ於テモ何等異論無ク受諾セラレタノデアリマス。故ニ今次ノ「ロンドン」會議ハ不戰條約ヲ其ノ出發點トシテ居リ、又同會議ニ於テ軍備縮少ノ實現ガ期待サレルノデアリマスカラ、日本ニ於テ大ナル共鳴支援ヲ受ケツツアルノハ極メテ當然ト云ハネバナラヌノデアリマス。

以上述ベタル所カラ推シ考ヘマスレバ、「ロンドン」會議ニ對スル日本ノ態度ハ之ヲ諒解スルコト容易デアルベキ筈デアリマス。其ノ要諦ハ第一、日本ハ單ニ軍備ノ制限ニ止マラズ、進ンデ之ガ縮少ヲ可能トスルコト、第二、日本ノ要求スル所ハ決シテ自國安全ノ最少限度ノ需要ヲ超ヘザルコトト言フニアルノデアリマス。

軍備ノ制限ニ非ズシテ寧ロ縮少ヲ計ルベキコトハ、「ケロッグ」條約ノ當然命スル所ノモノデアリマス。吾人ハ此ノ好機ニ方リ、近代萬民ニ懊惱ヲ與ヘタル重キ經費ノ負擔ヲ輕減シ得ヌ筈ハナイト思フノデアリマス。各當事國ノ何レモ相對的ニ縮減ヲ行ヒ、軍備ヲ著シキ範圍ニ亙リ縮少シ得ザル理由ハアリマセン。他ノ會議參加國ニシテ斯ノ如キ協定ニ同意スルニ於テハ、日本ハ直チニ之ト相對的ニ必要ナル縮減ヲ我ガ海軍力ニ加フルノ用意ヲ有スルモノデアリマス。

第二ノ要諦タル、日本ハ自國ノ安全ノ最小限度ノ需要ヲ超ヘザルベシトハ、外部ヨリノ攻擊ニ對シ自國ヲ防衛スルニ必要ナル兵力ヲ維持セザルベカラズトノ意味デアリマス。

吾人ハ、日本ノ近海ニ於ケル我ガ防衛ニ必要ナル限度ヲ超ヘタル何等ノ軍備ヲ保有センコトヲ提言スルモノデハアリマセン。日本ノ保有セント欲スル海軍勢力ハ、常ニ此ノ標準ニ據ツテ測定セラルルノデアリマス。日本ガ米國海軍、若ハ英國

海軍ト均勢ヲ要求シ居ラズ、又之ヲ要求セントスルモノニ非ザル事實自體ガ、既ニ充分ニ日本海軍ガ侵寇的觀念ヲ寸毫モ抱懷セザルコトヲ立證スルモノデアリマス。「防衛的最少兵力」、之ガ吾人ノ基準デアリマス。吾人ハ何國ニ對シテモ脅威ヲ與ヘントスルモノデアリマセン、同時ニ又何國タリトモ我國ニ對シ脅威トナルコトヲ欲セナイノデアリマス。

故ニ、來ルベキ會議ニ於ケル日本ノ標語ハ「縮少及無脅威」デアリマス。私ハ斯ノ如キ日本ノ態度ハ、全世界ノ同情的諒解ヲ得ルモノデアルト確信スルノデアリマス。而シテ、會議ニ於ケル友好、相互了解ノ雰圍氣内ニ於テ、又參加列國間ノ公正平和ナル願望、政策ニ對スル相互信賴ノ念ニ基キマシテ、人類ノ福祉、恒久平和ノ點ヨリ見テ、歴史的ナル一大事業ノ成就セラルベキコトヲ疑ハヌモノデアリマス。

ADDRESS DELIVERED BY MR. REIJIRO WAKATSUKI IN SEATTLE, DECEMBER 12, 1929.

On behalf of the Delegation, it is my agreeable priviledge to tender our sincere thanks for this kind reception extended to us by the Seattle Chamber of Commerce and the Japan Society of Seattle. I wish to thank also for the welcome so cordially expressed by the representative gentlemen of the City of Seattle and the State of Washington. And again I feel grateful to the speaker immediately preceding me who have come all the way from Washington to greet us in the name of the United States Government. I find it difficult to express the many emotions by which I am affected on this occasion. There are among these emotions, it goes without saying, feelings of gratitude and pride at this demonstration of your friendliness and goodwill, for I may take it that you are in this regard representative of the sentiments of the whole United States, and it is a special satisfaction to us to observe that you have really warm feelings towards us.

I wish it were in my power to picture to you, who have greeted us here on our arrival in America, the scene of our departure from Japan, thousands of men and women from every walk in life crowded the railway station in Tokyo and the wharf at Yokohama, undeterred by a drenching storm, and in their faces one could read only one thought the sincere, and almost anxious, hopes for the success of the Conference. It was a demonstration all the more impressive because it was the purely spontaneous expression of our private citizens. But this incident is only one of

many which I could cite to you to show you how strongly the Japanese people desire to have their government cooperate with the Governments of other nations for the reduction of armaments and the establishment of world peace. Ever since the call to this Conference was received in Japan, the press of the country has shown how widespread is the popular interest in it and how much is expected of it.

An impartial student of Oriental history will readily understand the pacific attitude upon the part of the Japanese nation. Few nations in the world's history have had so long a period of undisturbed peace both at home and abroad as that of the Japanese prior to the middle of the nineteenth century; it was a peace which had remained unbroken for three hundred years. And although the nation still treasures the military virtues in its high code of honor, nevertheless the long schooling in the value of ordered peace has left a strong impress upon the habits of thought of the Japanese people. If we have built up a strong army and navy it has been solely because, in the period in which Japan emerged from its isolation, international relations the world over were so largely determined by politics of power. Had it not been for this fact, Japan would never have thought of organizing her modern fighting institutions at an enormous expenditure.

The builders of modern Japan have consistently kept before them as their dominant ideal the advancement of the nation's welfare in security and peace. This means that our military and naval policy is based upon the fundamental principle of self defense. It follows, therefore, that the measure taken in fulfilment of that policy should be commensurate with possible danger to the state. Had the world remained as it was in the days preceding the World War, had there been no Covenant of the League of Nations, no Kellogg Pact of universal peace, if the lesson of the futility of war had not been learned by this generation,—then there would be little hope of lessening armaments and Japan would be obliged to seek its security in the age-old method of organized force.

Fortunately, we are entering upon a new era, equally new to East and West, an era of international cooperation and understanding. It is an era which Japan is eager to accept and ardent to further, as was clearly shown both at the Washington Conference of 1922 and at the Geneva Conference of 1927. It is true that the policies of peace and the pacific attitude of mind of the Japanese nation have been at one time or another beclouded by the mist of suspicion and misunderstanding. The Washington Conference did much to have such atmosphere cleared away, and furnished us

a basis upon which we hope to build still further at the coming Conference. At Washington a guarantee of peace and disarmament was given, in the agreement of the signatories, upon policies of cooperation and conciliation with China which are today the basis of Japan's policy in the Far East. At the Geneva Conference of Naval Disarmament, Japan insisted upon reduction of naval armament in preference to mere limitation, a further guarantee that it was not bent upon aggression but was thinking solely in terms of national defence. When the Kellog Pact was presented to people of Japan its obligation to renounce war as the instrument of national policy, was accepted in Japan without any dissent either on the part of any political party or any section of public opinion. It is therefore only natural that the proposed London Conference is winning such great sympathy and support in Japan because it makes the anti-war pact its starting point, and reduction in the warlike equipment of nations is expected to be realized.

It should be easy then to understand the attitude of Japan toward the London Conference. Our postulates will be; first, Japan will advocate reduction, not merely limitation, of armament; and secondly, all that she demands will never exceed the minimum needs of her national security.

The reduction, rather than limitation, of armament, is what should be the natural outcome of the Kellogg Pact. Why can we not, at this opportune moment, reduce the ponderous burden of expenditure which has lain like a nightmare on the recent generations of mankind? There is no reason why by a reduction all round, armaments should not be scaled down to a considerable extent. If the other participating powers come to such an agreement, Japan stands ready to reduce her naval strength to the extent as will be proportionately necessary.

The second postulate, namely, that Japan will not exceed the minimum needs of her national security, means that we should hold sufficient warlike strength to defend the country from outside attack. We are not proposing to possess any equipment beyond that necessary for our defence in the adjacent waters of Japan. The naval strength which Japan wishes to retain will always be gauged by that measure. The very fact that Japan is not demanding, and will not demand, numerical parity with the United States, or the British Navy, is in itself sufficient proof that not an iota of the idea of attack has entered into the considerations of the Japanese Navy. "*The minimum defence strength*" is our standard. We purpose no meance to anyone; we want no one to be a menace to our country.

Japan's motto, therefore, at the forthcoming Conference will be, "Reduction and no menace." I am fully convinced

that such an attitude of Japan will invite the sympathetic understanding of the whole world, and I am sure that, in the atmosphere of goodwill and understanding that will prevail at the Conference and through mutual confidence in the just and peaceful aspirations and policies of the participating powers, a great task in history will be achieved.

昭和四年十二月十六日

「ワシントン」ニ於ケル若槻全權ノ聲明要譯文

吾々一行ハ、數日前「シアトル」上陸以來、絶エズ合衆國政府及國民ヨリ與ヘラレタル公私ノ懇篤ナル歡迎ニ對シ感謝ニ堪ヘズ。而シテ吾人ハ、來ルベキ「ロンドン」軍縮會議ニ關シ、米國民ガ深キ興味ヲ有スル證左ヲ見テ强キ感動ヲ受ケタリ。日本國民モ亦同會議ニ對シ擧テ同樣ノ興味ヲ有シ、其ノ崇高ナル目的ガ正當且有效ニ達成セラレムコトヲ熱心ニ又信賴ヲ以テ期待シ居レリ。

吾人ハ「ロンドン」ニ赴ク途次華府ニ立寄リ、其ノ識見ト發意トニ依リ「ロンドン」會議開催ヲ大ニ促進セラレタル合衆國大統領ニ敬意ヲ表スルノ機會ヲ得タルヲ欣快トスルモノナリ。

今次ノ會議ハ「ケロッグ」條約ヲ其ノ出發點トナシ居ル處、同條約ニ於テ、調印國ハ國家ノ政策ノ手段トシテ戰爭ヲ拋棄シ、且平和的手段ニ依リテノミ有ユル國際的紛爭ヲ解決スル旨ヲ誓約シタリ。敍上ノ如キ事情ノ下ニ會合スルコトハ、夫レ自體既ニ會議成功ノ保障タルベシ、蓋シ軍縮ノ事タルヤ戰爭拋棄ノ自然ノ結果ナレバナリ。

又會議參加國ハ、各國トモ他ノ參加國ノ政策ノ正當且公正ナルコトニ滿腔ノ信賴ヲ置キ、虛心坦懷以テ會議ニ臨マントシツツアリ。

仍テ、吾人ハ「ロンドン」會議ニ多大ノ希望ヲ繫クベキ充分ナル理由ヲ有スル次第ニシテ、軍備競爭ヲ終熄シ且海軍力ヲ實質的ニ減少スルノ成果期シテ俟ツベキモノアルヲ信ズ。

日本ハ軍備ノ縮少ヲ主張ス、卽チ日本ハ會議參加國ノ海軍軍備ヲ低下センコトヲ主張シ、且我海軍勢力ヲ他國ト相對的ニ縮少スルノ用意ヲ有スルモノナリ。

右縮少ヲナスニ當リ、日本トシテハ、國民ノ國家安全感ニ動搖ヲ來サシメザル樣顧念セザルヲ得ザルコト勿論ナリ。

右ノ考慮ニ基キ、日本ガ攻擊ニハ足ラズ、唯ダ日本近海ニ於ケル防禦ニノミ充分ナル最少限度ノ勢力ヲ保有スルコト至當ナリト考フ。來ルベキ倫敦會議ニ於ケル日本ノ提案ハ、一ニ此ノ原則ヲ基礎トスルニ外ナラズ。日本ハ他ノ大國ニ比シ均勢以下ノ比率ヲ受諾スルノ用意アルモノナルヲ以テ、侵寇的行動ノ意圖毫モ無之コト極メテ明白ナリ。

吾人ハ、「ロンドン」ニ於テ、軍備縮少及恒久平和ノ保障ナル大事業ガ大ナル進展ヲナサンコトヲ確信スルモノナリ。

FOR THE PRESS

STATEMENT BY REIJIRO WAKATSUKI, JAPANESE DELEGATE TO THE LONDON NAVAL CONFERENCE

Washington, D.C.,
December 16, 1929.

The Japanese Delegation wish to thank the Government and people of the United States for the cordial welcome, both official and private, extended to them ever since they landed at Seattle a few days ago and are greatly impressed by the evidences of keen interest on the part of the American nation in the forthcoming Naval Conference in London.

The whole Japanese nation are equally interested in the meeting and are eagerly and confidently anticipating that its noble objective will be attained in a just and effective manner.

We are now very glad to be in Washington, en route to London, and to have had the opportunity of paying our respects to the President of the United States, whose vision and initiative have been an important incentive to the calling together of the London gathering.

The forthcoming meeting makes the Kellogg Pact its starting point. Under that Pact, the signatory Powers are

pledged to renounce war as an instrument of national policy and to settle all international disputes only by pacific means. To meet under such auspices is in itself a guarantee of success, for policies of disarmament are the natural consequences of the renunciation of war.

Furthermore, it is expected that the participating Powers are coming to the Conference altogether with an open mind, reposing each in the other full faith and confidence in the justice and fairness of their respective international policies.

There is therefore every reason for us to be sanguine as to the result of the London Conference. The termination of competitive armaments and a positive reduction in naval strength may, we believe, be looked for as the outcome.

Japan advocates reduction. She advocates scaling down the naval armaments of the participating Powers, and she herself stands ready to reduce her naval strength proportionately.

It goes without saying that, in so doing, she has to bear in mind the necessity of keeping undisturbed the sense of national security of the people. From this consideration she feels entitled to retain a minimum strength, insufficient for attack and only adequate for defense in home waters. The proposals of Japan at the forthcoming Conference are based upon this principle alone. She is prepared to accept a ratio that is less than parity with the other great Powers, and so gives clear proof of the entire absence of any thought of offensive operations.

We are confident that an important progress will be effected at London in the great task of disarmament and of guaranteeing an enduring peace.

（參　考）

曩ニ樞密院ニ御諮詢ヲ仰キタル千九百三十年「ロンドン」海軍條約御批准ノ件中同條約正文別冊ト御引換相成度

（同條約正文ノ印刷不鮮明ノ箇所アルニ付別冊ト引換方昭和五年八月九日右書面ヲ以テ那須御用邸ニテ内閣書記官ヨリ侍從長ヲ經テ伺濟翌十日伺濟書ヲ樞密院ヘ送付）

（備　考）

○誤　譯　問　題

「ロンドン」海軍條約ハ、七月二十三日閣議ヲ經テ、二十四日御批准奏請ノ手續ヲ執リタリ。翌二十五日、二上樞密院書記官長ヨリ松永條約局長ニ同條約ノ下審査開始方ニ付電話アリ、仍テ二十六日ヨリ樞密院事務所ニ於テ條約下審査ヲ開キ、八月五日之ヲ終了セリ。

下審査ハ微細ノ點ニ亙リテ行ハレ、例ヘバ、各國全權ノ姓名ノ讀ミ方、譯文ノ辭句、原文句讀點ノ印刷ノ不鮮明等ニ付テモ精密ニ審査シタルガ、樞密院側ニテ疑義アリトシテ質問セル諸點ハ、何レモ外務海軍兩省當局ノ說明ニヨリ、二上書記官長初メ樞密院書記官ニ於テ了解シ、殊ニ八月五日最終下審査散會ノ際、外務省當局ヨリ譯文ハ一切變更セザルベキコト及原文句讀點ノ印刷不鮮明ノ個所ハ適當ニ訂正スベキコトヲ述ベ、二上書記官長ニ於テモ之ヲ了承シ、何等問題トシテ殘ラザリシモノナリ。

然ルニ、翌六日、堀江樞密院書記官ヨリ外務省條約局長ニ、譯文ノ修正及原文印刷不鮮明ノ箇所ノ訂正ニ付テノ措置振至急決定アリ度旨電話シ來リタルニ依リ、內閣及法制局當局ト協議ノ上、譯文ニ付テハ八月八日外務省ヨリ樞密院事務局ニ對シ修正ノ必要ヲ認メザルニ付外務省原案ニテ審議ヲ進メラレ度旨申送リ、原文印刷不鮮明ノ箇所ハ訂正（句讀點ノ不鮮明ナルモノヲ筆ニテ補修）ノ上經伺ノ手續ヲ執リ、八月十日午前內閣ヨリ樞密院事務所ヘ訂正濟ノ原文ヲ送付シタリ。

右ノ如ク誤譯問題ナルモノハ、下審査ニ於テハ格別問題トナリタルモノニアラズ、然カルニ下審査終了ノ八月五日ヨリ都下ノ各新聞上ニ、外務省作成ノ條約譯文ニ誤謬多ク其ノ儘審議ヲ開始スル能ハザル狀態ナリトテ、樞密院ニ於ケル條約審査ノ遲延ハ、恰モ政府當局ノ事務取扱上ノ杜撰疎漏ニ依ルモノナルガ如キ記事頻々トシテ現ハルルニ至リタルヲ以テ、外務省情報部ヨリ新聞記者團ニ對シ、外務省作成ノ譯文ニハ全然誤譯ナキコトヲ辯明シ、樞密院下審議ニテ誤譯トシテ質問ノアリタル眞相ヲ說明シタル處、各新聞トモ之ヲ材料トシ稍粉飾ヲ加ヘタル記事ヲ掲ケタリ（八月八日朝刊）。

八月九日樞密院本會議（常設國際司法裁判所規程改正ニ關スル議定書御批准ノ件及「アメリカ」合衆國ノ常設國際司法裁

判所規程ニ關スル署名議定書ヘ加入ニ關スル議定書御批准ノ件附議）終了後、岡田顧問官ノ要求ニ依リ、各顧問官及政府當局（幣原外務大臣、田中文部大臣等）會議ノ席ニ居殘リ非公式ニ會議ヲ繼續シ、岡田顧問官ヨリ、近來政府ヨリ御批准奏請ノ條約文ニ誤謬多キコトヲ指摘シ、ロンドン」海軍條約誤譯問題ニ關スル記事ニ付テノ質問アリタルニ依リ、幣原外務大臣ヨリ、誤譯問題トシテ報ゼラルルモノノ眞相ヲ說明シ、新聞紙ニ此種ノ記事ヲ見ルハ甚ダ遺憾ナルモ、今回ノ如ク恰モ事務取扱上重大ナル疎漏アリタルガ如キ事實無根ノ報道ヲ傳ヘラルルコトハ、如何ニ穩順ナル事務官ナリトモ到底耐忍スルコトヲ得ザル所ニシテ、眞相ヲ明カニシ其ノ立場ヲ辯護セントスルハ當然ナリ、而シテ事務官ノ立場ヲ考フレバ、外務大臣タル自分ニ於テモ到底之ヲ制止スルコトヲ得ザル旨辯明シ、岡田顧問官ハ之ヲ諒トセリ。同日ノ都下各新聞ノ夕刊ニハ、岡田顧問官ガ本問題ニ付幣原外務大臣ヲ叱責シタルガ如キ記事ヲ載セタルモ、右ハ事實ニ相違ス。

（東京朝日新聞、昭和五年八月五日夕刊）

○條文を修正再印刷

けふで一通り下審査は終了

委員指名また遲る

ロンドン條約案の樞密院第五回下審査會議は五日（中略）一まづ條約全部を議了したが下審査中各條項にわたり飜譯上の誤謬その他不備の個所が發見されたのでこれ等の點を修正の上再印刷に付し更に二上書記官長の手許で愼重檢討することになつてゐる從つてこれを付託すべき委員長、委員もおそくも一兩日中に倉富議長から指名されるが政府側の調査資料提出の遲延と右の事情とによつて第一回審査委員會開會も相當後れるだらうと見られてゐる。

（時事新報、昭和五年八月五日夕刊）

○條約案誤謬だらけ

下審査で發見され

樞府、政府の杜撰振りに驚く

樞府に於ける倫敦海軍條約案は去月二十六日二上書記官長の手許に於て下審査を開始せられて以來五日に至るまで前後五回に及んで外務、海軍、法制局より關係官を招致し逐條審議を續行しつつあつたが、五日午後一應下審査を終了する段落となる豫定である、下審査には條約案を一句一讀點に至るまで顯微鏡的審査を遂げられた結果條約案文の各所に飜譯その他少なからざる誤謬發見せられ到底政府提出案のままにては精査委員に附託して審議し難きことが明瞭となつたので、下審査に依つて訂正せられた所に基き條約案を新に印刷せしめ、その出來上るのを待つて二上書記官長が再び目を通し然る後各顧問官に配布して審議の準備を進むることに決定した。

樞府側では政府が今回の如き重要案を樞府に御諮詢を奏請するに當り案文の作成その他に愼重を缺き、斯くも杜撰な誤謬だらけの案を輕々しくも提出するは實に諒解に苦しむ所であると爲し政府が國務に精勵を缺くは遺憾至極であるとて非難の聲が相當高く必然條約の審議にも政府にとつて頗る不利益な情勢を釀すものと見られて居る。

（時事新報、昭和五年八月六日朝刊）

○條約案の審査を

手間取らす樞府

擧げらるる數々の理由

去月二十四日樞府に御諮詢相成つた倫敦海軍條約案は二週間を經過し精査委員會前の一切の準備は去る五日下審査の完了

と共に整つたに拘らず尙ほ精査委員附託とならず條約案審議上の打合せに關して倉富議長と濱口首相との間に頻りに折衝を重ねつつあるのは次の如き事情と理由が潛んで居る卽ち下審査の結果條約案文に少からざる誤謬發見せられ樞府は其の杜撰振りに驚くと同時に政府が斯くの如き重要案を樞府に御諮詢を奏請するに當り斯くも不用意にして輕卒なるは全く樞府に對して誠意を缺く結果に他ならぬと爲し、直ちに下審査の訂正に基いて條約案の再印刷を命ずるに至つたが、之が爲め樞府方面の對政府感情は案の審議の本筋に入るに先立ち著しく險惡となり政府が如何に審議促進を要望するとも此の有樣では勢ひ審議も遷延せざるを得ないと云ふことになつた、然も倉富議長は此の間に在つて濱口首相の審議促進方の懇請に依り精査委員會附託後の審議の圓滑を圖る爲め、各方面より條約案を中心とする情報を蒐集した結果今日の情勢に於て案を直ちに精査委員會の俎上に供するに於ては一大波瀾をまき起すは必然であり場合に依つては政局に重大なる影響を及ぼすべき事態に在ることが明瞭となつた、其の理由は

一、條約兵力量に對する軍事參議會議の奉答內容を、條約調印の當の責任者たる財部海相が如何に說明するかに依つて審議は直ちに重大な難礁に乘り上げる恐れがある。

一、奉答文には條約兵力量は國防上缺陷あると云ふ意味が含まれ居る以上補充計畫が若し財源關係に於て反對に負擔增加となり軍擴となるが如き結果を招くに於ては、條約は致命的矛盾に逢着することとなる。

一、條約調印に至るまでの手續に於て政府は重大なる幾多の手違を爲してゐる疑念が極めて濃厚であつて、某有力顧問官の如きは政府の回訓決定當時の行動に對し違憲論を振りかざして痛烈に糾明すると稱してゐる程である

倉富議長は右の如き事態を察知するに及び萬一形勢を此の儘に審議を進むる時は樞府として最も好まざる事態を誘引することとなり、旁々倫敦條約が調印以來諸種の論議を釀し樞府としても本條約案審議に當り政爭の渦中に投ぜられるべき傾向に在るので倉富議長は頗る憂慮し濱口首相に對してもその事情を述べて遺漏なき準備と審議上必要なる參考資料の提出

を要求し、精査委員附託を遷延して愼重に形勢の緩和を圖りつつある模樣である。

（東京朝日新聞、昭和五年八月七日朝刊）

○飜譯は原文固執

政府側の方針決す

樞密院に於けるロンドン條約下審査の結果、發見されたる條約原文の誤謬（「エル」の字の脫落）及び句讀點の誤謬については、樞密院の指摘した如く、政府としては、訂正その他の手段を講ずることになつたが、樞密院の指摘する飜譯文の誤謬なるものは、絕對的のものではなく、殊に下審査に從事した樞密院事務當局が「かかる譯文の方がよいではないか」と主張する程度のものであつて、從來かかる要求があつた場合は審議の進行を希望するため、樞密院當局の意見に盲從して來たのであつたが、今回の飜譯文に關しては樞府に於ける過去の苦き經驗に基き、外務、海軍兩當局並に法制局に於て、愼重に研究の上決したるものであり、飜譯文の正確性については、相當の確信を有してゐるので、輕々に樞府當局の主張を容れないことに、六日の政府關係事務當局の會合で意見が一致し、飽迄政府提出の飜譯文を以て、審議を進めて貰ふことになつた。

卽ち政府としては、條約文の意味に變更を來さざるが如き飜譯ならば、樞府の主張を容れても差支へないのではあるがかく其の主張を容るるときは、却つて審議遲延に對する樞府の辯解を理由づけるばかりであり、

現に過日の國際司法裁判に關する審査會に於ても、かかる譯文の修正を以て審議遲延の口實とされた事實もあるので、今回の海軍條約に關する飜譯文に對する樞府修正意見には同意せず、政府提出の原飜譯文のまま審議を進むることを要求することに決した。

（東京朝日新聞、昭和五年八月八日朝刊）

○誤りあらば死んで見せる
外相を憤慨させた
ロンドン條約誤譯の正體

「統帥權干犯」のすつたもんだが漸く片づいて、いよ〳〵かんじんの「ロンドン條約」が樞密院に回付されたところ、眞夏の暑さ盛りの中を五回も下審査會をやつて、あれこれといちり回した揚句、樞密院の二上書記官長は「外務省の譯文は誤譯だらけだ、こんな不完全なもので御批准奏請をやるとは言語道斷」とボンとはね付て譯文の訂正を政府に要求した、で政府は面食らつて外務省に移牒して早速取調べさしたところ、外務省では「長いことかゝつて念を入れて飜譯したのに間違ひのあらうはずは無い、何一つ訂正の必要があるもんか」横文字の總元締だといふ自負心も手傳つて偉い鼻息で怒りだした、中でも總大將の幣原外相の如きは、樞府から文句が出たと聞いて「若しも本當に誤譯があらば奏請の責任を取つて條約局長と刺しちがへて死んで見せる」と、すつかり氣色ばんで、松永條約局長を呼びつけて「愼重審議」を重ねて見たが、樞府の指摘した誤譯の個所といふのがいづれも外務省譯で差支がないとわかつたので「誤譯呼ばはりは怪しからぬ惡宣傳だ、訂正の必要は斷じてない」と胸なでおろすやら、改めて憤慨するやら、そこで政府も急に腰が強くなつて「訂正の必要更になし、原文のまゝで審議を進めてもらうこと」といふに廟議一決して、樞府の申出をキツパリ蹴飛ばすといふ意氣のいゝところを見せた、そこで「何が兩者をさうさせたか」を調べて見ると、正しくたわいのないナンセンスで、問題の喧嘩の種は次の諸點なのだから笑はせる。

一、各國全權委員の名前をならべたところに「アーカンサス選出上院議員ロビンソン」といふのがある、これは原文にセネターとあつたのを外務省は普通の例によつて上院議員と譯したところ、樞府では「米國は民主國で議會に上下の階級的區別はない」と理屈をこねて改譯を要求した、外務省では「これまで上院といふ文字は一般に文句なしに使つてをり、この譯語で樞府を通過したことも一再でない、今になつて事新しくいひ立てるのはやぶへびさ」と笑つてゐる。

二、樞府に出した條約の原文はロンドンで作つたとう本の寫眞版だがその原文ではイタリーの全權のアルフレッド、アクトンの名が印刷の誤植で Afredo となつてAの次のLが一字落ちてゐる、これは明かに誤植で、政府からイタリー政府に照會したところ「Lの脱落だ」との回答があつた、それで譯文ではアルフレッドと書いておいたところ、樞府では「原文と譯文の相違は何としたことか」と詰らない所に力をいれて、これも「誤譯」の一つに數へ立てた。

三、第四條の第一項に「、、、、これを建造せしむることを得ず」とあるが、これが大變な誤譯といふことになつてゐる、ところがこれと同じ文句がワシントン條約にもあつて「今度の譯はワシントン條約の譯し方をそのまゝ襲用したものだからワシントン條約が樞府を通つてゐるのに今度のになつてダメだとは筋道が立たぬではないか」と外務省の連中は力み返つてゐる。

四、第八條の（ロ）の（三）に「魚雷を發射するやう裝置されたること」とある「このされたることといふのは用語法が過去の形になつてゐるから良くない」といふのが樞府の意見だ、「これは「一度でも裝置されたことのあるもの」はこの中に含まれる」といふ三百代言式な解釋法とも見えないではない、外務省では「されたるは現在完了の概念を表はすもので、少し文法を學んだ人なら裝置せられてゐることと取る以外には取りやうはないはずだ」とたかをくゝつてゐる。

五、第十條に principal dimensions とあるのを外務省は主要寸法と譯した、それを二上書記官長は「メートル法を採用してゐる今日に昔の丈尺寸分の度法によつて寸法などといふ文字を使うのは面白くない」といひ張つて心あるものの腹の皮をよらせてゐる。これなどは正に暑さ忘れの絶好のナンセンスである。

六、附屬書第二の第七款に reasonable variation とあるのを外務省は「合理的相違」と譯した、ところが樞府は「相違と

いふのは江戸文學の用語で馬琴が造りだした文字だ、こんな字はイカン、差異に改むべし」と主張した、外務省では「ヴァリエーションは相違で立派に概念が出るから改訂の必要はない」と頑ばつてゐる、そこで手近の辭書を引いてVariation を見てみると井上英和大辭典には「變化、變易、不同、相違」とあり齋藤英和中辭典には「標準より多少變化あること」として變形、變質、變種の意味と譯してゐるところ、これも外務省に勝目がありさうだ。

第五回「ロンドン」海軍條約審査委員會

一、場　所　樞密院事務所

二、日　時　昭和五年九月一日午後一時開會四時散會

三、出席者

樞密院側　倉富議長、平沼副議長、伊東委員長、各委員、二上書記官長、書記官

政府側　濱口總理大臣、幣原外務大臣、財部海軍大臣

四、議事要旨

伊東委員長　前回ノ委員會ニ於テ、黑田顧問官ヨリ條約文ニ關シ質問ノ諸項中、條約前文ニ掲ゲタル伊國全權ノ姓名ニ誤謬アリ、卽チ Alfredo トアルベキヲ Afredo トナリ居ル件ニ付テハ、外務大臣ノ答辯洩レトナリ居ルニ付、右ニ關スル外務大臣ノ說明ヲ得度シ。

黑田委員　Alfredo ノ l ヲ脫シ居ル點ニ付テハ、如何ナル措置ヲ執ラルル考ナリヤ？外務大臣ノ說明ヲ煩シ度シ。

幣原外務大臣　黑田顧問官ヨリ質問ノ他ノ諸項ニ對スル答辯ニ取紛レ、唯今指摘セラレタル點ニ付テハ、說明漏レトナリタリ。

條約本書ノ前文ニ列記セル伊國全權委員ノ姓名中、Afredo Acton トアルハ Alfredo Acton ノ誤ナリ、然レドモ、英米兩國ニ於テモ既ニ右誤字ノ儘批准ヲ了シ居ル今日、改メテ調印國間ニ此點ノ訂正ノ交涉ヲ開クコトモ爲シ難ク、且本件誤謬ハ條約ノ效力ニ影響スル所ナキモノナルヲ以テ、英國政府ニ於テハ今更本書ニ訂正ヲ加ヘズ唯ダ Afredo ヲ Alfredo ト認メアルモノトシテ取扱フコトトセル趣ニ付、我方ニ於テモ、原文ハ其儘ニテ御批准ヲ仰グコトトシ度ク、唯ダ譯文ハ正シキ姓名ヲ採リ、「アルフレド」トスルコトトシタシ。

黒田委員　外務大臣説明ノ通取計ハレ差支ナシト思考ス。

河合委員　本條約ノ調印ニ關聯シ、統帥權干犯ト云フガ如キ問題ヲ惹起スルニ至リタルハ慨嘆ニ堪エズ。

會議ニ臨ムニ當リ兵力量ニ關シ全權ニ與ヘタル訓令ハ、豫メ軍令部長及參謀總長ノ間ニ協議セラレタルモノナリヤ？兵力量ニ關スル方針ハ、軍令部長ニ於テ先ヅ之ヲ立案シ海軍大臣ト協議纏リタル後、閣議ニ附シテ決定シ、上奏ヲ經テ、全權ニ與ヘタルモノト考フル處、此ノ順序ニ依リ手續ヲ取運バレタルモノナリヤ？

財部海軍大臣　大體ニ於テ河合顧問官ノ述ベラレタル通ノ手續ヲ履ミタリ、唯ダ、軍令部長ト參謀總長トノ間ニ協議アリタリヤ否ヤハ承知セズ。

河合委員　海軍省軍令部間ノ所謂省部互渉規程ニ關スル問題ヲ惹起シタルハ遺憾ナリ。兵力量決定ノ場合ニ於テ、海軍省軍令部ノ間ニ意見一致シ居ルベキモノナルハ、長年ノ慣行ニテ決定シ居ルベキ筈ナリ、然ルニ海軍大臣「ロンドン」ヨリ歸朝ノ後、問題紛糾シタル結果、初メテ之ガ決定ヲ見タリト云フハ何故ナルカ？

財部海軍大臣　本大臣歸朝ノ後、海軍省軍令部間ニ兵力量決定ニ關スル場合ノ取扱振ニ付取極ヲ作リタルハ、河合顧問官ノ述ベラレタル通ナリ。當時ノ狀況ハ、「ロンドン」會議ニ關スル論爭アリタル帝國議會閉會ノ直後ニテ、回訓發送ノ手續ニ關聯シ世間ニ種々ナル訛傳行ハレ、牽ヒテ海軍部内ニモ疑惑ヲ傳ヘ人心ノ動搖ヲ來サンコトヲ危惧セラレタルニ依リ、從來ノ慣行ガ變更セラレタルモノニアラザルコトヲ明カニシ、以テ部内ノ誤解疑惑ヲ一掃スルコトヲ適當ナリト認メタルモノナリ。

陸軍ニハ兵力量決定手續ニ關シ、陸軍省參謀本部間ニ明文ヲ以テセル内規アリト承知ス、然ルニ海軍ノ省部互渉規程モ同一ノ精神ニ依ルモノト解釋シ得ラレ、又事實上常ニ此ノ慣行ニ從ヒ來レルモ、確然タル明文存セズ、仍テ將來ノ爲此ノ點ヲ明白ニ爲シ置クノ必要ヲ認メ、從來ノ慣行ヲ覺書ニ作リ、上奏御允裁ヲ經、内令トシテ海軍部内一般ニ傳達シタリ。

河合委員　右覺書ハ、海軍大臣ヨリ之ヲ總理大臣ニ移牒セリト傳聞ス。何ノ爲ニ總理大臣ニ照會セルモノナリヤ？總理大臣ハ之ニ贊同ノ意ヲ表シタリヤ？

財部海軍大臣　總理大臣ノ參考トシテ移牒シタルハ事實ナリ。

濱口總理大臣　自分ニ於テ覺書ニ同意ナリヤ否ヤハ、原則ノ問題トシテ言明ノ必要ナシト考フ。唯ダ、具體的ノ問題トシテ、「ロンドン」條約回訓ニ關シテハ、斯クアルベキヲ適當ナリト考ヘ、而シテ斯ク取扱ヒタルモノナリ。

河合委員　海軍大臣ガ内地ニ留マリシナランニハ、統帥權干犯問題ノ如キハ起ラザリシナラン、自ラ會議ニ赴キタルコトガ失敗ナリシモノト考フ。又濱口總理大臣ガ海軍大臣事務管理中、覺書ノ從來ノ慣行ヲ守ラザリシコトハ遺憾ナリ。

財部海軍大臣　自分ガ會議ニ赴キタルコトガ成功ナリヤ、内地ニ留マリタルコトガ有利ナリシヤニ付テハ、何レニ肯定シ、何レヲ否定スルモ自贊トナルベキヲ以テ、答辯ヲ差控ヘ度シ。

濱口海軍大臣事務管理ニ於テ、覺書ノ慣行ヲ守ラザリシガ如ク斷定セラルルモ、自分ハ左樣ニハ思ハズ、覺書ノ趣旨ニテ措置セリトハ、濱口總理大臣自身言ヒ居ラルル所ナリ。

河合委員　覺書ノ趣旨ガ遵守セラレタリトセバ、統帥權干犯問題ガ起ル筈ナシ、統帥權問題ガ起リタルコトト、覺書ノ趣旨ガ遵守セラレタルコトトハ兩立セズ、其ノ間ニ矛盾アリ。

財部海軍大臣　矛盾ニアラズ、濱口海軍大臣事務管理ハ覺書ノ趣旨ニテ處理セラレタルモノナリ。當時ノ實情ハ濱口總理大臣ヨリノ説明ニ讓リ度シ。

河合委員　本問題ニ付テハ、之レ以上自分ヨリ質問スルコトヲ差控フベシ。

人事問題ニ付質問シタシ。去ル六月十日、海軍次官、軍令部次長其他軍令部班長、課長等海軍ノ幹部ノ殆ド全部ヲ更迭シタルハ何ノ必要ニ出ヅルモノナリヤ？抑モ軍人ハ問題ノ決定ヲ見ル以前ニ於テハ意見ヲ述ベ議論ヲ吐クモ、一度問題ガ決定シタル後ニハ默シテ命令ヲ遵守スルモノナリ、故ニ今次ノ場合ニ於テモ、人事ノ移動ヲ行フ必要ナキ筈ナリ。若

シ問題ノ決定ヲ見タル後、尚抗拒スルガ如キ者アラバ、嚴重ニ懲戒ニ處スベキモノナリ、何ノ必要アリテ幹部全部ノ更迭ヲ行ヒタルモノナリヤ、了解ニ苦シマザルヲ得ズ。

財部海軍大臣　幹部全部ノ更迭ヲ行ヒタルガ如キ事實ナシ。山梨海軍次官ノ轉職ハ、健康ノ理由ニ依ルモノナリ。末次軍令部次長ノ轉職ニ付テハ、全ク問題ヲ異ニス。自分ハ其ノ理由ヲ茲ニ言明スルコトヲ欲セズ。唯ダ一言シ置キ度キハ、末次中將ノ轉職ノ理由ニ付テハ、其ノ長官タリシ加藤大將ニ於テモ全然同意ナリシモノニシテ、其ノ間ニ何等無理アリタルモノニアラズ。其ノ他、軍令部ニ於テ更迭シタルハ、班長トシテハ加藤少將一人、課長トシテハ中村大佐一人ノミニシテ、其ノ大部分ニハアラズ。

河合委員　末次中將ノ轉職ガ、軍令部長同意ノ上トナラバ安心シタリ。然ラバ軍令部長更迭ノ理由如何？

財部海軍大臣　加藤軍令部長ハ、本大臣ガ歸朝スルヤ、回訓案決定當時ノ處置適切ナラズ、爲メニ自責ノ念ヨリ其ノ職ニ留マルニ堪エズトノ理由ヲ以テ、辭意ヲ洩シタリ。後軍令部長ハ、六月十一日　陛下ニ拜謁辭表ヲ捧呈シタリ。　陛下ハ直チニ本大臣ヲ召サレ、其ノ儘ニテ之ヲ御下ゲ渡シ相成リ、其ノ內容ヲ御親覽アラセラレザリシ次第ナリ。本大臣ハ右御下ゲ渡シニ相成リタルニ依リ、速ニ何分ノ處置ヲ執ルノ必要ヲ信ジ、直ニ軍令部長更迭ノ奏請ヲ取計フコトトナリタルモノナリ。其ノ間ノ詳細ナル事情ハ、叡慮ニ關スル事ニモアリ、又加藤大將ノ名譽ノ爲ニモ言明スルコトヲ憚ル。

河合委員　要スルニ、加藤軍令部長ノ意見ニ反シ、兵力量ノ決定ヲ斷行シ、統帥權干犯ノ問題ヲ生ジタルガ爲、加藤軍令部長ハ辭意ヲ決シタルニ相違ナシ。加藤軍令部長ノ名譽ヲ損セザルガ爲ニ更迭ヲ行ヒタリトハ、此ノ意味ナルベシ。

財部海軍大臣　加藤大將ノ名譽ノ爲ニ、更迭ヲ行ヒタルニアラズ、加藤大將ノ名譽ノ爲ニ、更迭ノ實情ヲ言明スルコトヲ得ズト云ヘルモノナリ。

河合委員　三月十四日「ロンドン」ニ於ケル全權ヨリ政府ニ請訓ヲ進達アリタル處、財部海軍大臣ハ請訓ト異ナル別ノ意見ヲ有シ、後ニ至リ海軍次官ヘ其ノ意見ヲ傳ヘタル由ナルガ、其ノ理由如何？

財部海軍大臣　請訓起草ノ時ト、其ノ一二週間後トハ事態ヲ異ニスルモノアリタリ。請訓ノ際ニハ、妥協案ノ對案トシテ中間案ヲ提出スルノ餘地アリヤ否ヤニ付テハ、全權中ニ於テモ、各人ニ依リ別ニ意見ヲ有シタルモ、政府ニ訓令ヲ請フコトニ付テハ、何等ノ異議ナク意見一致シタルモノナリ。當時自分トシテハ、何等カノ新案ヲ立テ、對策ヲ講ズルノ餘地アルニアラザルカトノ考ヲ有セザリシニアラズ、其ノ後事態ノ推移ニ伴ヒ、妥協案ヲ變更スル中間案ヲ提出スルニハ、交渉ノ決裂ヲ賭セザルベカラザルコト明瞭トナルニ至レリ、仍テ此ノ情勢ニ鑑ミ、若シ政府ニ於テ今一應先方ト交渉スルヲ可トセラルルナラバ、自分トシテ其ノ交渉ノ基礎トスベキ中間案ナキニアラズト雖、斯カル案ヲ提出スルニハ會議ノ決裂ヲ覺悟スルコトヲ要ス、故ニ政府ニ於テモ、充分ニ議ヲ練リテ態度ヲ決定セラレ度シトノ趣旨ヲ、海軍次官ニ電報シタルモノナリ。

河合委員　回訓發送ノ翌日、加藤軍令部長ヨリ「ロンドン」ニ於ケル海軍大臣宛ニテ機密第三番電ヲ發送シタリ。之ニ依レバ、軍令部長ガ回訓ニ反對ナルコト明瞭ナリ。海軍大臣ハ何故此ノ軍令部長ノ反對意見ヲ無視シタルカ？

財部海軍大臣　四月二日附加藤軍令部長ノ電信ヲ接受シタルハ事實ナリ、然レトモ、右電信ハ寧ロ儀禮的ノ性質ヲ有スルモノニシテ、自分ノ努力ニ謝辭ヲ述ベ、且自分ヲ激勵シタルニ止マリ、何等回訓ニ反對意見ヲ表シタルモノニアラズ。電文中、訓令ノ內容ニ觸レタルハ、八吋砲艦ニ關スル留保ノ問題、及潛水艦ニ關スル他艦種トノ融通ノ問題ニシテ、此ノ二問題ニ付、充分强硬ニ談判センコトヲ注文シ來リタルモノナレバ、寧ロ軍令部長ニ於テ回訓ニ同意シタル證據ト云フベク、決シテ反對意見ヲ有シタル證據トナルモノニアラズ。

河合委員　海軍大臣ニ於テ、軍令部長ノ眞意ニ付誤解セラレタルモノナルベシ。何故、海軍大臣ハ軍令部長ニ反對意見アルヤ否ヤヲ確ムルコトヲ爲サザリシカ？

財部海軍大臣　確ムル必要ヲ認メザリシモノナリ。自分ノ不在中、濱口總理大臣ガ海軍大臣事務管理タリシモノニテ、若シ軍令部長ニ於テ反對意見アリタリトセバ、東京ニ於テ海軍大臣事務管理ニ其ノ旨ヲ申出デ協議スベキモノナリ、自分

トシテハ、政府ヨリノ回訓ヲ接受シタル以上、之ニ依リ行動スルノ外ナク、「ロンドン」ヨリ軍令部長ノ意見ヲ問合ハスベキ筋合ニアラス。河合委員質問ノ電報ノ内容ハ讀ミ上グルモ差支ナシ。(四月二日附加藤軍令部長電報ヲ朗讀)

河合委員　海軍大臣ハ、調印シタル條約ヲ、元帥府ニ附議スベキヤ軍事參議院ニ附議スベキヤニ付、政府ト協議シテ決定セラレタル由ニ聞キ居レリ、又軍事參議院ニ附議スルニ付テモ、參議官ヨリモ先ヅ政府ト協議シテ萬事ヲ決定シタル由ナルガ、何故斯ノ如キ行動ニ出デタルカ?

財部海軍大臣　絶對ニ斯カル事ナシ。海軍大臣タル自分ト軍令部長ト協議シテ、元帥府、軍事參議院ノ何レニ附議スルヲ可トスベキヤヲ決定シタリ。之ハ軍部ノ部内ノ事ナルガ故ニ、政府ト協議スベキモノニアラズト考ヘ、政府ト協議スルコトナク處置シタリ。總理大臣ニ其ノ旨ヲ内話シタルニ、總理大臣モ同一ノ意見ヲ有セラレタリ。新聞紙ニハ、總理大臣ノ干渉アリタルガ如キ種々ノ記事アリタルモ、何レモ事實無根ナリ。

伊東委員長　海軍大臣ハ加藤軍令部長ノ電報ヲ讀マレタルガ、河合顧問官ノ言ノ如ク、右電報ノ内容ト回訓トノ間ニ意見不一致ノ存スルコト明白ナリ。右電報寫ヲ各員ニ配布セラレタシ。

財部海軍大臣　右電報ハ海軍部内ノ事ニ關スルモノナルガ故ニ、之ヲ提出スルコトハ直ニ應諾シ難シ。

伊東委員長　海軍大臣ガ電報寫ヲ提出スルコトヲ拒ムハ卑怯ナリ、朗讀シタルモノヲ提出セヌトハ何事ゾ、恐ラク弱點アルガ爲、之ヲ我々ニ配布スルコトヲ得ザルモノナラン。自分モ其ノ電報ニ付テハ報道ヲ受ケ、寫ヲ所持シ居レリ。我々ノ手許ニ在ル電文ノ後段ニハ、回訓ニ反對セリ、上奏ヲモナス決心ヲ有ストアリ。(海軍大臣ノ朗讀シタルト類似ノ内容ヲ有スル電報ヲ朗讀)之ハ文句コソ異リ居レド、海軍大臣ノ朗讀サレタル電文ト意味ハ同一ナリ。斯クノ如ク、軍令部長ニ於テ回訓ニ反對意見ヲ有シタルコトハ明瞭ナリ。

財部海軍大臣　卑怯ト云フガ如キ言辭ニ對シテハ答辯スルコトヲ爲サザルベシ。唯ダ自分ノ讀ミタル電報ノ意味ガ、河合顧問官ノ言ハレタル所ト同一ナリトハ、自分ハ全然同意出來ザルコトヲ確言シ置クニ止ム。電報寫ヲ配布スルコトヲ應

諾シ難シト云フハ、内部關係ノ文書ナルガ故ナリ。

濱口總理大臣　只今頻リニ回訓發送當時ニ於テ、政府ト軍令部長トノ間ニ意見ノ一致アリタルヤ否ヤニ付論議セラレ居ル處、當時自分ハ海軍大臣事務管理ノ職責ニ當リタル者ナルガ故ニ、全部ノ責任ヲ負フテ自分ヨリ充分説明スベシ。財部海軍大臣ニ質問セラルルモ、同大臣ハ不在中ナリシヲ以テ、事情ヲ詳カニセザル點モアルベシ、仍テ直接其ノ責ニ當リタル自分ヨリ答辯スルコトト致度シ。

河合委員　質問ヲ獨占スル嫌アルヲ以テ、本件ニ關スル質問ハ他日ニ讓ルコトトスベシ。

前回ノ財部海軍大臣ノ説明中、米國ハ八吋砲巡洋艦十三萬噸ヲ建造シ、更ニ十萬噸ヲ計畫シタル如ク述ベラレタルガ、米國上院ノ討議ニ依ルニ、米國ニ於テ竣工シタル八吋砲巡洋艦ハ二隻ナリ。何レガ正確ナリヤ?

財部海軍大臣　米國ニ於テ、八吋砲巡洋艦十三萬噸竣工シ居レリト云フニハアラズ、最初ニ八萬噸ノ計畫ヲ立テ、之ハ豫算モ通過シ居レリ、然ルニ後ニ至リ十五萬噸ノ計畫成立シタルガ、其ノ中五萬噸ニ對シテハ豫算成立セルモ、殘リ十萬噸ニ對シテハ未ダ豫算通過シ居ラズ、卽チ米國ノ八吋砲艦建造計畫ハ全部ニテ二十三萬噸ナルガ、其ノ中豫算ノ通過セルモノ十三萬噸ナルコトヲ説明シタルナリ。日本ハ八吋砲巡洋艦十萬八千四百噸ヲ有スト云フモ、現在ニ於テ全部竣工シ居ルニアラズ、追テ竣工スベキ分ヲモ含マシメタルモノニシテ、説明ノ便宜上簡單ニ述ベタルニ過ギズ。

荒井委員　回訓案ノ決定ニ付、軍令部長ト海軍大臣事務管理トノ間ニ於ケル經緯ノ内情ヲ承知シ度シ?

濱口總理大臣　平常ノ場合ナラバ、海軍兵力量ノ決定ニ關シテハ、軍令部長立案シ、海軍大臣ト協議ノ上、閣議ノ決定ヲ經ル順序ナルモ、國際會議ノ經過ニ關シ我全權ヨリ請訓シ來レル場合ニ、之ニ對スル回訓案ニ付テハ順序ハ逆トナリ、自分ヨリ軍令部長ニ協議スルノ手順トナルモノナリ。

「ロンドン」條約ノ回訓ニ際シ、當時臨時海軍大臣事務管理タリシ自分ト軍令機關トノ間ノ交渉關係ニ付テハ、當時ノ事情ヲ詳述スレバ、自然ニ御諒解ヲ得ルコトト思考ス。

此處ニ豫メ御參考ノ爲一言ヲ要スルコトハ、今回ノ場合ハ、日本ガ參加シタル國際會議ヲ、日本ノ態度ニ依ツテ決裂セシムベキヤ、將タ又之ヲ成立セシムベキヤヲ決スベキ、極メテ重大ナル岐路ニ立チテ、全權ノ請訓ニ對シテ如何ナル回訓ヲ發スベキヤヲ決定スベキ、誠ニ切迫シタル場合ニシテ、普通ノ場合トハ大ニ事情ヲ異ニスル爲ニ、自然其ノ間ニ於ケル手續順序等モ、普通ノ場合トハ必ズシモ一樣ナルヲ得ザリシコト是ナリ。此ノ點ヲ一應委員各位ノ念頭ニ入レ置カレテ、以下ノ陳述ヲ聞カレンコトヲ望ム。

自分ハ財部海相不在中、臨時海軍大臣事務管理ヲ仰付ケラレタルガ、其ノ間、海軍部内トハ常ニ密接ノ連絡ヲ保持スルニ留意セリ。而シテ自分ガ直接加藤前軍令部長ト會見シタルハ前後三回ニシテ、其ノ外、必要ナル場合ニ於テハ何時ニテモ互ニ會見シテ意見ヲ交換スベキ旨自分ヨリ申入置キタリ。其ノ第一回ハ、全權ヨリ請訓ノ電報ヲ接受シタル三月十五日ヲ距ル四日目ノ三月十九日ニシテ、其時軍令部長ハ

「先ヅ、帝國當初ノ主張ガ作戰計畫上必要ナル所以ヲ力說シ、米國案ニ依ル兵力量ヲ檢討スルニ、軍隊指揮官トシテ成敗ヲ度外視シテ實戰ニ臨ム場合ノ當然ノ覺悟ハ別トシ、國防用兵作戰計畫ノ責任者トシテ之ヲ受諾スルコトハ不可能ニシテ、他ニ何等カ確固タル安全保障條件ニテモナキ限リ、我主張ヲ讓ルコトヲ得ザルベキ旨」

ノ意見開陳（大要）アリタリ。自分ハ之ニ對シテ、

「軍令部長ノ意見ハ承リ置クベク、回訓ノ立案ニ付テハ篤ト講究ヲ要スベキ旨」

答ヘタリ。蓋シ此ノ當時ハ、自分ハ首相トシテハ勿論ノコト、海軍大臣事務管理トシテモ、未ダ何等ノ定マリタル考ヲ有シ居ラザリシナリ。爾後全權ノ電報報告等ヲ熟覽シ、交渉ノ經過ヲ稽ヘ、國家ノ大局上愼重ニ案ヲ練リツツアリタリ。第二回ハ、三月二十七日、岡田參議官、加藤軍令部長同列ニテ會見シタリ。此ノ朝自分ハ既ニ若槻全權ノ詳細ナル電報ヲ受取リ熟讀シ居リタリ。（軍令部長ハ未ダ一讀シ居ラザリシモノナリ。）其ノ節、軍令部長ヨリ

「種々其ノ理由ヲ述べ、帝國ノ主張ヲ更ニ押返ヘシテ强硬ニ交渉ヲ試ムベキ旨」

ヲ陳述シタリ。軍令部長ノ意見トシテハ、强ク押セバ當初ノ主張ガ通ルカモ知レズ、假令通ラヌ場合ニ會議ノ決裂ヲ見ルモ亦止ムヲ得ザルベシトノ口吻アリタルヤニ察セラレタリ。自分ハ之ニ對シテ、

「全權請訓ノ案ハ我所期ニ達セザルモ、熟々「ロンドン」ニ於ケル交渉ノ經過ヲ案ズルニ、該案ハ我全權ガ最善ノ努力ヲ以テ到達セル最後ノ案ニシテ、若シ我國ガ之ヲ承諾セザルカ、又ハ更ニ我方ノ主張ヲ押返ヘシテ重ネテ交渉ヲ試ムルノ結果ハ、主張ガ通ラヌカラトテ今更讓步ハ出來ザルベキヲ以テ、勢ヒ會議ノ決裂ヲ覺悟セザルベカラズ、此ノ際決裂ヲ誘致スルコトアリテハ、外交上、國防上、財政上其ノ他ニ涉ツテ帝國ノ前途ニ重大ナル影響ヲ及ボスベク、就テハ自分ハ海相事務管理タルト同時ニ總理大臣タルガ故ニ、國家大局ノ上ヨリ深ク考慮ヲ運ラシ、大體ノ方針トシテハ、全權請訓ノ案ヲ基礎トシテ協定ヲ成立セシメ、會議ノ決裂ヲ防止シ度キ心持ヲ有スル旨」

ヲ述べ、軍令部長ノ意見ニ對シテハ、尙ホ自分ニ於テ考慮スル所アルベキモ、部長ニ於テモ、篤ト前述ノ趣旨ニ對シテ深甚ナル考慮ヲ望ム旨ヲ述べテ、諒解ヲ求メ置キタリ。（之ニテ、自分ガ首相兼事務管理トシテ、大體今回ノ協定ヲ纏ムル精神ヲ以テ回訓案ヲ作成シタキ方針ヲ有シ居ルコトヲ、兩氏共ニ了知セラレタルモノト思フ。）扨テ、請訓接受以來既ニ半ケ月ヲ經過シ、此ノ上長ク回訓ヲ遷延セシムルハ、内外ノ形勢ニ鑑ミ、國家ノ不利尠カラザルヲ認メ、軍部ノ專門的意見ハ出來ル丈ケ之ヲ斟酌シテ回訓案ノ作成ニ着手スベク、四月一日ノ定例閣議ニ於テ回訓案ヲ決定スルコトヲ豫定シ、三月三十一日、外務省ニ於テ回訓案ガ脫稿シタルヲ以テ、四月一日朝八時半、岡田參議官、加藤軍令部長及山梨次官ノ來邸ヲ求メ（會見ノ資格ハ海相事務管理トシテノ資格）（同日朝會見ノ事ハ、前日山梨次官ヲシテ他ノ二氏ニ通知セシメ置キタリ）、自分ヨリ

「請訓到達以來、自分ハ、内外諸般ノ情勢ヨリ考慮ヲ重ネ、軍令部長ノ御意見モ伺ヒ、岡田參議官ヨリモ亦御意見ヲ承リ、又海軍次官ヨリハ連日海軍諸般ノ事項ニ亙テ說明ヲ煩ハシ、且隨時意見ヲモ徵シ、日夜愼重ニ考慮研究ノ結果、會議決裂ノ場合ニ於ケル國際關係ニ及ボス惡影響、造艦競爭ノ免カルベカラザルコト、財政ヲ中心トセル内政上ノ諸問題

等ニ思ヲ致シ、軍縮會議ノ使命ト目的トニ考ヘ、國家ノ大局上、遂ニ最後ノ判斷ヲ下スベキ場合ニ到達シ、此ノ見地ニ基キ、外務大臣ト相談シテ回訓案ヲ作成シ、此ノ回訓案ヲ以テ本日ノ閣議ニ諮リ其ノ決定ヲ乞ハントス。此ノ回訓案作成ニ當テハ、軍部ノ專門的意見ハ、勿論是レ迄充分ニ承リ、重キヲ置イテ之ヲ考慮酌斟シタルコトヲ篤ト御諒知ヲ願ヒ度シ」

トノ意味ヲ敷衍シテ、三氏ノ諒解ヲ得ルニ努メ、回訓案ノ說明ヲナシタリ。

之ニ對シテ、岡田參議官ヨリ

「總理（此ノ用語ハ必ズシモ正確ナラザルヤモ知レズ、總理並ニ海相事務管理ト云フ意味モ包含サレ居ルモノト解ス）ノ御決心ハヨク解リマシタ。此ノ案ヲ以テ閣議ニ御諮リニナルコトハ已ムヲ得ヌコトト思ヒマス。專門的見地ヨリスル海軍ノ主張ハ從來通デアリマシテ、之ハ後刻閣議ノ席上デ、次官ヨリ陳述セシメラルル樣御取計ヒヲ願ヒマス。若シ此ノ案ニ閣議デ定マリマスナラバ、海軍トシテハ之ニテ最善ノ方法ヲ研究致サス樣盡力シマス」

トノ挨拶アリタリ。更ニ加藤軍令部長ヨリ（言葉通リ記憶セザルモ、趣旨ハ同ジ）

「用兵作戰上カラハ、米國案デハ困リマス、、、、、、、用兵作戰ノ上カラハ、、、、、、、」

トノ旨ヲ附言セリ。

自分ハ、右ノ岡田參議官ノ意見ハ、海軍ノ專門的見地ヨリシテノ代表意見ナリト承知シ居タリ（卽チ、自分ノ說明ニ對シテ岡田參議官ガ前述ノ如キ挨拶ヲ述ベラレタルハ、豫メ加藤軍令部長ニ於テモ承知ノ上ト聞ケリ）。

隨テ、最後ニナシタル加藤軍令部長ノ附言ハ、岡田參議官ノ代表挨拶ノ一部（卽チ中段）ヲ繰リ返シテ述ベラレタルモノニシテ、結論ニ於テハ、岡田參議官ノ陳述ト異ナラザルモノト信ジタリ。卽チ、軍部專門家ニ於テモ、結局回訓ニ異議ヲ唱ヘザルモノナルコトヲ信ジ居タリ。

於是自分ハ回訓案ヲ次官ニ手交シ、三氏ニ向ツテ

「之ニ對スル專門的ノ研究ヲ求メ、其ノ研究ノ結果ヲ山梨次官ヨリ報告ニ接スル迄ハ、回訓案ヲ閣議ニ上程スルヲ差控ヘ居ルベキ旨」

ヲ述ベ、三氏ハ官邸ヲ辭去シ、相携ヘテ海軍省ニ向ヘリ。閣議ハ午前十時ヨリ開カレ、他ノ問題ヲ協議シ居タルガ、同日正午過ギ、山梨次官漸ク首相官邸ニ來リ、海軍側ニ於ケル相談ノ結果ナリトテ、回訓案ニ對スル三個ノ修正希望ヲ開陳シタリ。內一ケ條ハ、外務大臣ノ說明ニ依リ、直ニ諒解シテ之ヲ撤回シ、他ノ二ケ條ハ、希望ノ通ヲ承認シ、回訓案ノ字句ヲ修正セリ。此ノ修正希望ニ付テモ軍令部長ハ無論協議ニ與カリタルモノト信ジタリ、何トナレバ、三人列席ノ場所ニテ、自分ヨリ之ヲ研究ノ上、其ノ結果ヲ申出デラレンコトヲ申渡シ置キタレバナリ。是ヨリ山梨次官ヲ列席セシメテ一時休憩中ナリシ閣議ヲ續行シ、回訓案ヲ議題ニ供シ、外務大臣ヨリ案ノ說明アリテ、愈々協議ニ入レリ。閣議ノ席上ニテ、今朝ノ約束ニ基キ（卽チ三人列席、岡田參議官陳述中ノ希望）、海軍側ノ最後ノ意見トシテ次官ヨリ述ベタルモノノ內容ハ

「回訓案ヲ專門的ノ立場ヨリ見ルニ、總括的比率ハ略ボ完全ニ貫徹スルヲ得タルモ、八吋巡洋艦ハ米國ニ對シ向フ六ケ年間ハ相對比率ノ低下スルニ委セザルベカラザルコトトナリ、又潛水艦ニ對シテハ現有量ノ三分ノ一ヲ低下スルノミナラズ、我造艦能力ヲ萎靡衰頹セシメ、潛水艦廢止ノ前提タランコトヲ危惧スルヲ以テ、回訓案ノ審議ニ方リ、是等ノ點ニ關シ充分ノ御考慮ヲ加ヘラレンコトヲ御願ヒス。尙ホ此ノ回訓案ハ、此ノ儘此ノ席上ニテ決定セラルルガ如キ場合トモナラバ、次ノ御考慮ヲ願ヒ度シ、卽チ、軍備制限協定ノ成立ニ伴ヒ國防計畫實施上起リ得ベキ困難ナル諸點ヲ緩和スルノ對策トシテハ、內容充實ト術力向上トニ俟ツ外ナシ、之ニ對シ必要ナル事項ノ實行ニ關シ、充分ノ御配慮ヲ願ヒ度シ」

トノ要旨ノモノナリ。

此ノ如ク、右海軍側ノ陳述中ニハ「國防計畫實施上」ノ語モアリ、且原案ノ如ク回訓ノ決定サルベキヲ豫想シタル場合

ノ善後策ヲ記載シアル此ノ覺書ハ、豫メ加藤軍令部長ノ閲覽ヲ經タルモノニシテ、軍令部長ノ意見モ當然之ニ包含セラレアルモノニシテ、之ニテ回訓ニ對スル軍部ノ異議ナキモノト信ジ居ル次第ナリ。又事實ニ於テ、軍令部長ハ海相事務管理タル自分ニ對シテモ、其ノ他ノ關係者ニ對シテモ、此ノ事ヲ否認スルガ如キ、又ハ阻止スルガ如キ何等ノ積極的行動ヲ執ラザリシモノナリ。

斯クテ閣議ハ種々協議ノ結果、回訓案ヲ可決シ、同時ニ山梨次官提出ノ覺書ハ、其ノ希望ノ通リ之ヲ考慮スベキコトヲ承認シテ、閣議ヲ終了シ、上奏ノ上、同日全權ニ向ツテ訓電ヲ發送シタリ。爾後海相事務管理タル自分又ハ政府全體ノ處置ニ關シ、自分ハ事務管理ノ資格ニ於テ、軍令部長ヨリ四月二日帷幄上奏ヲナシタル件ニ關シ通牒ヲ受領シタルモ、何等反對意見ノ表示ニ接シタルコトモナク、自分トシテハ當時何等ノ問題ナカリシモノト信ジタリ。

回訓發送ノ翌日、卽チ四月二日、自分ガ海相事務管理トシテ時ノ軍令部次長ヲ招致シ、回訓案ノ決定ニ關スル經過ヲ述ベ、事後ナガラ諒解ヲ求メ、種々意見ヲ交換シタル時モ、亦同樣ノ感想ヲ有シタリ。卽チ、軍令部次長ハ、此ノ兵力量ヲ以テシテハ作戰計畫ノ變更ヲ要スル處、其ノ變更ハ急ニハ出來ヌ、又急ニスル必要モナシトノコトニシテ、結局回訓反對ノ意味ナカリシモノト信ジタリ。

以上ハ、回訓發送ノ前後ニ渉リ、自分ガ海相事務管理トシテ、又首相トシテ關知セル事實ヲ有リノ儘ニ申述ベタルモノナリ。之ニ依リテ當時ノ事情ヲ御諒察アラムコトヲ希望ス。

要スルニ、軍令部トシテハ、用兵作戰ノ專門的見地ヨリスレバ條約ノ兵力量ニ不足アルモ、政府ガ國家ノ大局上ヨリ回訓ヲ決定セラルルナラバ、之ニ對シテ國防計畫實施上適當ノ手段ヲ講ジ、最善ノ努力ヲナシテ、國防ノ不安ナカラシムルノ覺悟ヲ有シタルモノナルコトハ、自分ノ確信シ居ル所ニシテ、換言スレバ、回訓ニ際シ、政府ノ處置ニ對シ結局ニ於テ異議ナカリシモノト認ム。然ル處、世上往々前軍令部長ガ回訓發送ニ同意シ居ラザリシガ如キ言說ヲ聞クハ、自分ノ意外トスル所ニシテ、然カモ斯クノ如キ言說ノ流布ヲ招クニ至レルハ、私カニ遺憾ニ感ジ居ル次第ナリ。

顧ミレバ、請訓接受以來、回訓發送迄回訓問題ニ付、海軍大臣側ト軍令機關側トノ間ニ種々ノ交渉議論アリ、之ガ爲大分ノ日子ヲ要シタル次第ナルガ、是問題ノ極メテ重大ナルガ爲ニシテ、而カモ此ノ問題ニ關係アル諸官ガ、何レモ國家ノ爲熱心ニ其ノ最善ト信ズル所ヲ主張シタルモノニシテ、一ニ其ノ職責ニ忠實ナルノ致ス所ナルコトヲ、自分ハ今日ニ於テモ確認スル所ナリ。

荒井委員　總理大臣ハ、軍令部長ニ於テ同意シタルモノト認定セラレタルモノナルベキモ、或者ハ其ノ同意ナカリシモノト認メ居リ、其ノ間ニ認定ヲ異ニセルヤモ知レズ、何レニスルモ、總理大臣ノ說明ハ充分ニ了承シタリ。

河合委員　回訓案決定ニ際シ、何故岡田大將ガ出デテ之ニ關與セルモノナリヤ？軍事參議官ハ岡田大將以外ニモアリ、然ルニ岡田大將ノミガ何故之ニ關係シタルカ？

閣議ノ席上、海軍次官ガ覺書ヲ讀ミタリトノコトナルガ、右覺書ハ軍令部長ガ同意ヲ與ヘタルモノナルコトニ間違ナキヤ？

濱口總理大臣　岡田大將ヲ呼ビ出シタルハ、軍事參議官ノ一人トシテニアラズ、岡田大將ハ海軍ノ長老ニシテ、特ニ全權ヨリノ請訓接到前後ノ頃ヨリ事態ヲ憂慮シ、海軍省軍令部間ノ意見ヲ取リ纒メ圓滿ナル解決ヲ圖ランガ爲、自ラ進ムデ熱心ニ斡旋盡力セラレ居リタルニ依リ、自分ハ海軍ノ長老タル同大將ヲ招致シテ、其ノ意見ヲ聽クコトヲ必要ニシテ且ツ有效ナリト考ヘタリ。四月一日ノ朝回訓案ヲ示シタル際ノ岡田大將ノ挨拶ハ、軍令部長トモ豫メ相談ノ上ノコトニテ、一己ノ意見ニアラズ（此事ハ自分ハ事前ニ於テ承知シ居タリ）。又閣議ニ於テ海軍次官ガ述ベタル所モ、固ヨリ次官一己ノ意見ニアラズ、其ノ朝加藤軍令部長モ列席ノ處ニテ岡田大將ヨリ「軍部ノ專門的意見ハ海軍次官ヨリ閣議ニ於テ述ベサセルコトヲ承諾アリ度シ」トノ言葉アリタルニ依リ、之ニ承諾ヲ與ヘタルモノニシテ、加藤軍令部長ニ於テ承知ノコトト見ザルヲ得ズ。若シ加藤軍令部長ニシテ不同意ナラバ、直グ本大臣ニ其ノ旨ヲ申出ヅベキ筈ナリ、閣議ノ席上、海軍次官ノ讀ミ上ゲタル覺書（訓令ニ關スル意見）ハ、軍令部長ニ於テ豫メ承知シ居ルニ拘ラズ、軍令部長ハ事ノ前後ニ

於テ一言モ不同意ヲ唱ヘズ、從テ該覺書ヲ以テ軍部ノ代表意見ト見ルハ當然ナリト考フ。

金子委員　回訓案ニ付、閣議決定後、其ノ發送前ニ於テ、元帥府若クハ軍事參議院ニ諮詢ノ手續ヲ何故執ラザリシカ？

濱口總理大臣　特ニ意味アル次第ニアラズ、「ワシントン」條約ニ付テモ、前ニハ元帥府又ハ軍事參議院ニ諮詢セラレ居ラズ、條約ノ調印後ニ至リ、元帥府ニ附議セラレ居リ、今回モ其ノ先例ニ依リタルモノニテ、當然ノ處置ト考フ。

金子委員　元帥府ノ如キ帷幄機關ニ諮詢ノ手續ヲ盡サザルガ故ニ、統帥權侵犯ノ問題ヲ惹起セリ。憲法ノ原案起草ニ際シ統帥權ニ付テハ特ニ意ヲ用ヒタルモノニシテ、若シ兵力量決定ノ問題ガ議會ノ議ニ依リ左右セラルルガ如キコトアリテハ、國家ノ憂患タルヲ以テ、憲法第十一條第十二條ノ規定ヲ設ケタルモノナリ。(憲法起草當時ノ經緯ヲ說キ、憲法義解及先人ノ言ヲ引用シテ、憲法論ヲ詳述。)然ルニ帷幄機關ノ意見ヲ無視シ、閣議ニ於テ勝手ニ回訓ヲ決定シタルハ不埒千萬ナリ。

濱口總理大臣　金子顧問官ハ、統帥權ノ侵犯云々ヲ論ゼラレタルガ、甚ダ了解シ難キ事ナリ。　天皇ノ大權ハ憲法ニ列記セラル、統帥權モ、兵力量決定權モ、條約締結權モ、共ニ　天皇ノ大權ナリ。憲法第一章各條ノ大權ハ、盡ク　天皇ニ統一セラル。然ルニ一ノ大權ガ他ノ大權ヲ如何ニシテ侵犯スルコトヲ得ベキヤ？斯クノ如キハ想像シ得ザル事ナリ。又輔弼機關タル政府ガ統帥大權ヲ侵犯シタリトハ、是亦想像シ得ラレザル所ナリ。現ニ今回ノ條約ハ、今ヤ將ニ　天皇ノ批准ヲ奏請中ニ屬シ、御批准ヲ俟ツテ始メテ條約ガ確定セラルルニアラズヤ？金子顧問官ノ云ハルル趣旨ハ、恐ラク行政上ノ輔弼機關タル政府ガ、帷幄機關ノ權限ヲ侵シタリトノ意ナランカ？然レドモ之ハ大權ノ侵犯ト云フ問題トハ全然別箇ノ觀念ニ屬ス。本條約ニ關シ大權ハ未ダ發動シ居ラズ、批准ニ依リ初メテ其ノ發動ヲ見ルモノナリ。故ニ今日ニ於テハ、大權侵犯ノ議論ノ如キハ問題トナル筈ナキモノナリ。

金子委員　政府ノ處置拙ナルガ爲、統帥大權干犯問題ヲ惹起セリ。大權ノ干犯ハ由々シキ重大事ナリ。(或ハ不戰條約問題ニ言及シ、其ノ他種々ノ事例ヲ引キテ、同一論旨ヲ繰返ス。)

濱口總理大臣　既ニ述ベタル通統帥大權侵犯ノ問題ハ起リ得ザルモノト確信ス。又今回ノ回訓ニ付テ、軍令部長ハ結局ニ於テ政府ノ處置ニ異議ナカリシモノト信ジタルヲ以テ、權限ノ侵害モアリ得ザルモノナリ。

伊東委員長　回訓發送當時ノ事情ニ付、濱口總理大臣ノ說明ハ明瞭ニシテ、果シテ其ノ通ナラバ、統帥權問題ニ關スル自分ノ憂慮ハ消エテ、事件ノ處理ハ容易トナルベシ。尤モ事實ノ眞相ニ付テハ、自分達モ尙ホ質問シ度キコトアルモ、今日ハ之ニテ散會シタシ。

次回ニハ外交問題ニ關スル質問ナシト考フル故、外務大臣ニ於テハ强ヒテ出席セラルルニ及バザルベシ。

幣原外務大臣　海軍條約ニ付テハ、總理大臣海軍大臣ト共ニ重大ナル責任ヲ連帶スル者ナルヲ以テ、本條約ノ審議ヲ行ハルル以上、常ニ必ズ出席致スベシ。

伊東委員長　多忙ノ職務ニ拘ラズ、外務大臣ニ於テ出席セラルルヲ得バ、固ヨリ結構ナリ。

散　會

(回訓發送當時ノ事情ニ關スル總理大臣ノ說明草稿ハ、同大臣再閲ヲ經タル上、樞密院書記官ニ送付セリ。)

第六回「ロンドン」海軍條約審査委員會

一、場　所　樞密院事務所

二、日　時　昭和五年九月三日午後一時開會午後四時二十分散會

三、出席者

樞密院側　倉富議長、平沼副議長、伊東委員長、各委員（田委員缺席）、二上書記官長、書記官

政府側　濱口總理大臣、幣原外務大臣、財部海軍大臣

四、議事要旨

金子委員　永井外務政務次官ガ樞密院ニ反對ノ演說ヲ爲シタルコトニ付テハ、外務大臣ニ眞相ノ取調ヲ求メ置キタル處、新聞紙ノ報ズル所ニ依レバ、永井次官ハ近日支那ニ出張スルコトトナリタル由ナルモ、同次官ノ失言ニ關スル問題ノ解決ニ至ル迄、其ノ支那出張ハ見合ハサシメラレ度シ。

幣原外務大臣　永井次官ノ演說ニ關スル金子顧問官ノ質問ニ付テハ、直接永井次官ニ確メタルニ、樞密院ヲ攻擊又ハ惡罵シタルコトナク、殊ニ Japan Times ニ揭載セラレタル superannuated and cranky gentlemen ト云フガ如キ嘲罵ノ言辭ヲ用ヒタルコト絕對ニナキ旨ヲ確言シタリ。質問セラレタル事實ハ、永井君ガ他ノ外交上ノ諸問題ニ付講演シタル後、海軍條約ニ言及シ、此ノ條約ハ、世界平和ノ保持及國民負擔ノ輕減ノ爲極メテ重要ナル國際協定ナリトノ堅キ信念ノ下ニ、之ガ成立ヲ妨害スル政治家アラバ、斷然起ツテ戰ハザル可カラズトノ趣旨ヲ述ベタルモノナリト云フ。永井君ガ政治家トシテ海軍條約ニ付堅キ信念ヲ有スル者ナル以上、之ニ反對スル者ニ對シ戰フコトヲ辭セザル決心ヲ有スルハ洵ニ當然ノコトニシテ、其ノ言動ハ決シテ樞密院ヲ罵詈シ、之ニ挑戰シタルモノニアラズ、尙ホ外務省ガ常ニ樞密院ニ對シ反感ヲ表明スルト云フガ如キ事實ナキコトハ、本大臣ガ玆ニ斷言スルヲ憚ラズ。

金子委員　然ラバ、事實無根ナルコトヲ新聞紙ニ取消サレ度シ。

幣原外務大臣　新聞紙ハ興味本位ニテ報道ヲ傳フルモノナルガ故ニ、之ヲ一々氣ニ掛ケテハ、當局者トシテ何事ヲモ行フコト能ハズ。新聞紙中ニハ、某大臣ノ談トカ某樞密顧問官ノ談トカ稱シテ、不穩當ト思ハルル記事頻々掲載セラルルモ、自分等閣僚ニ於テモ、又樞密顧問官ニ於テモ、斯カルコトヲ言ハレタル人アルベキ筈ナク、此等ノ記事ガ一々取消サレタルコトナシ。若シ一々斯カル記事ニ對シ取消ヲ行フコトトナラバ、取消サザルモノハ眞實ト云フコトトナルベク、斯クノ如キハ、實際局ニ當ル者ニ於テ到底出來兼ヌルコトナリ。

久保田委員　宮中側近ノ者ノ言動ニ付面白カラザル記事新聞紙ニ現ハレタルニ依リ、知人ヲ經テ總理大臣ニモ通ズル樣注意シタルコトアリ。牧野內大臣ニ關スルコトハ、牧野內大臣ニ於テ之ガ取消ヲサレタリ、外務大臣ノ言ハルル所ニモ理屈アリト考フルモ、理屈ヲ離レテ、何トカ新聞紙ニ對シ相當ノ措置ヲ執ラルル方宜シカラザルヤ御考ヘ置キヲ請フ。米國上院ニ於ケル「スチムソン」ノ日本全權ニ對シ脫帽ス云々ノ言辭ハ、我國ニ對シ嘲笑スルモノナリトテ、一般ニ惡印象ヲ與フルモノアリ。斯クノ如ク、條約ニ關スル議論ハ、國際的ニ影響スルモノナル故、永井次官ノ演說ニ付テモ何トカ取消ノ方法ヲ考慮セラレ度シ。

伊東委員長　此等ノ事ハ、何レモ條約審議ノ本筋ヲ離レタル問題ナルヲ以テ、質問ヲ打切リ、他ノ問題ノ審議ニ移ルコトシ度シ。

河合委員　總理大臣ハ、海軍大臣事務管理中、兵力量ニ關スル問題ノ取扱方ニ付、從來ノ慣行ヲ承知シ居ラレタルモノナリヤ？又兵力量決定ノ問題ニ關シ、海軍省軍令部ノ間ニ覺書ヲ作成シタル由ニテ、右覺書ニ關シ、總理大臣ハ通牒ヲ受ケラレタルモ、之ニ對シ單ニ受領ノ旨回答セラレタリト傳聞セリ。何故ニ單ニ受領ノ旨回答シタルモノナリヤ？總理大臣ニ於テ覺書ニ異議アリタルモノナリヤ？

濱口總理大臣　從來ノ慣行ハ大體承知シ居タル故、慣行ノ精神ニ從テ處理シタル積リナリ、又覺書ニ關スル通牒ニ對シ受

領ノ旨回答ヲ與ヘタルニ止マルハ、覺書ハ直接政府ニ關係スルモノニアラズ、海軍省ト軍令部間ノ內部關係ニ止マルモノ故、政府トシテ之ニ贊否ヲ表スル筋合ノモノニアラズ、依テ單ニ受領ノ旨回答スルニ止メタルモノナリ。

河合委員　兵力量ノ決定ニ付海軍省軍令部ノ間ニ意見ノ一致ヲ見ザル場合、內閣トシテハ如何ニ取扱フ積リナリシカ？又海軍省軍令部ノ意見一致シ、內閣ニ於テ此ノ意見ニ反對ノ場合ニハ、如何ニ取扱フ積リナリヤ？

濱口總理大臣　兵力量ノ決定ニ付テハ、海軍省軍令部間ニ意見一致シアルベキモノナル以上、意見一致セザル場合ニハ、海軍大臣ハ其ノ一致ヲ見ルニ至ル迄百方努力ヲ繼續スベク、一致セザル意見ガ內閣ニ提出セラルル筈ナキ次第ナリ。又海軍省軍令部間ニ意見ノ一致ヲ見タル場合ニ、其ノ意見ニ內閣トシテ反對ナラバ、卽チ豫算其ノ他ノ點ヨリ考ヘ、內閣トシテハ海軍省軍令部ノ一致シタル意見ヲ實行スルコト能ハズト認ムル場合ニハ、閣僚ノ一員タル海軍大臣ハ、軍令部ト共ニ問題ヲ再考シ、其ノ結果再ビ海軍省軍令部間ニ一致シタル意見ヲ內閣ニ提出シ來ル譯ナリ。斯クノ如キ例ハ從來ト雖屢々存シタルコトニシテ、軍部ノ理想トスル兵力量（理想ナル言葉ハ或ハ面白カラザルベキモ）ハ、政府ニ於テ、財政上外交上等ノ見地ヨリ之ニ同意セズ、爲ニ實行取止トナリ、又ハ重要ナル變更ヲ加ヘラレタル實例多シ。

河合委員　總理大臣ハ衆議院ニ於テ、國防上ノ責任ハ政府ニ於テ之ヲ負フト云ハレタルガ、如何ナル意味ニ出ヅル言ナリヤ？

濱口總理大臣　特別ノ意味アルニアラズ、軍部ノ帷幄機關ハ內部ニ隱レアルベキモノニシテ、議會ト何等接觸ヲ有セズ、議會ニ於テ國防問題ガ議論セラルル場合ニ、之ヲ帷幄機關ノ責任ニ屬スル問題ナリトシテ、政府自ラ之ニ關知セズト云フガ如キ答辯ヲ爲スコトヲ得ザル所ナリ。故ニ、國防問題ハ政府（軍部大臣ヲ包含セル）ニ於テ責任ヲ負フモノナリト答ヘタルモノナリ。

河合委員　總理大臣ハ、議會ニ於テ、本條約ノ兵力量ニテ、國防ハ極メテ安全ナリト述ベラレタリ。如何ナル根據ニテ、斯カル斷定ニ到達セラレタルモノナリヤ？

濱口總理大臣　形式論ヨリ云ヘバ、條約上協定セラレタル兵力量ハ、國防ノ一部ニシテ全部ニアラズ。條約上ノ兵力量以外ニモ、協定以外ノ兵力、內容ノ充實、術力ノ向上等ハ勿論ノコト、其ノ他國防問題ヲ決定スルニ考慮スベキ事情幾多アリ、卽チ、外交上、財政上、經濟上、其ノ他諸般ノ事情ヲ考慮シテ、國防問題ヲ決定スベキモノナリ。依テ自分ハ國防ノ全部ヲ通觀シ、全部ヲ考慮ニ容レ、是レナラバ國防安全ナリト判斷シタルモノナリ。條約上ノ兵力量ガ、假令政府ガ初メ主張シタル標準ニ達セザル場合ニ於テモ、更ニ其ノ內容ノ充實、術力ノ向上等ニ依リ補充スル途アリ、大體ニ於テ國防ハ安全ナリト斷定シタルモノナリ。又條約上ノ協定兵力量ノ內容ニ付テ考フルニ、八吋砲巡洋艦問題ハ、今次ノ條約ニ依リ永久的ニ決定シタルモノニアラズ、今次條約ニ依リ、八吋砲巡洋艦ノ保有量ガ永久ニ日本ヲ拘束スルモノトスレバ、或ハ國防上ノ安全ヲ期スルコト能ハズト云フコトヲ得ベシ、然レドモ、今次ノ條約ハ有效期間短期ナルガ故ニ、卽チ千九百三十六年末迄ノ事態ヲ規定スルモノニ過ギザルガ故ニ、右期間內ニ付テ見レバ、八吋砲巡洋艦ノ現實ナル戰鬪力ニ於テ、英米ノ保有量ト日本ノ保有量トノ比率上、我國防ニ危險ナル事態ノ存スルモノト云フコトヲ得ズ。輕巡洋艦、驅逐艦ニ至ツテハ、日本ノ主張通リ、或ハ主張以上ノ兵力量ヲ確保スルコトヲ得タルモノナリ。又補助艦總括七割ハ、大體ニ於テ日本ノ原主張ヲ貫徹スルコトヲ得タリ。七割比率ニ對シ二分幾厘不足スト云フモ、之ハ問題ニアラズ。又潛水艦ニ付テハ、製艦技術及造船能力維持ノ爲ニ、艦齡ニ達セザルモノト雖新艦ヲ以テ代換スルコトヲ得ル特例ヲ設ケタルガ、此ノ點ヨリモ能率ヲ擧グルコトヲ得ルモノナリ。曩ニ財部海軍大臣ヨリ說明セラレタル二重定員ナル方法ニ依リテモ亦充實ヲ計ルコトヲ得ルモノナリ。潛水艦ノ保有量二萬數千噸、卽チ我要求ノ約三分ノ一ヲ減少シタルモ、條約期間內ニ於テ、右兵力量ニテ國防ノ安固ヲ保持スル方法ナシトハ考ヘラレズ。從テ今次條約ノ協定兵力量ハ、大體ヨリ見テ國防ノ安全ヲ期シ得ルモノト考ヘタルモノナリ。

河合委員　自分ノ質問ハ、條約協定保有量ノ內容ニ關スルモノニ非ズ、軍部ニ反對アリタルニ拘ラズ、總理大臣トシテ國防ノ安全ヲ斷言スルコトヲ得ルヤ否ヤノ點ニ關スルモノナリ。

濱口總理大臣　前回ノ會議ニ於テ述ベタル通、當初軍令部長ニ反對アリタルハ事實ナルモ、結局ニ於テハ、軍令部長ニ於テモ回訓ニ對シテ異議ヲ唱ヘズ、自分ハ軍令部長ニ異議ナカリシモノト了解シタルモノナリ。從テ議會ノ質問ニ對シテ、政府ガ國防ノ安固ナルコトヲ答辯スルモ、更ニ差支ナシト考フ。

河合委員　然シ、前軍令部長ハ最近迄反對シタリ。卽チ、四月二日ニ至リテモ反對意見ヲ有シ、反對意見ヲ上奏シ、同時ニ其ノ意見ヲ世間ニ聲明シタリ。總理大臣ハ、何故ニ前軍令部長ニ於テ回訓ニ反對ナカリシモノト斷定スルヤ？

濱口總理大臣　前軍令部長ニ於テ、最後迄政府回訓ノ處置ニ反對シタリトハ認メズ。此ノ點ハ前回ニ詳細說明シタル所ナリ。又回訓ノ翌日軍令部長ガ如何ナル上奏ヲ爲シタルカハ、其ノ當時、自分ハ海軍大臣事務管理トシテ通牒ヲ受ケ居ルモ、茲ニ其ノ內容ヲ言明スルコト能ハズ。唯ダ其ノ結論ニ於テハ、決シテ本條約ヲ以テシテ國防上ノ責任ヲ執ルコト能ハズト云フガ如キコトヲ含ムモノニアラズト諒解セリ。

河合委員　恐ラク總理大臣ノ思ヒ違ヒナルベシ。前軍令部長ハ、確カニ最後迄回訓ニ反對シタリ。政府ハ前軍令部長ノ反對意見ヲ無視シテ、勝手ニ回訓案ヲ決定シタル樣ニ見ユ。又回訓案ノ決定ニハ、請訓ニ係カル妥協案ガ最後案ナルコトヲ前提トシタルモノナリト聞ケリ、果シテ然ルヤ？

今次會議ノ當初ノ訓令ハ、軍令部長ニ於テ起案シ、海軍大臣ノ同意ヲ得、然ル後內閣ニ提出シ決定シタリトノコトナルガ、回訓ニ際シテモ、軍令部長ガ起案スルコト至當ナラズヤ？

財部海軍大臣　前回ノ委員會ニ於ケル本大臣ノ河合顧問官ニ對スル答辯中、不完全ニテ意志徹底セザリシ點アルニ付、此ノ機會ニ於テ明白ニ爲シ置キ度シ。河合顧問官ハ、訓令ハ軍令部ニ於テ起草シ、政府ニ持チ出ス順序ヲ踏ムベキモノナリト云ハレタルガ、右ハ誤解ナリ。今回ノ海軍會議ニ關スル問題ハ全然國際問題ナルガ故ニ、海軍省ニ於テハ終始政務トシテ之ヲ取扱ヒ、海軍部內ニ於テ本問題ヲ研究スル爲ニ開カレタル委員會ノ如キモ、海軍省軍務局長ニ於テ之ヲ主催シ、軍令部ニ於テ主催シタルモノニアラズ。要スルニ、回訓案ハ政府ニ於テ之ヲ立案シ、軍令部ニ協議シタルモノナリ。

軍令部ニ於テ立案シ、政府ニ協議シタルモノヲ、政府ニ於テ拒ミタルモノニアラズ。今後手續上ノ問題ニ誤解ナキ樣、此ノ點ヲ明カニシ置クモノナリ。

濱口總理大臣　河合委員ハ、請訓ノ妥協案ヲ最後案ナリト前提シテ回訓案ヲ決定シタリト云ハレタルガ、實情ハ次ノ如クナリ。卽チ、三月十四日附全權請訓ハ、十五日ニ之ヲ受領シタリ。右請訓中ニハ「本委員等ノ觀ル所ニ依レバ、新タナル事態ノ發生セザル限リ、英米ヲシテ是以上ノ讓步ヲ爲サシムルコトハ困難ナリト認ム」トノ感想ヲ附シアリ。自分ハ、右ハ佛伊ノ會議ニ於ケル態度ヲ考ヘタルモノト諒解シタリ。卽チ、佛伊ニ於テ會議ヲ決裂セシムル形勢トナリ、英米ニ於テモ條約ノ成立ヲ斷念スルコトトナルガ如キ形勢現ハルルニ於テハ別ニ考ヘザルベカラズトノ趣旨ナリト諒解シタリ。然ルニ、斯カル事態ハ發生セズシテ、三月二十七日ニ至リ、若槻全權ヨリ、今日ニ於テハ是以上（卽チ十四日請訓ノ妥協案以上）ニハ自分ノ努力ニテ讓步セシムルコト全然其ノ見込ナシ、若シ是以上ノ要求ヲ含ム中間案又ハ修正案ヲ提出ストセバ、會議ヲ決裂ニ導クノ覺悟ヲナサザルベカラズ、我々ハ大局上妥協案ヲ承諾スルヲ以テ國家ノ爲利益ナリト考フル旨電報シ來レリ。恰モ右若槻全權ノ電報ニ接シタル當日、加藤前軍令部長來訪シタルニ依リ、若槻全權ヨリ電報接到シタルガ、同全權ハ、形勢ヲ斯クノ如ク觀察シ居リ、自分モ亦同樣ニ考フル旨語リタル處、加藤前軍令部長ハ、未ダ右電報ヲ讀ミ居ラズトノコトナリシニ付、之ヲ讀マレタル上、篤ト考慮サルル樣勸メ置キタリ。卽チ、請訓發送當時ニハ、新タナル事態ノ發生ナキ限リト云フ條件附ノ觀察ナリシガ、最後ニハ、條件ヲ附セズシテ最後案ナルコトノ觀察ヲ全權ヨリ申シ來リタルモノナリ。

河合委員　三月二十七日、加藤前軍令部長ガ濱口總理大臣トノ會見ノ際、此ノ上軍令部長ノ反對意見アルニ於テハ、總理大臣自身ニ於テ裁決ノ外無シト云ハレタル由ナルガ、右ノ言ハ如何ナル權限ニ基クモノナリヤ？

濱口總理大臣　加藤前軍令部長ニ對シ、自分ガ裁決スル外ナシト云ヘルコトナシ。唯ダ會議ノ決裂ヲ避ケ協定ヲ纏メタキ心持ヲ述ベタルノミ。

河合委員　加藤前軍令部長ハ、軍事參議會ノ召集ヲ總理大臣ニ進言シタリト聽キタルガ、事實ナリヤ？

濱口總理大臣　回訓案決定ノ際、軍事參議會ヲ召集シ、其ノ意見ヲ聽キタル後ニテ回訓案ヲ決定スルト云フガ如キハ、先例モナク、又不可能ナリト考ヘタリ。

河合委員　四月一日、回訓案決定ニ先チ、岡田參議官ノ意見ヲ聽キタルハ如何ナル理由ニ出ヅルモノナリヤ？軍事參議官ノ意見ヲ聽クコトヲ必要トセバ、參議官全部ヲ召集スベキニアラズヤ？

濱口總理大臣　岡田參議官ハ、海軍部內ニ紛糾ノ起ルコトヲ非常ニ憂慮シ、自ラ進ンデ海軍省軍令部ノ間ニ斡旋シ、圓滿ナル解決ノ爲ニ熱心努力シタル人ナリ。而シテ常ニ問題ニ直接關與シ居ラレタル人ナルヲ以テ、海軍ノ長老タル其ノ人ノ意見ヲ聞クハ、何等不思議ナルコトニハアラザルノミナラズ、必要ナルコトト考ヘタリ。四月一日ニハ、岡田參議官ノミナラズ、加藤前軍令部長、山梨海軍次官モ共ニ招キタルモノナリ。

河合委員　四月一日、濱口總理大臣ハ、回訓案ヲ海軍次官ニ手交シタル時、前軍令部長ニモ相談セヨト言ヒ渡サレタルモノナリヤ？斯カル重大ナル問題ヲ、海軍次官ニ一任スルガ如キ形式ヲ執ラレタルハ何故ナルカ？軍令部長アルニ拘ハラズ、海軍次官ニ回訓案ヲ手交セラレタルハ何故ナルカ？現ニ軍令部ハ、回訓案ノ審議ニ何等關シタルコトナシト云ヒ居ルニアラズヤ？

濱口總理大臣　軍令部長ガ其ノ協議ニ與ルベキハ、固ヨリ當然ノコトナリ。自分ハ、當時來訪ノ三氏列座ノ席上ニ於テ、三氏ニ對シ、此ノ回訓案ニ付キ協議ノ上、軍部ノ意見ヲ取纏メ回報セラレムコトヲ求メ、其ノ書類ヲ三人ノ面前ニテ海軍次官ニ手交シタルモノニシテ、別段意味アルコトニハアラズ。追テ海軍次官ハ軍部ノ意見トシテ修正案ヲ持チ來リタルモノ故、自分ハ軍部全體ノ協議ニ成リタルモノト信ジタリ、又斯ク信ズルヲ當然ト考フ。

河合委員　海軍次官ガ閣議ノ席上朗讀シタル覺書ハ、前軍令部長ノ同意シタルモノニアラズト聞ケリ、果シテ然ルヤ？

濱口總理大臣　然ル筈無シト考フ。四月一日朝、三人列座ノ處ニテ、岡田參議官ヨリ、軍部ノ意見ハ、後刻閣議ノ席上、

海軍次官ヨリ陳述セシメラルル樣取計ハレ度シト言ヘルニ對シ、自分ヨリ承諾ヲ與ヘタルモノナルガ、其ノ際ノ事實ヲ露骨ニ云ヘバ、右岡田參議官ノ言ハ、書付ニ認メテ持參シ居リ、予ノ面前ニテ之ヲ朗讀シタルモノナリ。上述ノ如ク、加藤前軍令部長ハ其ノ席ニ居ラレタルモノニテ、又岡田參議官ガ讀ミタル書面モ豫メ承知シ居リタリト信ズベキ根據アリ。

河合委員　議會ニ於テ、總理大臣ハ、軍部ノ意見ハ之ヲ斟酌シタリト云ヘリ。然ルニ今日委員會ニ於テハ、軍部ノ意見一致アリタルモノト了解スト云ヘリ。其ノ間ニ矛盾アルニアラズヤ？

濱口總理大臣　本來兵力量ノ關係ノミニ付テ言ヘバ、軍部ノ專門家トシテ、其ノ要求セル所ヲ削減セラレタルニ對シ、欣然同意スルガ如キハアリ得ベカラザルコトナリ。然レドモ、大局ノ形勢ニ鑑ミ、結局ニ於テ回訓ニ異議ナカリシト云フコトハアリ得ルコトニテ、卽チ軍部ニ於テ異議ナカリシト云フコトト、軍部ノ意見ヲ充分斟酌シタリト云フコトハ矛盾ニアラズ。

金子委員　政府ハ、議會ニ於テ、軍部ノ意見ヲ尊重シ斟酌シタリト云ヘリ。加藤前軍令部長ニ於テ同意シタルモノナリヤトノ質問ニ對シテハ、然リトモ否トモ答ヘ居ラズ。然ルニ、今日ニ至リ口調ヲ變ヘルニ至リタルハ何故ナルカ？

濱口總理大臣　議會ニ於テ、加藤前軍令部長ガ如何ナル意見ヲ有シタルカ、帷幄機關ト意見ガ一致シタリヤ否ヤト云フガ如キコトハ、言明スベキ性質ノモノニアラズ。自分ハ斯カル內部關係ノコトハ答辯スベキモノニアラズト考ヘ、殊更ニ軍部ノ專門的意見ヲ十分斟酌シタリト云フ程度ノ答辯ニ止メ、其以上ノコトハ言明ヲ避ケタルモノナリ。樞密院委員會ニ於テハ、進ンデ詳細ニ內部ノ實情ヲ說明スルモノニシテ、議會ニ於ケル答辯トノ間ニ矛盾アルモノニアラズ。

河合委員　政府ハ、軍令部ヲ諮詢機關ト見ルモノナリヤ？卽チ、參考ノ爲ニ意見ヲ徵スル機關ト認ムルモノナリヤ？

濱口總理大臣　軍令部ハ帷幄機關ニシテ、政府ノ諮詢機關ニアラズ、勅命ニ對シ意見ヲ奉答スルコトアラムモ、政府ノ國務ニ關係アル諮詢機關ニハ非ザルコト勿論ナリ。

河合委員　原則トシテ、兵力量決定ノ場合ニハ、將來如何ニ取扱フ積リナリヤ？

濱口總理大臣　先刻ヨリ屢々說明シタル通、今回ノ場合ニ於ケルガ如ク、從來ノ慣行ニ從フベキモノニシテ、將來モ亦同樣ナラムト考フ。

伊東委員長　自分達ガ今日迄政府當局ノ答辯ニ聞キタル事實ト、自分達ガ他ノ方面ヨリ聞キタル事實トノ間ニハ大ナル差異アリ。政府當局ハ、加藤前軍令部長モ結局回訓ニ同意シタルモノト認メラルルモ、自分達ハ幾多ノ反對ナル證據ヲ有スルモノナリ卽チ、

第一、三月十九日、總理大臣ト前軍令部長トノ會見顚末。

第二、三月二十七日、總理大臣ト前軍令部長トノ會見顚末。

第三、四月一日、總理大臣ト岡田參議官、加藤前軍令部長、山梨海軍次官會見ノ際ニ於ケル加藤前軍令部長ノ陳述。

第四、四月二日、前軍令部長ノ帷幄上奏及聲明書發表。

第五、三月二十日、軍部作成ノ回訓案。

第六、四月二十一日ニ至リ、加藤前軍令部長ガ自分ノ立場ヲ認メタルモノヲ海軍省ニ提出シタル文書。

此等ノ證據書類ニ依レバ、加藤前軍令部長ニ於テ回訓ニ贊成シタリト認ムルコト能ハズ、政府當局ノ說明トノ間ニ齟齬アリ此等ノ點ヲ明カニセントセバ、前軍令部長ニ聽クノ外無シ。政府ニ於テ好意アラバ、其ノ方法アルコトト考フル故、加藤前軍令部長ノ出席方取計ハレ度ク、自分ヨリ右ヲ提議ス。

黑田委員　委員長ノ意見ニ贊成ナリ、自分ハ最初ヨリ然ルベキモノト思惟シタリ。至極適當ナル處置ト考フ。

伊東委員長　政府ノ卽答ヲ得ムトスルモノニアラズ、御協議ノ上、回答ヲ望ム。

濱口總理大臣　重大ナル事項ナルガ故ニ、同僚ト相談ノ上、回答スベシ。御要求ヲ承引シタルモノニアラザルコトハ、明カニ御了解置キアリ度シ。

若シ委員長ノ要求ヲ政府ニ於テ承引セズトセバ、次回委員會ハ續行セラルベキヤ否ヤ？

伊東委員長　格別困難ナルコトニアラザルガ故ニ、政府ニ於テ必ズ承引セラルルコトト信ズ、次回委員會ノ開催ニ付テハ、追テ通知スベシ。

財部海軍大臣　如何ナル資格ニ於テ、加藤前軍令部長ヲ招致シ取調ベル次第ナリヤ？

伊東委員長　特別ノ資格ヲ要スルモノニアラズ、唯ダ前軍令部長ハ問題ノ内容ヲ熟知シ居リ、從テ參考トシテ出席ヲ求メ直接説明ヲ聽キ度シトノ趣旨ナリ。

財部海軍大臣　説明委員ノ資格ニ於テナリヤ？

二上書記官長　勿論説明委員トシテナリ。

財部海軍大臣　先例アリヤ？

二上書記官長　幾多ノ先例アリ。

財部海軍大臣　如何ナル先例アリヤ？

二上書記官長　阿片條約ノ審議ニ關シ、殖民地ノ係官ノ出席ヲ求メ説明ヲ得タルコトアリ、又某官制ノ審議ニ際シ、關係省以外ノ殖民地官吏ヲ説明委員トシテ出席セシメタルコトアリ。

散　會

（參　考）

謹啓昨日樞密院審査委員會ニ於テ御提議相成候前軍令部長加藤大將出席方取計ノ件篤ト考量致候處乍遺憾貴意ニ應ジ兼ネ候ニ付不惡御了承相成度此段及御回答候　敬具

昭和五年九月四日

内閣總理大臣　濱口雄幸

樞密院

倫敦海軍條約審査委員長

伯爵　伊東己代治　殿

（同日午後内閣書記官ヨリ樞密院書記官ヘ手交）

第七回「ロンドン」海軍條約審査委員會

一、場　所　樞密院事務所

二、日　時　昭和五年九月五日午後一時開會午後三時二十分散會

三、出席者

樞密院側　倉富議長、平沼副議長、伊東委員長、各委員、二上書記官長、書記官

政府側　濱口總理大臣、財部海軍大臣、(幣原外務大臣ハ病氣ノ爲缺席)

四、議事要旨

伊東委員長　加藤前軍令部長出席ノコトニ付テハ、政府ヨリ御斷ハリノ回答接到セリ(トテ政府ノ回答書ヲ朗讀ス)。其ノ理由ハ我々ヨリ承ハラヌコトトスベキニ付、政府側ヨリモ何モ云ハレザルコトト致度シ。

回訓發送當時ノ事情ハ、斯クテ不明ノ點ヲ殘スコトトナリタルガ、此ノ問題ハ一應留保シテ、次ノ問題ノ審議ニ移ルコトトスベシ。

金子委員　條約第二十三條但書ノ規定ハ、日本ノ主張ニ基キ挿入セラレタルモノナリヤ?

財部海軍大臣　御質問ノ條項ヲ設ケタル主ナル理由ハ、八吋砲巡洋艦建造ニ關スル我主張ニ在ルモノナリ。松平「リード」及齋藤「クレーギー」會談ノ際、米國側ヨリ申出デタル、米國新八吋砲艦第十六隻以下三隻ノ竣工ヲ千九百三十五年以後ニ延期スル案ニ對シテハ、我方ヨリ、米國側ニテ右三隻起工ノ場合ニハ、日本モ八吋砲艦一萬七千六百噸(八千八百噸二隻)起工ノ權利ヲ有スルコトトスベシト强硬ニ主張シタルガ、米國側ニ於テハ、上院ニ對スル關係上之ヲ認諾スルコトヲ困難トシ、日本ノ主張ヲ次回會議マデ留保センコトヲ求メタリ。仍テ種々交渉ノ結果、條約ニ明文ヲ設ケ、次回會議ニ於ケル自由ナル立場ヲ留保スルコトトセリ。斯クノ如ク、第二十三條但書ノ規定ハ日本ノ主張ニ基キ設ケラレ、

他ノ締約國ニ於テモ之ニ均霑スルコトトナリタルモノナリ。

濱口總理大臣　「ロンドン」ニ於ケル交渉ノ經過ハ、全權トシテ交渉ノ衝ニ當ラレタル海軍大臣ヨリ説明ノ通リナルガ、本問題ニ付、日本ニ於テ自分ガ關知シタル處ヲ茲ニ述ブルコトトスベシ。

次回會議ニ於ケル我立場ヲ留保スルコトハ、自分ガ屢回訓ノ決定ニ際シ軍部ノ意見ヲ斟酌シタリト云ヘル、其ノ軍部ノ意見ヲ斟酌シタル要點ノ一ニシテ、政府ノ意見モ亦軍部ノ意見ト一致シタル所ナリ。元來、本條項ヲ設ケタル起原ハ、千九百三十六年以降、大型巡洋艦對米比率ノ低下ニ對シ對策ヲ立ツルノ必要ニ出デタルモノニシテ、軍部ノ意見ヲ容レ、大型巡洋艦ニ關スル我主張ヲ留保スルノ規定ヲ條約ノ明文ニ挿入センコトヲ回訓中ノ一項ニ掲ゲ、此ノ訓令ニ基ク我全權ノ盡力ノ結果、本條但書ノ規定トナリタルモノナリ。而シテ本條項成立ノ上ニテハ、他ノ締約國モ亦之ニ均霑シ、且大型巡洋艦ノミナラズ他ノ總テノ艦種ニ適用アリ、又廣ク條約ノ各規定ニ亙リ適用アルコトトナリタルモノナリ。

金子委員　第二十三條但書ノ規定ハ、法律上無意味ナリ。條約ノ有效期間定マリ居ルガ故ニ、有效期間滿了後ノ事態ニ關シ、次回會議ニ於テ自由ニ主張ヲナスコトヲ得ルハ當然ナリ。仍テ、右但書ノ規定ハ、全ク蛇足ナリト云ハザルベカラズ。

濱口總理大臣　純法律論トシテハ、金子委員ノ所論ノ如シ。國内法トシテ見レバ、尚ホ更其ノ通ナリ。然カレドモ、國際條約ニ於テハ、之ト異ナリ、明文ヲ存スルニアラザレバ更新ノ餘地アルガ如キ誤解ヲ貽ス虞アリ、故ニ特ニ明文ヲ設ケテ、次回會議ニ於ケル我自由ナル立場ヲ明確ニシタルモノナリ。

金子委員　（本件條項ガ蛇足ナル所以ヲ繰返シ論ジタル後）次回會議ニ於テ、我三大原則ヲ主張ストセバ、之ハ軍備縮少トナラズ、軍備擴張トナルベシ。而シテ次回會議ハ、本條約ト同一ノ目的、卽チ軍備縮少ノ目的ヲ遂行スル新條約ヲ商議スルモノナルガ故ニ、軍備擴張トナル三大原則ハ此ノ目的ニ反シ、實行不可能ナルニアラズヤ？

濱口總理大臣　三大原則ハ、必ズシモ軍備擴張トナルモノニアラズ。次回會議ニ於テ日本ガ如何ナル主張ヲナスベキカハ、今日之ヲ確言スルコト難シ、蓋シ技術ノ進歩、新兵器ノ出現、其ノ他國際關係ノ情勢、國内ノ事情等五年間ノ諸般ノ情況

ノ變化ハ到底豫見スルコト能ハズ、仍テ次回會議ニ於テハ、其ノ時ノ情況ニ應ジ最善ノ方策ヲ立ツベキモノニシテ、今日ヨリ三大原則ヲ確定不動ノモノト斷定スルコトヲ得ズ。然レドモ、假リニ、次回會議ニ於テ三大原則ヲ主張スルトスルモ、爲ニ軍備擴張トナルモノニアラズ、何トナレバ、日本ノ主張ハ、對米比率ニ關スルモノニシテ、米國ノ保有噸數低下スレバ、日本ノ保有噸數モ亦低下スルコトヲ得ベク、而シテ日本トシテハ、此ノ保有噸數ノ低下ニ盡力スベキガ故ニ、此ノ日本ノ主張ニシテ實現ヲ見ルトスレバ、日本ノ保有噸數モ、對米比率ヲ低下スルコトナクシテ、之ヲ減少スルコトヲ得ベシ。又若シ總噸數ノ減少ナシトスルモ、八吋砲巡洋艦及潛水艦ニ於テ增加スル代リニ、六吋砲巡洋艦及驅逐艦ニ於テ之ヲ減ジ得ベキガ故ニ、合計ニ於テ、軍備擴張トナルモノト斷定スルハ誤ナリ。

金子委員　（米國ノ太平洋政策ガ、支那ノ門戸開放機會均等ニ在リテ、米國海軍ノ方針ガ、右太平洋政策ノ結果、日本ニ對スル開戰ノ場合ヲ豫想シ、對日作戰ヲ目的トシテ立テラレ、大洋作戰ノ見地ヨリ、大型巡洋艦ニ重キヲ措クモノナルコトヲ詳述シ）斯クノ加ク、米國ハ輕巡洋艦及驅逐艦ヲ不必要トシ、唯ダ其ノ怖ルル所ノモノハ大型巡洋艦及潛水艦ナリ、然ルニ、今次ノ條約ハ、大型巡洋艦ノ我對米比率ヲ六割ニ抑ヘ、潛水艦ノ我保有噸數ヲ削減シタルモノナルガ故ニ、米國ノ成功ニシテ日本ノ失敗ト云ハザルベカラザルニアラズヤ？

財部海軍大臣　御質問ノ趣旨ハ、我々ニ於テモ一應御尤モナリト存ズルガ故ニ、之ニ對シ敢テ强辯セムトスルモノニアラザルモ、金子顧問官ノ至誠ニ出ヅル憂慮ニ對シ、自分ニ於テモ所懷ヲ披瀝シテ御參考ニ供セントス。

海軍艦船ニハ諸種アリテ、其ノ何レノ艦種ガ最モ有力ニシテ最モ必要ナリヤヲ決スルハ、頗ル複雜且困難ナル問題ナリ。從テ何レノ國ニ於テモ、其ノ時代、其ノ時ニ應ジ、此ノ問題ニ付テ研究ヲ重ネ、夫レ夫レノ主張アリ、又右研究ノ結果ニ付テモ、專門家ノ百人ガ百人一致ノ意見ヲ有スト云フ次第ニハアラズ、之ヲ既往ノ事例ニ徵スルニ、魚雷ノ發明、水雷艇ノ出現ノ時代ニハ、大艦ノ無價値論唱ヘラレ、又潛水艦出現ノ時代ニハ、戰艦無用論モ唱ヘラレタルコトアルモ、日露戰爭ニ於テモ、歐洲戰爭ニ於テモ、事實ハ之ニ反スル敎訓ヲ與ヘタリ。

潛水艦ガ我ガ國ニ必要ナルコトニ付テハ、自分ニ於テモ決シテ之ヲ否定スルモノニアラズ、然レドモ、實際ノ用兵ニ於テハ、一艦種ノ不足ヲ他ノ艦種ニテ補フコトモアリ得ルモノナリ。今回ノ條約案出來タル後、打チ解ケタル席上ニテ、米國全權ノ一人ハ自分等ニ對シ「我々ハ、今度ハ、八吋砲巡洋艦ノ必要ヲ强調シ過ギタリ、米國海軍ニ於テモ、八吋砲艦六吋砲艦ノ優劣ニ付キ大ニ議論アリ、六吋砲艦ニ重キヲ措ク議論モ相當有力ナリ」ト云ヘルコトアリ。實ヲ云ヘバ、自分一己トシテハ、米國ガ十八隻ノ八吋砲巡洋艦ヲ造ルカ否カニ付テハ疑ヲ有スルモノナリ。然レバトテ、特ムベカラザルモノヲ特ムガ如キ意味ニテ云フニアラズ、我國トシテハ、米國ニ於テ條約上ノ權利ハ充分之ヲ行使スルモノトシテ備ヘヲ立ツベキハ勿論ナルモ、唯ダ自分ハ專門家トシテ實際ノ情況ヲ述ベタルモノナリ。

河合委員　本條約ニ依レバ、千九百三十六年以降一兩年ノ間、我國ノ大型巡洋艦ノ對米比率七割以下ニ低下スルコトトナリ、國防上甚ダ危險ニアラザルカ？然ルニ、外務大臣ハ、議會ニ於ケル答辯ニテ、斯カル事ハ介意ノ要ナシ、國際關係ニ於テ、軍備萬能ノ時代ハ過去ノ事ニ屬ス、國交圓滿ナレバ決シテ危險ナシト述ベ居ル處、政府ハ果シテ斯カル意見ヲ有スルモノナルカ？支那問題ハ現實ニ存シ、何時如何ナル事變生起スルヤモ圖リ知ルベカラズ、又米國ニ於テ、我比率ノ低下セル機會ニ乘ジ、其ノ東洋政策ヲ遂行セントスルガ如キコトナキヲ保セズ、然ラバ我國トシテハ、到底安心シ居ルコトヲ得ザルニアラズヤ？

濱口總理大臣　我國ノ大型巡洋艦ノ對米比率ガ千九百三十六年以降一兩年間低下スベキハ、河合顧問官ノ言ノ如シ。然レドモ此ノ事ハ深ク憂慮スルニ當ラズ。國防ニハ廣狹二義アリ。狹義ノ國防ハ、單ニ兵力量ニ關スルモノナルモ、廣義ノ國防ハ、軍備ノミナラズ、國交ノ親善、民力ノ充實ヲ包含シ、此ノ三者ヲ具備スルコトヲ必要トスルモノナリ。卽チ、國防ヲ狹義ニ單ニ軍備ト見ルニ於テハ、河合顧問官所說ノ如キコトアルベシ。然リトテ、軍備ノ點ヲ偏重シ、今次條約ノ不成立ヲ見ルガ如キコトアリトセバ、國交ノ親善、民力ノ休養充實ノ點ヨリ見テ、廣義ノ國防ハ却テ劣ルコトトナルベシ。故ニ軍備ノ點ニ於テ、一兩年多少ノ困難アリトスルモ、廣義ノ國防ヲ全ウスルガ爲、本條約ニ調印シタルモノナリ。然

レドモ、一兩年間軍備ニ足ラザル所アルモ、之ヲ放置シテ顧ミズト云フニアラズ、之ニ對シテハ、必要トスル相當ノ補充方法ヲ講ゼントスルモノナリ。

河合委員　總理大臣ノ答辯ニ依レバ、大型巡洋艦對米比率ノ低下ハ一二年間ナリト云ハレタルモ、今次ノ會議ニ於テ貫徹スルコトヲ得ザリシ日本ノ主張ガ、千九百三十六年ノ會議ニ於テ貫徹セラルベシトハ考フルコトヲ得ズ。日本ハ本條約所定ノ八吋砲巡洋艦保有量及其ノ對米比率ニ依リ永久ニ拘束セラルルコトトナルモノニシテ、國防上頗ル不安ナル地位ニ陷ルモノト云ハザルベカラズ。

濱口總理大臣　河合顧問官ハ重大ナル假定ヲ設ケテ質問ヲ進メラレタルガ、政府ハ決シテ然ルコトヲ爲スモノニアラズ。次回會議ニ於テ、日本ハ朝野協力、必ズ今回不利トスル所ヲ回復スルニ全幅ノ努力ヲ爲スベキモノニシテ、從テ八吋砲艦比率低下ハ一兩年ノ問題ナリ。

抑々外交ハ何ノ爲ニ存スルカ？斯カル事態ニ處スルガ爲ニ存スルニアラズヤ？若シ此ノ一兩年ノ事態ニ處シ、能ク國際關係ノ調節ヲ圖ルコトヲ得ズトナラバ、外交ハ無用ノ長物タルベシ。固ヨリ外交ノミニ依倚スルヲ云フニアラズ、其ノ他所有ル方法ヲ盡スベキハ勿論ナリト雖、斯カル事態ニ對シテハ、特ニ外交ニ力ヲ用ユルヲ必要トスベキナリ。今次ノ海軍條約ノ成立ニ依リ、外ニハ英米トノ國交親善ヲ增シ、內ニハ民力ノ休養ヲ圖ルコトヲ得ベク、從テ對米比率低下ニ依ル一二年間ノ不利ナル事態ハ、敢テ憂慮スルニ當ラザルモノト思考ス。

河合委員　本員質問ノ結論トシテ、政府ノ意見ヲ質シ度シ。日本ハ支那問題ヲ眼中ニ置キ軍備ヲ整ヘ居ルモノナリヤ？

濱口總理大臣　勿論ノ事ナリ。陸海軍經費ガ全豫算ニ對シ高率ナルコト、我國ノ如キハ世界ニ稀ナリ。斯クノ如キ巨額ヲ軍事費ニ充ツル理由ハ、主トシテ支那問題ニ重キヲ置クニ出ヅルモノナルコト多言ヲ要セズ。

山川委員　今次條約ノ協定兵力量ハ我國ニ對シテ不足スル所アリ、之ガ爲補充ヲ要ストノコトナルガ、其ノ補充計畫ノ詳細ニアラズトモ、尠クトモ大體ノ補充計畫所要金額ノ見込ヲ示サレ度シ。國民負擔ノ輕減ト補充計畫ノ遂行トノ二者ヲ、

如何ニシテ同時ニ實行セントスルモノナリヤ？世間傳フル所ニ依レバ、約四億圓ノ財源アリトノコトナルガ、之ニテ補充計畫ヲ實行スルコトヲ得ルモノナリヤ？其ノ大體ノ金額ヲ承知シ度シ。

濱口總理大臣　補充計畫ハ或程度ニ於テ之ヲ必要トスルモノナルモ、目下軍令部及海軍省ニ於テ研究協議中ニシテ、未ダ決定スルニ至ラザルガ故ニ、計畫ノ內容ヲ言明スルコトヲ得ズ。政府ノ大體方針トシテハ、本條約ノ成立ニ依リ生ズベキ剩餘財源ノ一部ヲ國民負擔ノ輕減ニ充テ、一部ヲ補充計畫ノ實行ニ用フル豫定ナルモ、其ノ所要金額ハ未定ナリ。山川顧問官ハ四億圓ナル數字ヲ擧ゲラレタルモ、現在ノ最少限度ノ海軍計畫ノ遂行ニ留保シタル財源ノ正確ナル數字ハ約五億圓ナリ。右金額ノ中、本條約所定ノ原則的新艦齡、卽チ巡洋艦二十年、驅逐艦十六年、潛水艦十三年ノ艦齡（起工年右キ水上艦船ニハ例外的ニ短期ノ艦齡ヲ規定セルガ）ニ從ヒ、千九百三十六年末迄ニ艦齡超過トナリ代換ヲ要スル輕巡洋艦及驅逐艦ノ噸數、及條約所定保有量ヲ滿タス爲ノ輕巡洋艦ノ最少限度ノ增加噸數、計三萬餘噸、其ノ建造費約一億圓ニシテ、之ヲ前述留保財源五億圓ヨリ控除スレバ約四億圓トナル。新聞紙ニ傳ヘラルル四億ナル數字ハ之ヲ指スモノナルベシ。而シテ政府ハ大體ノ方針トシテ、此ノ四億圓ノ一部ヲ補充計畫ノ費途ニ充テ、一部ヲ國民負擔輕減ノ財源ニ充テントスルモノナリ。

山川委員　條約上認メラレタル代換建造ノ權利全部ヲ行使スルニアラザレバ國防上完全ナルヲ得ズトノ海軍最高ノ意見ナル由傳聞ス。加之、右軍部ノ意見ニ依レバ、前述ノ權利ノ行使ノミニテハ足ラズ、別ニ條約ノ制限以外ノ方法、例ヘバ、制限外艦船及航空機等ニ依ル補充ヲ必要トスルモノナリト云フ。政府提出ノ參考書ニ依レバ、代換建造ノ條約上ノ權利約九萬噸全部ノ行使ノ爲ノミニテ、約三億三千萬圓ヲ要ス。然ラバ、總理大臣ノ言ハレタル四億圓ノ留保財源ヨリ右金額ヲ控除スレバ、殘額ハ僅ニ約七千萬圓ニ過ギズ。然ラバ恐ラク制限外艦船航空機等ニ依ル補充ノ經費ニモ不足シ、國民負擔輕減ノ餘地ナキノミナラズ、却テ負擔ノ增加ヲ來タスモノニアラザルカ？

濱口總理大臣　政府ノ方針ハ、國民負擔ノ輕減ヲ實現スルト同時ニ、補充計畫ヲ實行セントスルモノナリ。今次海軍會議

ノ重要ナル目的ノ一ハ國民負擔ノ輕減ナリ、故ニ政府ハ此目的ニ從ヒ方針ヲ立テ、條約上ノ代換ノ權利ノ行使、補充計畫ノ實行、國民負擔輕減ノ實施ノ三者ヲ適當ニ調和按配シテ實行センコトヲ期スルモノナリ。本來軍部ノ理想通ノ計畫ヲ實行シタリトセバ、我國ノ財政ハ夙ニ崩壞シタリシナラン。從來ト雖、嘗テ軍部ノ理想通ノ計畫ヲ實行シタルコトナキハ、參謀總長ノ職ニ居ラレタル河合顧問官ノ熟知セラルル所ナルベシ。故ニ軍部ト行政部トノ間ニ、適當ノ程度ニ折合ヒテ計畫ノ實行ヲ定ムルヲ實際ノ情況トス。政府ハ今次ノ海軍條約ニ關シテモ、條約上ノ權利、補充計畫、國民負擔ノ輕減ノ三者ヲ調和シ、政府ノ方針トスル目的ノ實現ニ努メムトスルモノナリ。

山川顧問官ノ質問ニ對スル正式ノ答辯ハ右ニテ終ハリタルモノナルカ、此ノ場合非公式ニ委員各位ノ參考迄ニ一言述ベ置キ度シ。

今回ノ「ロンドン」軍縮會議ナカリシモノトスレバ、海軍ノ現在ノ計畫遂行ニ約八億七八千萬圓ヲ必要トシタルモノナリ。然レドモ斯カル巨額ノ經費ヲ支辨スルコトハ財源ノ許サザル所ナルガ故ニ、不成立トナリタル昭和五年度豫算ノ編成ニ際シテ定メラレタル財政計畫ニ於テハ、軍部ニ於テモ折合ヒテ五億圓ニ削減スルコトヲ承諾シタルモノナリ。之ニテハ恐ラク軍部ノ計畫ニハ不足ナルベシ、然レドモ、大ナル增稅、大ナル募債ノ何レモ實行不可能ナル現狀ニ於テハ已ムヲ得ザル所ニシテ、軍部ハ此ノ狀態ニ顧ミ、計畫ヲ切詰メテ五億圓ヲ認メタルモノナリ。今日ニ限ラズ、如何ナル時ニ於テモ、軍部ノ最善トスル計畫ハ、財政上ノ見地ヨリ到底實行スルコトヲ得ルモノニアラズ、仍テ軍部ニ於テモ、政府ニ於テモ、双方ヨリ相當ノ犧牲ヲ拂ヒ、適當ニ調和按配スルコトヲ要スルモノナリ。

山川委員　補充計畫ハ、今日ニ至ル迄決定シ居ラズトノコトナルガ、何故斯ク遲レタルモノナリヤ、理解シ難シ。尠クトモ大體ノ計畫、大體ノ金額ハ、條約調印ニ際シ見當付キ居ルベキ筈ノモノト考フ。然ルニ、條約調印後數月ヲ經タル今日ニ於テ、未ダ計畫ノ決定ヲ見ズトハ怠慢ニアラズヤ？自分ハ敢テ斷定スルモノニアラザルモ、怠慢ナリトノ疑念ナキ能ハズ。

財部海軍大臣　決シテ怠慢ニアラズ。補充計畫ハ多岐ニ亙ルモノニテ、短期間ニ立案ヲ完了スルコト能ハズ、目下軍令部ニ於テ研究ノ上立案シ、海軍省ト交渉中ナリ。軍令部ノ立案ニ依ル金額ハ一應算出セラレ居ルベキモ、未ダ海軍省ニ於テ之ニ同意シタルモノニアラザルガ故ニ、茲ニ明言スルコトヲ得ズ。又海軍省ニ於テ之ニ同意スルニ至ルモ、大藏省ニ於テ同意ヲ與ヘザル限リハ、其ノ金額ハ未決定ナリ。

山川委員　補充計畫ノ決定ハ甚ダ遲レタリト考フ。軍令部、海軍省、大藏省ノ何レカニ於テ職責ヲ全フセザルモノアリトノ疑念ヲ抱カザルヲ得ズ。自分ハ之ヲ斷定スル者ニアラザルモ、斯カル感想ヲ有ス。然レドモ、政府ニ於テ補充計畫所要金額ノ大體ノ見込ヲモ提出スルコト能ハズトノコトナレバ致方ナキニ付、質問ヲ打切ルコトトスベシ。

伊東委員長　審議ハ條約ノ要點ニ入リ、頗ル大切ナル質問ニ移ルコトトナリタルガ、既ニ三時過ギナルヲ以テ、今日ノ議事ハ之ニテ終了スルコトトスベシ。次回ニハ恐ラク財源論ニ入リ、之ニ關スル質問アルベシト豫想セラルルニ依リ、政府當局ニ於テモ、其ノ積リニテ豫メ御考慮アリ度シ。

久保田委員　散會スルコトハ宜シキモ、財政問題ハ本條約ノ審査ニ最モ重要ナル點ナルガ故ニ、之ニ關シ充分ナル說明ヲ得ザレバ審議ヲ進ムルコト困難ナリト思考ス。抑モ日本ガ「ロンドン」會議ニ參加シ、海軍條約ニ調印シタル所以ノモノハ、國民負擔ノ輕減ヲ實現スル目的ニ出ヅ。故ニ此ノ目的ガ達成セラレタリヤ否ヤハ、最モ重大ナル點ニシテ、此ノ點ヲ明ニスルガ爲、條約實施ノ結果、大凡如何ナルモノガ必要ニシテ、何程ノ額ヲ要スルカニ付、政府ノ所見ヲ聞クニアラザレバ、審議ヲ進ムルコト能ハザルベシ。

伊東委員長　夫レ故今日ノ審議ハ之ニテ止メ、次回ノ委員會ニ於テ充分討議ヲ盡サントスル趣旨ナリ。

散　會

（散會後、濱口總理大臣ハ、伊東委員長ト雜談ヲ交ヘタル序ヲ以テ、委員會審議ノ進捗ニ關シ懇談スル所アリ、伊東委員ハ之ニ同意ヲ表シ、其ノ趣旨ニテ議事ヲ進メ居ル旨答ヘタリ。）

第八回「ロンドン」海軍條約審査委員會

一、場　所　樞密院事務所

二、日　時　昭和五年九月八日午後一時開會午後三時四十分散會

三、出席者

樞密院側　倉富議長、平沼副議長、伊東委員長、各委員（田委員缺席）、二上書記官長、書記官

政府側　濱口總理大臣、幣原外務大臣、財部海軍大臣

四、議事要旨

伊東委員長　本日ハ、國防上ノ缺陷ニ關スル問題ニ付審議スベシ。問題ヲ右ニ局限シ、順序ヲ立テ、質問ヲ行フコトト致度シ。

黑田委員　今次「ロンドン」會議ニ於テ、協定兵力量ヲ決定シタル標準如何？例ヘバ、各國ノ現有量ヲ標準トセルモノナリヤ、或ハ各國ノ海岸線ノ長短ヲ標準トセルモノナリヤ、協定兵力量ヲ決定スルニハ何ヲ標準トシタルモノナリヤ？

財部海軍大臣　「ワシントン」會議ニ於テハ、主力艦ノ保有量ヲ決定スルニ、各國ノ現有勢力ヲ標準トシタリ。「ジュネーヴ」會議ニ於テモ、日本ハ大體同樣ノ意見ニテ之ニ臨ミタリ。然ルニ、今次ノ「ロンドン」會議ニ在テハ、之ト趣ヲ異ニシ先ヅ英米間ニ均勢ノ原則ヲ完メ、之ヲ出發點トシタリ。卽チ、英米兩國間ニハ、大型八吋砲巡洋艦ニ付テハ、米國ハ英國ヨリモ多量ニ保有スルコトヲ認メ、其ノ差ハ、所謂海軍尺度「ヤードスチック」ノ適用ニ依リ、輕巡洋艦ニ於テ英國ハ米國ヨリモ多量ヲ保有シテ、兩國間ニ、巡洋艦全體トシテノ均勢ヲ保ツコトトシ、又潛水艦ニ付テハ、各國共ニ之ヲ全廢スルコトヲ提議スルノ方針ヲ定メ、現有勢力ヲ協定保有量ノ標準トスルノ考ヲ棄テテ會議ニ臨ミタルモノナリ。尤モ今次會議ニ於テモ、全然現有勢力ヲ無視シタルモノニハアラズ、大型巡洋艦ニ付英國ノ保有量ヲ十五隻トシタルハ、

現有量ヲ基礎トシタルモノナリ、又米國ノ大型巡洋艦保有量ヲ二十三隻トナサントシタルハ、其ノ全部ガ起工セラレタルモノニハアラザルモ、議會ノ承認ヲ經タル建造計畫ヲ基礎トセルモノニテ、廣キ意味ニ於テハ現有勢力ヲ考量中ニ加ヘタルモノト謂ヒ得ベシ。此ノ事實ヲ前ニシテ、日本ニ於テ現有勢力主義ヲ主張スルモ、徒ラニ會議ノ進捗ヲ妨グルニ止マリ、毫モ益スル所ナシ、唯ダ日本トシテモ、自國ノ現有勢力ヲ常ニ腦裡ニ置キ、之ヲ標準トシテ英米ノ保有量ヲ引下グルコト、卽チ保有量ノ天井ヲ低メルコトニ努力セルモノナリ。

黑田委員　條約上ノ協定保有量ト現有量トノ間ノ比率ヲ各國ニ付考査スルニ（準備シタル表ニ依リ數字ヲ擧ゲ）、日本ノ如キハ、他國ニ比シ大型巡洋艦ヲ多量ニ保有スルコトヲ得ル譯トナル。（種々ノ數字ト比率トヲ擧ゲ）斯クノ如ク、協定保有量ト現有量トノ比率ハ、各國ニ付出入アルモノニシテ、現有勢力ノミヲ標準トスルトキハ、明白ニ日本ニ有利ナル保有量ノ決定ヲ見ルコトヲ得タル筈ナリ。然ルニ、政府ニ於テ此ノ有利ナル標準ヲ捨テ、我ニ不利ナル協定保有量ヲ認諾スルニ至リタルハ、最初ノ第一歩ヲ誤リタルモノト云ハザルベカラズ。

財部海軍大臣　御質問ハ今次海軍會議ニ對スル根本方針ニ觸レタルモノナリ。我々ハ、會議ニ於テ政府ノ訓令ニ依リ行動シタルモノナルガ、政府ノ訓令ハ、黑田顧問官ノ御意見トハ異ナル方針ヲ採リタルモノニシテ、卽チ、主トシテ現有量ヲ基準トシタルモノニアラズ、大型巡洋艦ニ付テハ、對米七割、潛水艦ニ付テハ、比率ニ拘ラズ現有量ノ保持、補助艦全體ニ付、對米總括七割、此ノ要求ヲ貫徹センコトヲ方針トシタルモノナリ。若シ此ノ方針自體ガ誤ナリトセラルルニ於テハ別問題ナルガ、右ノ方針ハ、長年ノ研究ノ結果、最善ノモノトシテ決定シタルモノニシテ此ノ方針ニテ進ミタル成果ヲ檢スルニ、米國トノ比較ニ付テ見レバ、補助艦總體ニ於テ、米國ノ現有勢力五十七萬三千噸ヲ協定保有量五十二萬六千噸ニ引下ゲ、之ニ伴ヒ、日本ニ於テモ現有勢力四十一萬七千噸ヲ協定保有量三十六萬七千噸ニ引下ゲタルモノナリ、畢竟ハ訓令ノ趣旨ニ從ヒ、先方ノ保有量ノ天井ヲ引下ゲ、我方ノ保有量モ之ニ伴ヒ引下ゲタルモノニ外ナラズ。

黑田委員　若槻全權ハ「ワシントン」ニテ聲明書ヲ出シ、今次ノ會議ニ於テハ、不戰條約ヲ出發點トシテ協定ヲ達成セン

コトヲ希望ストノ趣旨ヲ言明サレ居ル處、今次ノ條約ヲ見ルニ、航空機發著ノ裝備ヲ巡洋艦ニ設クルコトヲ得ルコトトナリ居リ、米國ニ於テ最モ發達セル航空機ヲ最モ多ク利用スル途ヲ開キ居レリ。不戰條約ヲ出發點トシタルモノト云フモ、斯クノ如ク航空兵力ヲ使用スルノ途ヲ新タニ廣ク開クコトハ、明カニ不戰條約ノ精神ニ反スルモノニアラズヤ？抑モ今次ノ會議ニ於テ、航空兵力ノ裝備ヲ擴張スルコトトナリタルハ、何人ノ發言ニ出ヅルモノナリヤ？

財部海軍大臣　航空母艦ヲ增加スルコトハ、我國ノ不利トスル所ナリ。然ルニ「ワシントン」條約ニ於テハ、一萬噸以下ノ航空母艦ハ無制限ニ保有スルコトヲ得ルコトトナリ居ルヲ以テ、之ニ適當ノ制限ヲ加ヘムコトヲ日本ヨリ提議シタリ。日本ニハ現ニ一萬噸以下ノ航空母艦鳳翔アリ、故ニ之ヲ航空母艦トシテ其ノ協定保有量中ニ算入スルコトハ不利ナルガ如ク見ユルモ、將來ノ事態ヲ考フルニ、列國ガ無制限ニ此ノ種ノ小型航空母艦ヲ建造スルコトトナラバ、甚ダ我國ニ對シ不利ナルヲ以テ一萬噸以下ノ航空母艦モ一萬噸以上ノ航空母艦ト一律ニ、「ワシントン」條約ノ航空母艦協定保有量中ニ算入シ、之ヲ制限スルコトトシタリ。

米國ハ當初ヨリ、巡洋艦ニ航空機發著裝備ヲ設クルコトニ付テハ、之ヲ無制限トナサントスル意見ヲ主張シタリ。其ノ理由トスル所ハ、今日ニ於テ巡洋艦ノ如キ艦型ノ軍艦ニ飛行機ノ發著裝備ヲ許サザルハ時代遲レナリ。現ニ巡洋艦ニハ飛行機ノ發進裝備アリ、然ルニ之ニ其ノ著艦裝備ナキトキハ、少シク陸地ヲ離レテ外洋ニ出ヅレバ、飛行機ハ歸艦スルコトヲ得ザルベク、爲ニ無理ニ陸地マデ飛行セントシ、人命ヲ損傷スルコトトナル實例多シ。斯クノ如ク人道上ノ問題ニモアリ、既ニ巡洋艦ニ飛行機發進裝備ガ存スル以上ハ、其ノ著艦裝備ヲ設クルコトヲモ許サザルベカラズト云フニ在リ。初メ米國ハ此ノ主張ヲ强硬ニ支持シタルモノナルガ、日本ハ之ニ對シ反對ヲ表シ、我專門委員ノ如キハ米國側專門委員ニ對シ露骨ナル論議ヲ交ヘ、米國ガ航空兵力ヲ以テ我國ノ沿岸ニ接近スルコトニ對シテハ重大ナル不安ヲ感ゼザルヲ得ズ、從テ我國ニ不安ノ念ヲ與フル飛行機發著裝備ヲ巡洋艦ニ無制限ニ認ムルコトニ對シテハ到底同意スル能ハズ、斯クノ如キハ不戰條約ノ精神ニモ反ストノ趣旨ヲ主張シタリ。實ハ米國ノ主張モ一理ナキニアラズ、仍テ結局日米兩

國ノ主張ヲ折衷シ、現存主力艦ニハ航空機著艦裝備ヲ設ケズ、巡洋艦ニ付テハ全體ノ保有噸數ノ二十五「パーセント」ニ限リ航空機著艦裝備ヲ設クルコトヲ得ルコトニ妥協決定シタルモノナリ。米國ノミナラズ日英兩國ニ於テモ、右ノ制限内ニ於テ巡洋艦ニ航空機著艦裝備ヲ設クルコトヲ得ベキハ云フ迄モナシ。

黒田委員　本條約ニ依ル國防上ノ缺陥ニ對スル對策ニ關シ質問シ度シ。

議會ニ於テ、總理大臣ハ國防上ノ缺陥ナシト言明セラレタリ。然ルニ、本條約ノ結果トシテ補充計畫ヲ必要トスルニ至レリ。本條約ノ協定兵力量ヲ以テ、果シテ國防上何等不安ヲ來スコトナキヤ？若シ國防上ノ不安ヲ來スモノトセバ、之ニ對シテ如何ナル對策ヲ有スルヤ？

濱口總理大臣　總括的ニ見レバ、國防ノ缺陥ハ生ゼシメザル所存ナリ。單ニ條約上ノ兵力量ノミヲ摘出シテ見レバ、既定國防方針ニ基ク作戰計畫ノ遂行上ニハ、兵力量ニ於テ不足若クハ困難ヲ生ズベシ。然レドモ、條約上ノ兵力量ノミニテ國防ノ安危ガ決セラルルモノニアラズ、條約上ノ兵力量以外ニ於テモ、相當ノ對策ヲ講ズレバ國防ノ安全ハ期セラルベキモノト信ズ。然ラバ、條約上ノ協定兵力量ヲ補フ方法如何ト云フコトガ次ニ問題トナル。其ノ方法ノ一ハ、條約ニ規定セル兵力量ヲ相當ニ整備スルコトナリ、(嚴格ニ云ヘバ、條約ニ規定スル所ヲ實行スルモノニシテ、補充方法ト云フハ當ラザルモノナルモ、兵力量充實ノ一方法タルヲ失ハズ)。次ニ實質上ニ於テ最モ必要ナル補充方法ハ内容ノ充實、術力ノ向上ナリ。内容ノ充實トハ、軍艦ノ改裝、艦船上ノ諸設備ノ改良、航空兵力ノ充實等ナリ。術力ノ向上ハ、要スルニ人的要素ニシテ、例ヘバ、教育訓練或ハ二重定員ト云フガ如キモノナリ。内容ノ充實ト術力ノ向上トヲ圖レバ、國防ノ缺陥ハ生ゼシメザルコトヲ得ルモノト信ズ。之ガ實行ニ幾何ノ金額ヲ要スルヤ、其ノ經費ノ數字ハ目下海軍大臣ト軍令部長トノ間ニ協議中ナリト聞キ居リ、自分ハ未ダ詳シク承知セズ。何レニスルモ、豫算決定ニ際シテハ、具體的ニ數字ヲ決定スルコトヲ要スル次第ナリ。

河合委員　前回ノ委員會ニ於テ、海軍大臣ハ、潛水艦ハ左迄必要ナラズト云ハレタルガ、自分等ニ於テハ、潛水艦ハ劣勢

國ノ最モ必要ナル武器ニテ、佛國ガ潛水艦ニ重キヲ措クハ之ガ爲ナリト聞キ居レリ。果シテ財部海軍大臣ノ如ク、潛水艦ハ不必要ナリト云ハレテ差支ナキヤ？軍部ノ内部ニ於テ其ノ言ニ滿足スルヤ？

潛水艦ノ保有量ニ於テ二萬五千噸ノ不足ハ航空兵力ヲ以テ補充スト云ハレタルガ、果シテ航空兵力ヲ以テ補充スルコトヲ得ルモノナリヤ？航空機潛水艦ハ各其ノ獨特ノ長所ヲ有スルモノナルガ故ニ、一ヲ以テ他ニ代フルコトヲ得ザルモノニアラズヤ？

財部海軍大臣　前回ノ委員會ニテ説明シタル所ハ、海軍ノ專門的意見トシテ潛水艦ハ不必要ナリト云ヘルニアラズ、專門家トシテ尊重スベキ權威者ニ、潛水艦ノ價値ヲ疑問トスル者アルコトヲ云ヘルナリ、決シテ無責任ノ言ニアラズ、又海軍トシテ決定シタル意見ヲ述ベタルモノニアラザルニ付、此ノ點ハ能ク了解アリ度シ。

兵力ノ種類ニ依リ各特長ヲ有スルハ事實ナリ、然レドモ、敵ヲ擊滅スルコトヲ目的トスルモノナルコトハ何レモ一ニシテ、何レノ兵力モ此ノ目的ノ爲ニ必要ナルモノナリ。今具體的ニ航空兵力ト潛水艦トヲ對比スルニ、全然同一ノ目的ニ使用セラルルコトアリ、其ノ顯著ナルハ偵察ノ目的ナリ。斯クノ如ク其ノ目的ガ同一ナリトセバ、一方ヲ以テ他方ヲ補充スルコトヲ得ル理ナリ。更ニ具體的ニ云ヘバ、潛水艦ガ敵ヲ擊滅スル方法ハ魚雷アルノミ、而シテ魚雷ノ使用上、潛水艦及航空機ニハ各長所モアリ又短所モアリ、例ヘバ、如何ナル潛水艦ニテモ、潛航スルトキハ十節以上ノ速力ヲ出ス能ハズ、然ルニ艦隊ハ二十節以上ノ速力ヲ以テ航進スルモノナル故、之ニ對シ十節ノ速力ノ潛水艦ヲ以テ魚雷ニ依リ攻擊ヲ行フモ有效ニアラズ。之ニ反シ、飛行機ハ非常ノ高度ノ速力ヲ有シ、魚雷ヲ用フルノミナラズ爆彈投下ヲ行フコトヲ得ベク、或點ヨリ云ヘバ、敵ヲ擊滅スル目的ニ於テ、潛水艦ハ飛行機ニ及バザルコトモアリ、又大體ヨリ見ル所ニ依ルニ、潛水艦ハ今後何程ノ能率ノ進歩ヲ示スベキヤ疑問ニシテ、之ニ比シ航空機ノ將來ハ遙ニ多望ナリ。自分ハ敢テ潛水艦ヲ無效ナリト云ハント欲スル者ニアラザルモ、敵ヲ擊滅スルノ目的ハ一ニシテ、尠クトモ互ニ他ヲ援ケ他ヲ補フヲ得ルモノナルコトハ疑問ノ餘地ナシト思考ス。

河合委員　然ラバ、海軍大臣ハ軍令部ノ作戰計畫ノ當ヲ得ザルコトヲ疑フ者ナルガ如ク見ユル處、ソレニテ宜シキヤ？

自分ハ潛水艦ニ重キヲ措クモノニシテ、潛水艦ニシテ我主張通ノ保有量ヲ獲得スルコトヲ得タランニハ、米國ハ我國ニ對シ攻擊作戰ニ出ヅルコト不可能ナリト觀測シ居ルモノナリ。

我國ハ今次ノ會議ニ於テ潛水艦ノ均勢ヲ承諾シタルガ、次回ノ會議ニ於テ、英米ハ其ノ保有量ヲ二萬噸若クハ一萬噸ニ低下センコトヲ提言スルヤモ知ルベカラズ。然ラバ斯カル場合ニ於テモ、一旦均勢ヲ承諾シタル日本ハ、其ノ低下セル噸數ノ均勢ニ同意セザルヲ得ザルニ至ルコトナキヤ？

「ブラット」大將ハ、米國上院ニ於テ、潛水艦ニ關シ日本ノ主張ヲ著シク緩和スルコトヲ得タルハ、米國ノ利益ナリト云ヒ居レリ。

財部海軍大臣　「ブラット」ハ貴說ノ通ノ言アリタルナラン、然レドモ、先ヅ彼ガ如何ナル立場ニ在リタルカヲ了解スルコトヲ要ス。初メ「ジョーンズ」ガ海軍上級專門顧問トシテ「ロンドン」ニ赴キタルモ、病氣ノ爲（種々ノ噂アリタルガ、表面上ハ胃潰腸ノ爲）會議半バニ歸米シ、「ブラット」一人海軍ノ專門委員トシテ責任ヲ執ル地位ニ殘リタルモノニテ、其ノ成立ニ參加シタル條約ガ、米國ニ不利ニシテ日本ニノミ有利ナリト云フコトヲ得ザル立場ニ在ル者ナリ。故ニ批准ヲ得ムガ爲、彼ガ上院ニ於テ條約ノ有利ナル點ヲ吹聽スルハ當然ノコトナリ。米國ノ上院ニ於テ、條約ノ討議ニ際シ彼ガ如何ナルコトヲ云ヘルカニ重キヲ措クハ正當ナル觀察ニアラズ。

今日ニ於テハ、確カニ現行ノ用兵綱領ニ基ク作戰計畫ヲ最善ノモノトスル基礎ニテ進ミ居レリ。然レドモ、率直ニ云ヘバ、作戰計畫ハ永久ニ變更ヲ必要トセザルカト云フニ、決シテ然ラズ、進步ノ見地ヨリスルモ不動ノモノニアラズ、今後ニ於テモ、現行作戰計畫ニ變更ノ必要ナキヤ、如何ナル程度ニ變更スルコトヲ必要トスルヤニ付、常ニ研究スルコトヲ要スルモノナリト確信ス。之ヲ以テ最善ニシテ神聖手ヲ觸ルベカラザルモノトスルガ如キコトアラバ、世ノ進步ニ後クルルニ至ルベシ。

潛水艦ノ保有量ニシテ日本ノ要求通ニ決定シタリトセバ、米國ハ日本ニ對シ攻勢作戰ニ出ヅルコト能ハズトノ御意見ナルガ、海軍當局トシテハ、斯カル安心ヲナス能ハズ。若シ安心シタリトセバ大變ナリ。自分トシテハ、常ニ不安ノ念ヲ以テ警戒シ居レリ。

次回會議ニ於テ、潛水艦保有量ハ再ビ低下セラルルニアラズヤトノ御懸念ナリシガ、淡白ニ云ヘバ、自分トシテモ、七萬八千噸ノ我要求ガ貫徹スルコトヲ得ルヤ否ヤヲ斷言スル能ハズ。然レドモ、次回會議ニ於テハ、最善ノ努力ヲ試ムベキモノニシテ、我主張ハ貫徹セザルモノトシテ今日ヨリ失望スベキニアラズ。唯ダ果シテ我主張ヲ貫徹スルコトヲ得ベキヤハ、今日ヨリ之ヲ豫想スルコトヲ得ザル所ナリ。

河合委員　甲級巡洋艦ガ對米六割ニテハ、全ク勝算ナキモノト自分等ハ了解ス。條約有效期間內ニハ全然六割ノ比率ニ低落スルコトナキモ、而シテ假リニ條約有效期間內ニ於テハ對米七割ノ比率ヲ保持スルモノトスルモ、日本ノ保有スルモノハ古艦ナルニ反シ、米國ハ進步セル改良ヲ加ヘタル新艦ヲ建造スルモノナルガ故ニ、實力ニ於テハ六割以下ニ當ルモノト見ザルベカラズ。

日本ノ主張ハ、次回會議ニ於テモ、到底貫徹スルコト不可能ナリ。然ラバ、次回會議ニ於テハ、或ハ日本ガ會議ヨリ脫退スルコトトナルヤモ知レズ。其ノ場合ニハ造艦競爭ガ起ルナルベシ。今次ノ會議ニ於テ、條約不成立ノ場合ニモ造艦競爭ハ起ルナルベシ。然ラバ何レニスルモ同一事ナリト考フル者モアルベシト雖、實ハ其ノ間ニ重大ナル差異アリ。今日直ニ造艦競爭起ルモ、日本ハ現有勢力ニ於テ優ルガ故ニ甚シキ苦痛ナシ。然ルニ六年後ニ於テハ形勢ハ逆轉シ、日本ハ非常ナル不利ノ地位ニ立ツコトトナルベシ。

財部海軍大臣　兵力ハ然カク彈力ナキモノニアラズ、八吋砲艦ト雖、金城鐵壁些少ノ危險ナキモノニシテ攻擊力莫大ナルモノ、卽チ弱點ナク長所ノミヲ有スルモノト考フルハ誤ナリ。主力艦ナレバ一發ノ砲彈一發ノ魚雷ニ依リテ沈沒シ若クハ戰鬪力低下スルガ如キコトナシト雖、巡洋艦ハ斯カル安全ノモノニアラズ。往年美保ケ關ノ演習ニ於テ巡洋艦驅逐艦

ノ衝突アリタル際、其ノ實況ヲ見テ自分ハ戰慄セリ。驅逐艦ハ二分セラレテ直ニ沈沒シ、巡洋艦ハ艦首ノ部分剃刀ニテ切リタル如ク見事ニ切斷セラレ居リタリ。其ノ巡洋艦ハ八吋砲艦ニアラザリシモ、大體ノ見當ハ付クモノナリ。八吋砲艦ト雖、驅逐艦ガ高速力ニテ衝突スレバ非常ニ危險ナリ。有力ナル一權威者ハ、眞面目ニ意見ヲ主張シテ、若シ米國ノ八吋砲巡洋艦一隻ノ來襲ニ對シ、千七百噸型ノ驅逐艦四隻ノ指揮ヲ自分ニ任カサレナバ、確ニ來襲ノ米艦ヲ擊沈スベシト云ヘリ。決シテ空論ニアラズ、專門的權威者ノ意見ナリ。八吋砲艦ハ神ノ如ク、六吋砲艦ハ全ク無力ナリト考フルハ誤解ニシテ、自分ハ斯カル意見ヲ支持セズ。甲級巡洋艦ニ多少ノ不足、卽チ約一萬六千噸ノ不足ヲ生ズトスルモ、輕巡洋艦驅逐艦ニ付テハ我主張ハ貫徹シ、若クハ我主張ヨリ增加シタルモノナルガ故ニ、之ニテ補ヒノ付カヌ理ナシ。造艦競爭起ルトセバ、六年後ヨリモ今日ノ方我國ニ有利ナリトノ御意見ナリシガ、自分ハ正反對ノ意見ヲ有ス。若シ今日造艦競爭起ルトセバ、我海軍ハ最モ苦境ニ陷ルベシ。今次條約ノ成立ナキモノトシテ、現有勢力ノ維持ニハ、海軍ノ計算ニヨレバ八億七千萬圓ヲ要ス。今日斯カル巨額ノ造艦費ヲ調達シ得ル政治家アリヤ？今日ニ於テハ造艦競爭起ルモ可ナリ六年後ニ起ルヨリモ有利ナリト云フガ如キコトハ考フルコト能ハズ。

河合委員　日英兩國ヨリ主力艦ノ單艦噸數及備砲口徑ノ縮小ヲ提議シ、米國ノ反對ニテ不成立ニ終リタル由ナルガ、其ノ交渉ノ經緯ヲ承知シ度シ。

財部海軍大臣　日英兩國共ニ主力艦ノ單艦噸數低減、備砲口徑縮小ヲ提議シタルハ事實ナリ。然レドモ英國ハ、備砲口徑ヲ十二吋ニ縮小シ、單艦噸數ヲ二萬五千噸ニ低下センコトヲ主張シ、之ニ對シ日本ハ、單艦噸數ニ付テハ異議ナキモ、備砲口徑ハ十四吋以下ニ縮小スルコトハ承諾シ難シトノ趣旨ニテ反對シ、英國ハ單艦噸數ヲ二萬五千噸ニ低下スル以上、備砲口徑ハ十二吋ニ縮小スルヲ適當トス、若シ備砲口徑ヲ十四吋ニ定メムトセバ、單艦噸數ハ三萬噸以上タルコトヲ必要トスベシト反駁シ、結局日英兩國ニ於テモ議纏ラズ、米國ハ其ノ何レニモ贊成セズ、三國ノ意見不一致ノ爲成立セズ、以上ガ主力艦單艦噸數及備砲口徑縮小問題ノ交渉ノ經過ナリ。

河合委員　眞ニ國防上缺陷アリトセバ、之ニ補充ノ途アル筈ナシ、然ルニ如何ニシテ缺陷ヲ補充セントスルカ？

財部海軍大臣　自分ハ國防上ノ缺陷ナル語ヲ用ヒタルコトナシ、既定國防方針ニ基キ案畫セラレタル作戰計畫ノ遂行上兵力量ニ不足ヲ生ズト云ヘルナリ。此ノ不足ハ補充スルコトヲ得ルモノニシテ、自分ハ之ヲ補充スル考ヲ有ス。之ハ財部一己ノ意見ニアラズ、海軍最高權威者ノ意見モ亦同樣ニ補充スルコトヲ得ルモノトノ結論ニ達セリ。又之ハ獨リ現當局者ノ案ナルノミナラズ、前軍令部長ノ案畫セル所ニ依ルモノナリ。

山川委員　本委員會ニテ統帥權問題審議ノ際、總理大臣ハ軍令部長ノ同意アリ、意見一致アリタルモノト云ハレタリ。然ルニ、總理大臣ハ、議會ノ答辯ニ於テハ軍部ノ意見ヲ尊重斟酌シタリト云ヘリ。斟酌ナル語義ヲ辭書ニ付テ見ルニ、言泉ニ依レバ、照シ合セテ取捨スルコトアリ、日本國語字典ニ依レバ、彼此斟酌シテ取捨スルコトアリ、何レニスルモ意見ヲ取捨スルコトニシテ、意見ヲ斟酌スルコトト意見一致ト云フコトトノ間ニハ矛盾アリ。單ニ言葉ノ問題ニアラズ、總理大臣ノ言辭ノ意味曖昧ナルニ於テハ審議ニ關係スルコトトモナルベク、誤聞化シニアラズシテ斯々ノ意味ナリト辯明セラルルコトヲ得バ、其ノ辯明ヲ得度シ。

濱口總理大臣　（委員長ニ向ツテ）此ノ席上ニテ、今ノ御質問ニ御答ヘ致シテ可ナリヤ？本日ノ審査ハ兵力量ノ問題ニ限定セラレ、統帥權ニ關スル議論ハ一旦打切リ當分留保スルコトニ曩ニ委員長ヨリ宣告セラレタルガ、前回ニ說明シタル所ヲ再ビ此席ニ於テ繰返シ差支ナシトノコトナレバ答辯致スベシ。

伊東委員長　總理大臣ノ言ノ如ク統帥權問題ハ他日ニ留保シタルモノナルニ由リ、同問題ニ關スル疑義ハ他日ノ機會ニ讓ラレ、此ノ際質問ヲ固執セラレザランコトヲ望ム。

山川委員　國防ノ缺陷ヲ補充スルトハ何ノ意味ナリヤ？

財部海軍大臣　既ニ知ラルル通、條約上ノ協定兵力量ハ、補助艦ノ或艦種ニ付テハ日本ノ當初主張セル所ヨリ不足スルモノアリ、又或艦種ニ付テハ原主張ニ比シ餘剩アルモノモアリ、其ノ餘剩ノ部分竝ニ條約上制限ヲ受ケザル兵力ヲ以テ不

足ノ部分ヲ充タスコトヲ得ル理ナリ。斯カルコトヲ世間ニテ補充ト云ヒ居ルモノナリ、即チ不足ノ部分ヲ補充スルコトナリ。

山川委員　海軍大臣ノ答辯ハ能ク了解スルコトヲ得ズ。條約上ノ兵力量ニテハ國防上缺陷アリト云フニ、如何ニシテ條約上ノ兵力量ノ一部分ニテ他ノ部分ヲ補フコトヲ得ルヤ？

財部海軍大臣　或艦種ノ保有量ニ付テハ、現在ノ作戰計畫ヲ維持遂行スルニ不足ノ生ズルコトヲ說明シタルモノニシテ、國防上ノ缺陷ト云ヘルコトナシ。將來ト雖國防上ノ缺陷ハ生ゼシメザル覺悟ヲ有ス。自分ノ說明シタル所ハ、國防上ノ缺陷問題ニアラズ。

山川委員　海軍大臣ハ補充方法ヲ說明シ、次善ノ方法ト云ハレタリ。次善ト云フ以上ハ、最善ノ方法ニアラズ。然ラバ缺陷アルニアラズヤ？

財部海軍大臣　次善ノ方法ト云フモ、之ヲ以テ略ボ國防上ニ支障ナカラシムルコトヲ得ル確信アリ。自分ノミナラズ、軍令部長ニ於テモ、次善ノ方法ト云フモ、之ヲ以テ國防上ノ責任ヲ執ル考ナリ。

金子委員　意外千萬ノ御說明ナリ。總理大臣ノ言ト海軍大臣ノ言トノ間ニハ矛盾アリ。抑モ國防トハ何ゾ、即チ national defence ニシテ、兵力ニ依ル以外ニ他ノ方法存セズ。然ルニ總理大臣ハ財政經濟外交等種々ノ觀念ニ付述ベラレタルガ、national defence ニハ斯カル觀念ヲ含ムモノニアラズト思考ス。海軍大臣ノ云ハルル國防ハ、財政經濟ニ關スルモノニアラザルベシ、然ラバ、總理大臣ノ云フ國防ト、海軍大臣ノ云フ國防トハ異ナルモノニシテ、其ノ間ニ矛盾存スルニアラズヤ？

濱口總理大臣　前回ノ委員會ニ於テモ述ベタルガ如ク、國防ニハ廣狹二義アリ。廣義ノ國防ニ關シテハ、兵力ノミニ限ラズ、其ノ他諸般ノ要素ヲ總括シテ考慮ニ入レ、初メテ國防ノ安全ガ期セラルルモノナリ。然レドモ、狹義ニ國防ト云フトキハ、兵力ニ關スルモノニシテ、海軍大臣ノ言ハ、兵力ニ關スル狹義ノ國防ニ付責任ヲ執ルトノ意ナルベシ。斯クノ

如ク國防ニハ廣狹ノ二義アリ、其ノ間ニ矛盾アルモノニアラズ。

山川委員　當初ノ日本ノ提案ハ、之ヲ最善ト認メラレタルモノナラン。今回ハ次善ノ方法ニ依ルトノコトナルガ、其ノ間ニ幾許ノ懸隔存スルヤ？次善ト云フ以上ハ最善ニアラザルベク、何等カ缺ケタル所存スル筈ナリ。然ルニ、海軍大臣ハ補充計畫ヲ立テレバ完全ニ國防安全ト云ハレタリ。果シテ然ラバ、書記官長ニ於テ、其ノ所言ヲ記錄ニ留メ置カレ度シ。

財部海軍大臣　完全ニ國防安全ナリト云ヘルニアラズ、略ボ支障ナカラシムル確信ヲ有スト云ヘルモノナリ。

山川委員　「略ボ」ナル語義ハ、辭典ヲ所持セザル故、自分ニハ分明セザル處、元來軍令部ノ案ノ通ニテ、當初ノ計畫ニテ行クトキハ、日米開戰ノ場合ニ、之ニテ五分五分ノ戰ガ出來ルト云フ考ナラン。然ラバ次善ノ策ニ依ルトキハ、國防ニ支障ナカラシムル程度ニ、「略ボ」ナル制限的字句ヲ附セラレ、即チ確實ニ五分五分ニ達セズ、成算少ナシトノ意味ナルカ？

財部海軍大臣　作戰計畫ナルモノハ、其ノ樣ニ彈力性ナキモノニアラズ、作戰計畫ヲ變更セネバナラヌ場合ニ於テモ、相當ニ計畫ヲ整備スルコトニ依リ、確カニ五分五分ノ戰ヲナスコトヲ得ルモノト確信ス。現在ノ作戰計畫ノ基礎ニ於テハ兵力量ニ不足ヲ生ズルガ故ニ、絕對ニ完全ト云ハズシテ、略ボト云ヘルモノナリ。然レドモ、胸中ニハ、計畫ニ付充分ノ確信ヲ有スルモノナリ。

先刻伊東委員長トノ雜談ニ際シ、不圖思ヒ當ル不思議ナル一事アリ。妥協案ニ關スル回訓發送セラレタル後、濱口總理大臣ニ於テ末次軍令部次長ヲ呼ビ出シタル際、末次中將ヨリ、今回ノ協定成立セバ作戰計畫ノ變更ヲ必要トスルニ至ルベキモ、變更ハ急ニハ出來ズ、又急ニスルニモ及バズトノ趣旨ヲ申述ベタル由ナルガ、之ハ自分モ全ク知ラザリシ事實ナリ。然ルニ此ノ總理大臣ト末次軍令部次長トノ話ガ新聞ニ出デタルハ何事ゾ、誰カガ口外セザレバ新聞ニ出ヅル理ナシ。總理大臣ガ之ヲ新聞紙ニ漏サレタリトハ信ズルコト能ハザルガ故ニ、樞密院方面ヨリ洩レタルモノニ非ザルカ？今

日此ノ事ニ付議論スル考ハナキモ、末次前軍令部次長ノ言ハ意味アルコトナリト考ヘ居レリ。海軍ノ智識アル者ハ、必ズ其所ニ思ヲ及ボスベキモノナリ。淡白ニ所懷ヲ御話シスレバ、自分モ其ノ事ヲ考ヘ居レリ。作戰計畫ナルモノハ一定不動ノモノニアラザルヲ以テ、今日ノ作戰計畫ハ早晩變更スルコトヲ必要トスベク、今日ノ計畫ニテハ兵力量ニ不足ヲ生ズルトスルモ、新計畫ニ依リ確カニ五分五分ノ戰ヲナス方策ヲ立テ得ル充分ナル見當アリ。自分ハ之ヲ確信スルモノナリ。

濱口總理大臣　此ノ機會ニ一言シ度シ。委員各位ノ質問ヲ聽クニ、條約ノ爲國防ノ缺陷ヲ生ジ、此ノ缺陷ヲ何モノカニ依テ補充スルモノトノ考ガ先入主トナリ居ルガ如キモ、之ハ誤解ニシテ、既定ノ國防方針ニ基キ案畫セラレタル作戰計畫ノ遂行上ニハ兵力量ニ不足生ズトノ意味ナリ。決シテ國防ニ缺陷ヲ生ズトノ意味ニアラザルニ付、此ノ點ハ能ク御了解アリ度シ。

海軍大臣ノ言ノ如ク、追テ作戰計畫ヲ變更スルコトトモナラバ、是迄兵力量ニ不足アリト思ハレタル部分モ、不足無キコトトナルベシト思考ス。自分ハ國防ニ缺陷ヲ生ゼシムルガ如キコトハ斷ジテ致サヌ所存ナリ。

散會

（委員會開會ニ先ダチ、伊東委員長ト濱口、幣原、財部三大臣ト雜談ヲ交ハシタル際、伊東委員長ヨリ、角立タヌ爲特ニ委員會ニ於テ正式ニ論議スルヲ避ケ、非公式ニ懇談スルモノナリトテ、政府側ニ於テ、樞密院ガ故意ニ審議ヲ遲延セシメ居レリトノ推定ノ下ニ、樞密院ヲ批難セル趣旨ノ記事諸新聞ニ掲載セラレ居リ。右ハ鈴木内閣書記官長ガ謄寫版ニテ内閣出入記者ニ配布シタルモノナリト聞及ビ居ル處、斯カル記事ハ樞密院側ノ感情ヲ徒ラニ刺戟シ、審議ノ進行ヲ妨グル虞アルニ付、充分取締ラレ度旨申出アリ。濱口總理大臣ヨリ、右ノ記事ハ全ク自分ノ關知セザル所ナルガ、充分ニ注意スベシト答ヘタリ。）

（右雜談中、伊東委員長ヨリ、近頃新聞紙ニ現ハルル記事ハ小說ノ如ク巧ミニ作ラレ居ルモ、多クハ揣摩臆測ニ出デタルモノニテ、議事ノ祕密漏洩セルモノトハ思ハレズトノ趣旨ノ話アリ、之ニ對シ、濱口總理大臣ハ、委員會ニ於テ自分ト末次前軍令部次長トノ會話ヲ申述ベタルガ、右會話ノ内容新聞紙ニ洩レ居ルハ甚ダ不思議ナリ、右會話ノ内容ハ、初メテ委員會ニテ發表シタルモノニテ、自分ト末次中將以外ニハ誰モ知ル筈ナキモノナリ。祕密ノ保持ニ付テハ、樞密院側ニ於テモ充分留意セラレ度シトノ趣旨ヲ述ベタリ。）

第九回「ロンドン」海軍條約審査委員會

一、場　所　樞密院事務所

二、日　時　昭和五年九月十日午後一時開會午後四時散會

三、出席者

樞密院側　倉富議長、平沼副議長、伊東委員長、各委員（田委員缺席）、二上書記官長、書記官

政府側　濱口總理大臣、幣原外務大臣、財部海軍大臣

四、議事要旨

金子委員　今次條約上ノ協定兵力量ハ、現有量ヨリモ大體ニ於テ減少シ居ルガ如シ、右減少ニ依リ行ヒ得ベキ國民負擔輕減ノ程度、即チ其ノ金額ハ幾許ナルヤ？

財部海軍大臣　大體ノ概算ダケナレバ説明スルコトヲ得ベシ。補助艦ノミニ付テ云ヘバ、今次ノ條約上ノ協定保有量ヲ維持センガ爲代換建造ヲ行フトスレバ、年額七千萬圓ヲ要ス。若シ今次ノ條約ナカリシモノトスレバ、昭和六年度末ニ到達スベキ勢力ヲ維持スル爲ノ代換建造費年額約一億圓ヲ要シタルモノナリ。尚ホ此ノ外ニ、本條約成立ノ結果トシテ、主力艦建造費約四億圓ハ不要トナルベシ。右ハ條約調印ノ際ニ立テタル大體ノ見當ナルガ、此ノ見當ハ今日ト雖差シタル相違ナキ積ナリ。

金子委員　建造費ノミナラズ、維持費モ減少スル筈ナルガ、維持費ノ減少ハ幾許ナリヤ？

財部海軍大臣　維持費ハ勿論建造費トハ別ナリ、必要トナレバ、取調ノ上報告スベシ。

荒井委員　之ヲ要スルニ、現有量四十一萬七千餘噸ガ協定保有量三十六萬七千餘噸トナルモノナルガ、各艦種ニ付、維持費減少ノ内譯ヲ表ニ作成シテ提出アリ度シ。

財部海軍大臣　維持費ノ減少ニ付精確ナル數字ヲ示スコトハ、實際問題トシテハ然カク簡單ニアラズ、卽チ、同噸數ニテモ、艦型ノ進歩、編制ノ變更等、各種多樣ノ要素ニ依リ維持費モ相違スベキヲ以テ、今ヨリ豫定スルコトハ非常ニ困難トスル事情アルコトヲ諒トセラレ度シ。尤モ大體ノ見當トシテハ、補助艦總量ニ於テ五萬噸ノ減少トナルヲ以テ、之ニ對スル維持費ハ先ヅ減少ト見ルヲ得ザルニアラズ。

濱口總理大臣　維持費ニ付テハ、其ノ基本トナル噸數ガ約五萬噸減少スルモ、此ノ噸數ノ減少ニ伴ヒ夫レダケノ維持費ノ減少ヲ見ルカト云フニ、必ズシモ其ノ通ニハ行カズ。卽チ、假リニ保有量ノ減少五萬噸ニ對スル維持費千百五十萬圓ト概算セムニ、今回條約ノ成立ヲ見タル故、昭和六年度ヨリ直ニ此ノ維持費ガ減少スル次第ニアラズ。協定保有量ハ千九百三十六年末ニ至リ到達スルモノナルガ故ニ、來年ヨリ直ニ五萬噸ノ減少ヲ見ルモノニアラズ。又一見不思議ノ現象ト思ハレンモ、實際問題トシテハ、維持費ノ增加スルモノアリ。卽チ、昨今竣工シタルモノ、又ハ近ク竣工セントスルモノニシテ、維持費ノ未ダ豫算ニ計上セラレ居ラザルモノアリ、此等ハ新ニ增加スル譯ナリ。其ノ增加額ハ約二千七百五十萬圓程アリ。然ラバ此ノ二千七百五十萬圓ヨリ保有量減少噸數五萬噸ニ對スル維持費約千百五十萬圓ヲ控除シタル差額ガ今次條約ニ依ル維持費ノ精確ナル增減額ヲ示スカト云フニ、斯ク速斷シ得ベキモノニ非ズ。維持費ノ問題ハ種々複雜セル事情アリテ、闡明ニ斷定シ難キモノアリ、將來海軍大藏兩省ノ協議ニ待ツノ外ナシ。

水町委員　從來製艦費ノ年額見積ハ、昭和六年度マデ毎年約八千萬圓ナリト聞ケリ。昭和七年度以後ノ製艦費ニ對スル財源ノ見積ハ、年額幾許ノ額トナリ居ルヤ？

濱口總理大臣　自分ガ前々內閣ノ大藏大臣タリシ時ニハ、製艦費トシテ昭和七年度以降、年額六千五百萬圓ノ財源ヲ保留シタリ。現內閣トナリテ保留財源ヲ增額シ、海軍大藏兩省ノ間ニ協議濟ミノモノ、昭和六年度ニ約千八百萬圓、七年度ニ約八千七百萬圓、八年度ニ約八千八百萬圓、九年度ニ約九千六百萬圓、十年度ニ約一億六百萬圓、十一年度ニ約一億千二百萬圓、合計約五億八百萬圓ヲ保留シ、之ニ依リテ、現在ノ財政計畫上、主力艦及補助艦ノ建造費ニ充ツルコトト

ナリ居レリ。右後年度ノ財源保留ハ、昭和五年度豫算編成ニ際シ決定セルモノナリ。

水町委員　軍縮協定ノ結果財源ニ餘裕ヲ生ジ、之ニ依リ、兵力量ノ補充ト國民負擔輕減トノ二者ヲ併セテ實行スルコトヲ得トスレバ洵ニ結構ナルモ、萬一兩者ヲ併セ行フコト能ハザル場合ニハ、如何ニスル考ナルヤ？二者ノ目的ノ一ツヲ捨ツル考ナルヤ？又兩者ヲ併セ行フコトヲ得ル場合ニ於テハ、國民負擔輕減ト兵力量補充トノ二目的ニ付、剩餘財源ノ割振ヲ如何ニスル考案ナリヤ？其ノ考案ニハ基本的考案モアルベク、實際施行上ノ考案モアルベシ。此等考案ノ概略說明アリ度シ。

濱口總理大臣　旣ニ說明シタル通、留保財源約五億八百萬圓アリ。然ルニ、今次ノ條約ニ定ムル我保有噸數ノ最高限度迄ノ建造ヲ行ヒ、且老朽艦ハ「ロンドン」條約所定ノ艦齡ノ原則ニ從ヒ千九百三十六年末迄ニ艦齡超過トナル艦船ノ代換建造ヲ行フトスレバ、昭和十一年末迄ニ要スル建造費約一億六百萬圓ニシテ、留保財源約五億八百萬圓ヨリ右建造費約一億六百萬圓ヲ控除シタル差額約四億二百萬圓ノ剩餘ヲ生ズル計算トナル。此ノ約四億ノ金額ヲ何レ丈ケ負擔ノ輕減、卽チ減稅ニ充テ、何レ丈ケヲ兵力量補充ニ充テルカハ、目下海軍大臣ト軍令部長トノ間ニ、兵力量ノ補充計畫ニ關シ協議中ニシテ、其ノ協議纏リタル上ニテ大藏大臣ニ協議スル順序トナルモノナリ。之ニ對シ大藏大臣トシテハ、豫算全體ニ亙リ、各省要求額査定ノ振合ヲモ考慮シタル上ニアラザレバ決定ヲ與ヘ難ク、斯クノ如ク、海軍ノ要求ヲ何ノ程度迄認ムルヤハ、豫算編制以前ニハ決定スルコトヲ得ズ。隨テ減稅ノ金額ヲモ定ムルコトヲ得ズ。此ノ機會ニ一言申添ヘ置キ度シ。一兩回前ノ委員會ニ於テ、山川顧問官ハ、若シ日本ガ條約上ノ權利ヲ全幅利用ストセバ三億三千萬圓ヲ要ス、軍縮剩餘四億圓ノ內ヨリ右補助艦建造費三億三千萬圓ヲ控除スレバ僅ニ七千萬圓ヲ剩スニ過ギズ、此ノ金額ニテ兵力量ノ補充ト國民負擔ノ輕減トヲ併セ行フコトヲ得ル筈ナシト云ハレタルガ、右三億三千萬圓中ニハ、只今述ベタル昭和十一年度迄ノ建造費約一億六百萬圓ヲ含ムモノニシテ、精確ニ計算スレバ、留保財源約五億八百萬圓ヨリ三億三千萬圓ヲ控除シタル差額ハ約一億七千萬圓餘トナリ、山川顧問官ノ示サレタル數字ト約一億圓ノ差アリ、山川顧問官ハ一億圓ヲ

二重ニ計算セラレタルニアラズヤト思ハル。

山川委員　自分ノ計算ニ一億圓ノ差アリトセバ、夫レハ非常ナル差異ナリ。首相ハ、五億何百萬圓ノ留保財源ハ、補助艦ノミナラズ主力艦ノ建造費ヲモ含ムモノナリト說明セラレタリ。何故茲ニ主力艦ノ建造費ヲ云ハルルヤ?「ワシントン」條約ハ千九百三十六年迄效力ヲ有スルモノニアラズヤ?

幣原外務大臣　「ワシントン」條約ハ千九百三十六年迄效力ヲ有スルモノナリ。

山川委員　然ラバ、今茲ニ主力艦ニ付テ何等言及スル必要ナキニアラズヤ?

幣原外務大臣　山川顧問官ノ疑問トセラルル趣旨ハ充分ニ了解スルコトヲ得ザルモ、「ワシントン」條約ニ依レバ、日本モ列國モ、千九百三十一年ヨリ主力艦代換建造ヲ行フモノニシテ、今次ノ條約ニ依リ千九百三十六年迄之ガ建造ヲ休止スルコトトナリタルモノナリ。

伊東委員長　御說明ニテ了解セリ。

荒井委員　補充計畫ニ付政府ニ腹案ナカルベカラザル筈ト思考スルニ由リ、補充計畫ヲ提示セラレ度シ。

財部海軍大臣　補充計畫ニ付テハ、軍令部長ニ於テ大體ノ案ヲ有シ、其ノ案ニ基キ、我々ニ於テ相談ヲ進メ居ルモノナリ。然レドモ、其ノ案ヲ今茲ニ說明スルモ何等ノ實益ナシ。右ノ案ハ軍令部長ト自分トノ間ニモ未ダ意見ノ一致ヲ見タルモノニアラズ、大藏大臣ノ承認ヲ得タルモノニモアラズ、從テ今後如何ニ變更スルヤ全ク豫知スルコトヲ得ザルモノニシテ、斯カル未定ノ腹案ヲ提示スルトキハ却テ誤解ヲ來タス虞アルベク、又今日其ノ數字ニ付說明スルコトハ到底不可能ナリ。

荒井委員　然レドモ、條約ノ調印後數月ヲ經タル今日ニ於テ、補充計畫決定セザル筈ナシ。斯カル計畫決定シ居ラズ、今次ノ條約ニテ大丈夫ナリト云ヒ、之ヲ鵜呑ミセヨト云ハルルモ、斯クテハ我々ニ於テ本條約ニ對スル確信アル結論ニ達スル根據ナシ。

先日外務大臣ノ云ハレタル如ク、何日迄ニ批准ヲ必要トスル理由ナク、批准ノ期日ハ單ニ便宜上ノ問題ナリトスレバ、補充計畫ノ決定ヲ見タル後ニ本案ヲ提出セラルルモ差支ナカルベク、然ラバ我々モ安心シテ御諮詢ニ對シ奉答スルコトヲ得ベシ。

水町委員　自分モ同感ナリ。政府ノ說明ノ如ク各艦種ニ付テノ詳細ナル數字ヲ提示スルコトハ困難ナランモ、大體ノ計畫ノ項目ヲ說明スルコトハ可能ナルベシト思考ス。

財部海軍大臣　補充計畫ヲ見ザレバ國防上甚ダ不安ナリト云ハルルモ、本條約ノ結果國防上決シテ不安アルモノニアラズ。自分ガ國防上ノ缺陷ナキヲ期スト云ヘルハ、財部一己ノ私見ニアラズ、海軍ノ軍事上ノ最高諮詢府ニ於テモ同一ノ結論ニ達シ、一人ノ反對ナク決定シタル意見ナリ。故ニ之ニ信用ヲ置カレ然ルベシト思考ス。而シテ今回ノ補充案ハ加藤大將ガ軍令部長タリシ時代ニ立案セルモノヲ、谷口軍令部長ガ引繼ギタルモノナリ。又新聞紙等ニ種々ノ記事揭載セラレ加藤前軍令部長ニ於テ、國防不安ナリトノ上奏ヲナシタルガ如ク傳フル者アルモ、事實相違セリ四月二日ノ加藤大將ノ上奏ノ趣旨ハ、國防不安ナリト云フニアラズシテ、假妥協案ノ兵力量ニテハ、作戰計畫ニ重大ナル變更ヲ來タス虞アルヲ以テ、愼重審議ヲ要スルモノト認ムト云フニ在リシト記憶ス。

補充計畫決定セザレバ、不安ノ念ヲ生ズト云ハレタルモ、「ワシントン」條約ニ付テハ如何?同條約ニ依レバ、主力艦ノ我保有量ハ英米ニ對シ六割ナリ、當時六割ノ比率ハ、我要求ニ達セザルモノトシテ之ニ不滿アリタルモ、一面ニハ防備現狀維持ノ協定アリ、他面ニハ補助艦ニ關スル制限ナキニ由リ、主力艦ノ不足ヲ補充スルコトヲ得トノ趣旨ニテ、樞密院ニ說明セラレタル筈ナリ。然ルニ國防方針及之ニ基ク作戰計畫ハ、其ノ翌年、卽チ大正十二年ニ御治定アリタルモノニシテ、條約ノ批准前ニアラズ。之ガ今日迄ノ實際ノ先例ナリ。

補充計畫ニ付質問セラレタルガ、之ヲ具體的ニ各項目ニ付、數字ヲ擧ゲテ說明スルコトハ不可能ナルモ、抽象的ニ概要ヲ說明スルコトヲ得ベシ。卽チ、

第一ニハ、條約上ノ協定保有量マデ充分ニ兵力ヲ充實整備スルコトナリ。當然ノ事ナルガ如キモ、之ヲ例示スレバ、乙級大型巡洋艦（六吋砲大型巡洋艦）ハ今次ノ條約ノ結果重要ナル價値ヲ有スルコトトナリ、列國ハ此種ノ巡洋艦ヲ建造スルコトトナルベシ、日本モ八吋砲巡洋艦ニ付希望通ノ保有量ヲ獲得セザリシモノナルニ由リ、或ハ六吋砲大型巡洋艦ヲ建造スルナラント思考ス。

第二ニハ、條約ノ制限ヲ受ケザル兵力ノ充實整備ニシテ、其ノ最モ著シキハ航空兵力ナリ。航空兵力ノ充實ハ、金額ノミニテハ實現スルコト能ハズ、技術ノ訓練ヲ要ス。金額ノ點ヨリ見レバ、數千萬圓ヲ出デザルベシ。

第三ニハ、一般ニ內容ノ充實及術力ノ向上ナリ。具體的ニ云ヘバ、之ヲ例ヘバ、今日迄我海軍ニ於テハ、軍艦內ノ居住性ニ付テハ深ク考慮セラレ居ラズ、之ガ改善ヲ圖ル必要アリ。又訓練ニ付テモ、從來經費不足ノ爲不充分ノ點尠カラズ、米國ニ比スレバ甚シキ相違アリ、砲術ノ練習ニ於テ大砲ヲ發射スル代リニ小銃ヲ發射シテ間ニ合セ居ル如キ有樣ナリ。燃料ニ關シテモ、米國トハ比較スルコトヲ得ザル實情ニテ、米國ニ於テハ豐富ニ燃料ヲ供給シ、軍艦ヲ充分ニ行動セシメ居ルニ反シ、我海軍ニ於テハ斯カルコトヲ行フコト能ハズ。其ノ他、潛水艦ノ二次電池ノ取替等充實ヲ必要トスルモノ多シ。以上ハ、補充計畫ノ大體ノ項目ナリ。

金子委員　外務大臣ハ、出淵大使ヲ二回詰責セラレタル由ナルガ、亦以テ政府ガ當初對米七割ヲ絕對的最低限度ノ要求ト認メラレタルヲ知ルベシ。

「ワシントン」會議ニハ、幣原外務大臣モ全權トシテ參加セラレタルガ、「ワシントン」條約ハ、英米ノ爲ニ我國ハ六割ノ比率ヲ押付ケラレタルモノニシテ、大ナル失敗ナリ。自分ハ誠心誠意國家ヲ憂フルモノニシテ、此ノ失敗ヲ痛恨スル者ナリ。今次ノ「ロンドン」會議ニ於テモ再ビ失敗ヲ繰返シ、國防方針トシテ確定シタル三大原則ヲ破壞シタルハ遺憾ナリ。

飛行機ニ付テハ、一兩年前名古屋ニ赴キ親シク詳細ニ視察ヲ遂ゲタルガ、機械ハ日本ニ於テ製作スルコトヲ得ルモ、翼

ニハ米國產ノ「スプルース」ヲ用ユルコトヲ必要トシ、木曾檜ヲ代用品トスルコト能ハズ、結局米國ニ材料ノ供給ヲ仰グヲ必要トシ、兵機ノ獨立ヲ圖ルコトヲ得ザルモノナリ。然ルニ我海軍ノ潛水艦ハ、他國ニ比類ナキ優秀ナルモノナリ此ノ優秀ナル潛水艦ノ保有量ヲ削減シ、飛行機ニ依テ補充スルヲ必要トスルニ至リタルハ、今次ノ條約ノ大失敗ニアラズヤ？

濱口總理大臣　今次ノ條約上ノ兵力量ト、所謂三大原則トノ間ニ幾許ノ差異アルカヲ檢討スルニ、第一ニ、補助艦對米總括七割ハ大體之ヲ確保スルコトヲ得タリ。總括七割ニハ、噸數ニ於テ千二百九十噸不足スルモ、右ハ驅逐艦一隻ノ噸數ニ過ギズシテ、問題トスルニ足ラズ。第二ニ、輕巡洋艦及驅逐艦ニ付テハ、日本ノ當初ノ要求ハ對米七割ニ達セズ、總括的七割ト潛水艦保有量トノ關係ヨリ、殘念乍ラ七割ヲ得ラレヌコトニ覺悟シタルモノナリ。然ルニ、今次ノ條約ニ於テハ、日本ノ要求ヲ超過スルコト四萬一千噸ニシテ、對米七割又ハ七割以上ヲ確保シタル次第ナリ。此ノ輕巡洋艦驅逐艦ニ於テ有利ナル兵力量ヲ確保シタルコトハ決シテ無益ニアラズ、價値大ナルモノアリト思考ス。第三ニハ、八吋砲巡洋艦ニ付テ見ルニ、次回ノ會議開催セラルベキ千九百三十五年迄ニハ、對米七割二分二厘ヲ現實ニ保有スルモノナリ。然ルニ、八吋砲巡洋艦ニ關スル取極ニ對シ批難ヲ加フル者アリ。批難ハ次ノ二點ニ存スルガ如シ。其ノ第一點ハ、千九百三十六年ヨリ三十八年迄ニ、對米比率ハ順次七割以下ニ低落スルニアラズヤ、而シテ之ヲ回復スルノ成算ナキニアラズヤト云フニ在リ。之ニ對シテハ次ノ諸點ヲ考慮セラレンコトヲ望ム。卽チ、第一ニハ、今次ノ海軍協定成立ノ爲、英米トノ國交一段ト圓滿ナルヲ致シタルハ爭フベカラザル事實ナリ。國交ノ圓滿ハ、假令一時八吋砲巡洋艦ノ對米比率七割以下ニ低落スルモ、爲ニ不安ヲ來タサザルノミナラズ、次回會議ニ於ケル日本ノ立場ヲ有利ニシ、良キ結果ヲ收メシムルモノナリ。第二ニ、尠クトモ五六年ノ間、民力ヲ休養スルコトヲ得ベシ。第三ニ、六吋砲巡洋艦ニ付我主張ヲ超過セル保有量ヲ確保スルコトトナリタル結果、之ニテ大ナル補ヒヲ付ケ得ベキコトナリ。此三點ヨリ見テ、八吋砲艦ノ比率七割以下ニ低落スルコトアルモ、著シク不安ヲ緩和スルコトヲ得ル筈ナリト云ハザルベカラズ。批難ノ第二點ハ、批難

ト云フヨリモ杞憂ニ屬スルモノニシテ、卽チ、此ノ條約所定ノ兵力量ハ、永遠ニ日本ヲ拘束スルモノニアラズヤト一般ニ懸念セラレ居ルコトナリ。然レドモ、之ガ爲ニ八吋砲巡洋艦ノ協定保有量ニ不滿アリトセバ、條約第二十三條ノ規定ヲ一讀スレバ、此ノ懸念ハ直ニ除去セラルベキモノト思考ス。第四ニハ、潛水艦ノ保有量ニ關スル問題ナルガ、過日黑田顧問官ヨリ既ニ潛水艦ニ付均勢ヲ承諾シタル以上、英米ニ於テ三萬噸又ハ二萬噸均勢ヲ唱フル場合ニモ之ヲ承諾セザルベカラザルモノナルガ如ク云ハレタルモ、斷然斯カルコトナシ。日本ハ五萬二千七百噸均勢ニ同意シタルモノニシテ、單純ニ均勢ニ同意シタルモノニアラズ。潛水艦ノ協定ニ對シテハ次ノ三點ニ付批難ヲ加フル者アルガ如シ。卽チ、第一ハ、作戰計畫上ニ兵力量ノ不足ヲ生ズルコト、第二ハ、製艦能力及技術ノ維持不能トナルコト、第三ハ、斯カル少量ノ保有噸數ニ制限スルハ、次回會議ニ於ケル潛水艦全廢ノ前提トナルモノニアラズヤト懸念セラルルコトノ三點ニ批難アルガ如シ。之ニ對シ自分ノ考ヲ述ブレバ、第一ノ作戰計畫上ノ不足ヲ生ズトノ點ニ付テハ、確カニ原主張ヨリ約二萬五千噸減少セルハ事實ナリ。然レドモ、此ノ兵力量ノ不足ハ、之ヲ補フ方法存ス。補充方法ノ第一ハ驅逐艦ニシテ、其ノ保有量ハ我國ノ要求セル所ヨリモ增加シタルモノナルヲ以テ、之ニテ若干ノ補ヒヲ付クルコトヲ得ベシ。其ノ第二ハ航空機ニ依ル補充方法ナリ。第三ハ所謂內容ノ充實及術力ノ向上ニシテ、二重定員ノ如キモ其ノ一方法ナリ。第四ノ補充方法ハ作戰計畫ニ關スルモノニシテ、抑モ國防方針ハ不動ノモノナリトスルモ、其ノ國防方針ニ基キ案畫サレタル作戰計畫ハ一定不變ノモノニアラズ、尠クトモ計畫ノ一部分ハ變更スルコトヲ得ルモノニシテ、作戰計畫一部分ノ變更ニ依リ、潛水艦ノ作戰上ノ不足モ若干補充スルコトヲ得ルモノト思考ス。批難ノ第二點タル造艦技術及能力維持ニ付テハ、之ガ爲ニ特ニ條約ニ明文ヲ設ケ、日本ニ限リ潛水艦繰上ゲ代換建造ノ特權ヲ認メタルヲ以テ、之ニ依リテ造艦技術及能力ノ維持ヲ圖ルコトヲ得ル筈ナリ。批難ノ第三點タル次回會議ニ於ケル潛水艦全廢ノ前提トナルニアラズヤトノ點ハ、專門家ノ關係スル問題ニアラズシテ政治家ノ心配スベキ領分ナリ。卽チ、次回會議ニ於テ全廢論ニ同意セザル覺悟ヲ以テ臨ムベキナリ。而シテ事實トシテハ、條約ニ於テ代換建造ノ權利認メラレタルヲ以テ、必要ナル限度ニ於テ其ノ權

利ヲ行使スルトキハ、新艦ノ建造ハ行ハルルモノナルガ故ニ、漸次ニ全廢ノ前提トナルガ如キコトナシト思考ス。代換繰上ゲ建造ノ權利ハ、潛水艦ノミナラズ輕巡洋艦驅逐艦ニ付テモ之ヲ認ム。日本ノミニ特權トシテ認メタルモノモアリ又各國共通ノ權利トシテ認メタルモノモアリ、多摩ノ代換繰上ゲ建造ハ日本ノミニ關スルモノナリ、又驅逐艦ニ付テモ日本ニ限リ或ル限度ノ代換繰上ゲ建造ノ特權ヲ認メアリ。斯クノ如ク、今次ノ條約ニ依リ日本ノ得タル權利ハ、之ヲ所謂三大原則ニ對照シ、世間ニ騷グ程ノ大ナル懸隔アルモノニアラズ。假令若干ノ不足アルモ、之ガ緩和補充ヲ充分ニ講ズル方法アリ、又之ヲ講ゼントスルモノナリ。故ニ、國防ノ安固ヲ保障スル責任ハ充分ニ執ルコトヲ得ルモノト確信ス。

補充計畫ニ關シ、各項目ニ付所要ノ金額ヲ知リ度シトノコトナレバ、豫算ノ決定ヲ待ツ外ニ方法ナシ。今日大體ノ數字ニテモ之ヲ提示セヨト云ハルルモ、夫レハ今日出來ルコトニアラズ。補充ニ關聯シ、四月一日回訓案ヲ閣議ニ附議シタル際、海軍次官ガ軍部專門家ノ意見ヲ代表シ覺書トシテ內閣ニ提出セルモノアリ、補充計畫ノ要領現ハレ居レリ。

（覺書ノ趣旨朗讀）

海軍大臣ガ只今詳細說明シタル所ト大體同一趣旨ナリ。覺書ハ例示的ニ認メアリ、具體的ノ確定計畫ニ非ズ、又金額ノ明示モナシ。此ノ覺書ハ非公式ノモノナルモ、閣員一同之ヲ承認ノ上署名セリ。世間ニハ、之ヲ以テ內閣ガ海軍ニ一札ヲ入レタルモノナルガ如ク傳ヘラレタルモ、補充計畫ノ程度又ハ數字ニ關シテ、軍部ニ約束ヲ與ヘタル性質ノモノニアラズ、又豫算編成前ニ於テ與フベキモノニアラズ。

今回御諮詢案ノ審議ハ、條約又ハ法律上ヨリ其ノ日限ヲ限定セラレタルモノニ非ズト雖、政府トシテハ、相當ノ期間內ニ審議ノ結了セラルベキコトヲ期待セザルヲ得ズ。豫算ノ決定ヲ待ツテ審議ヲ進メントノ荒井顧問官ノ御意見ニ對シテハ、自分ハ斷ジテ承服致シ難シ。豫算編成ニ關係ナク、本案ノ審議ヲ進メラルルコトト致度シ。

荒井委員　總理大臣ハ、本條約ニ依リテ充分ニ國防上ノ責任ヲ執ルト云ハレタルガ、軍部ハ追テ莫大ナル補充計畫ノ費用

ヲ要求ニアラザルヤノ疑アリ、若シ然リトセバ、國民負擔ノ輕減ハ不可能トナルベク、斯クテハ憂慮ノ念ヲ生ジ、本案ノ論議ヲ躊躇セザルヲ得ザルニ至ルベシ。

財部海軍大臣　軍部ニ於テ如何ニ莫大ナル經費ヲ要求スルモ、實際ノ日本ノ國力ニ顧ミ、其ノ通實行スルコトヲ得ザルコトアルハ、累次實例ノ示ス所ナリ。例ヘバ、昭和五年度豫算編成ニ際シ、當初軍令部ノ造艦計畫施行ニ要スル費額ハ十億圓ヲ突破セリ。然レドモ、自分等ハ迚モ斯カル巨額ノ案ハ成立スルモノニアラズトテ、八億七千萬圓ニ削減シ、省部ノ間ニテハ一應之ニ決定シタリ。然ルニ、大藏省ニ協議スルニ及ビ、之ニテモ我國財政ノ負擔ニ堪エザル所ナリトテ削減セラレ、結局五億圓ニ決定シタリ。卽チ、十億圓ガ五億圓ニ削減セラレタルモノナリ。斯カル次第ナルガ故ニ、今專門的見地ヨリ立案シタル計畫ヲ說明スルモ、實際ニ於テ如何ナル額ニ落付クカ、見當ノ付クモノニアラズ。

金子顧問官ハ、三大原則ガ國防方針トシテ確定セルモノナリト云ハレタルモ、大正十二年御治定ノ國防方針ニ、三大原則ナルモノナシ。所謂三大原則ナルモノハ、「ロンドン」會議ニ臨ムニ當リ、軍部ニ於テ研究ノ結果訓令中ニ現ハレタルモノガ、世間ニ出デタルモノニシテ、長年ニ亙リ確定シ居タルモノニアラズ。又金子顧問官ハ、飛行機ニ付憂慮セラレタルガ、技術專門家ノ一面的觀察ヲ偏重スルトキハ、全般ノ觀察ヲ誤ルコトナキニアラズ。今日ノ飛行機ノ翼ヲ作ルニハ米材「スプルース」ヲ必要トスルモノニアラズ、進步シタル飛行機ハ all metal ナリ。

水町委員　政府ニ確メ置キタキコトアリ。政府當局ノ說明ニ依レバ、結局缺陷補充ノ方法トシテハ、第一ニ條約上ノ兵力量ノ充實、第二ニ條約所定以外ノ兵力量ノ充實、第三ニ海軍力內容ノ充實及術力ノ向上ノ三ニシテ、而シテ本條約ニ依リ財政上ノ餘裕ヲ生ズル範圍內ニ於テ、右缺陷ノ補充ト減稅トヲ倂セ行フトノ政府ノ御趣旨ト了解シ差支ナキヤ？

濱口總理大臣　左樣了解セラレタシ。

金子委員　飛行機ニ付自分ノ述ベタル所ハ、極メテ確實ナル、然カモ實戰ノ經驗ヲ有スル權威アル專門家ニ就キ聽キタルモノニシテ、誤ナキコトヲ確信ス。

本條約ニ依リ、內閣ガ國防上ノ責任ヲ執ルト云フ丈ケニテハ不安ナリ。如何ニシテ補充計畫ヲ行フカニ付テハ一言半句モ答辯セズ、之ニテ安心ナリト云フモ、苟クモ國家ヲ憂フル者ハ、何人ト雖斯カル說明ニテ安心スルコトヲ得ザルベシ。

濱口總理大臣　補充計畫ニ付テハ、先刻海軍大臣ヨリ、相當細目ニ迄亙リテ答辯シタリ。之ニテ諒解アリタシ。

散　會

（備　考）

補助艦維持費ノ增減ニ關スル總理大臣ノ答辯中ニ擧ゲラレタル二千七百五十萬圓ナル數字ハ、大藏省當局ノ說明ニ依ルニ、從來海軍側ヨリ要求ノ豫算額ハ、巨額ノ製艦費（年額約八千六七百萬圓）ヲ含ム結果莫大ナルモノトナリ、到底大藏省ノ承認ヲ得ルコト能ハザル爲、海軍、大藏兩省協議ノ上數年來新造ノ軍艦ニ對スル維持費ヲ豫算ニ計上セズ、追テ財政上ノ都合付ク時機ニ之ヲ增額スルコトニ折合ヒ、斯クシテ、軍艦ノ新造噸數ニ伴ヒ當然增加スベキ維持費ニシテ豫算ニ計上セラレザルモノ、昭和六年度ニ完成ノ代換建造噸數全部竣工ノ際ノ計算ニ於テ、二千七百五十萬圓トナルモノナリ。（一般補助艦、卽チ巡洋艦、驅逐艦、潛水艦ノ維持費ニ關スルモノニシテ、航空母艦ノ維持費ヲ含マザルモノトス。）又千百五十萬圓ナル數字ハ、噸當リ二百三十圓ノ計算ニテ、五萬噸ニ對スル維持費ナリ。

補助艦ニ關スル我國當初ノ主張ト協定兵力量トノ比較、及補充方策ト其ノ財政計畫ニ就テ。（五、九、一〇日於第九回樞府委員會）

本稿ハ、昭和五年九月十日第九回樞府委員會席上、荒井顧問官ノ質問ニ對シ自分（濱口總理大臣）ノ述ベタル說明ノ要領ヲ、後日筆錄セシモノナリ。

倫敦會議ニ於ケル我國當初ノ主張ノ眼目ハ、左ノ三點ニアリタリ。

第一、補助艦總括對米七割。
第二、八吋砲艦對米七割。
第三、潛水艦現有勢力七萬七千八百餘噸。

（備考　第二、第三ノ目的ヲ達スル爲ニハ、輕巡洋艦、驅逐艦ニ於ケル比率ノ低下ヲ見ルモ己ムヲ得ザル所ナリ）

第一、補助艦總括對米七割ハ我國要求ノ重心ヲ成スモノニシテ、實ニ華府會議壽府會議ヲ通ジテ終始一貫セル帝國ノ主張タリ、今回ノ會議ニ於テ略々其ノ主張ヲ貫徹スルヲ得タルハ、確カニ帝國ノ成功ト言ハザルベカラズ。（正確ニ言ヘバ、米國ノ五十二萬六千二百噸ニ對シ、日本ハ三十六萬七千五十噸ニシテ、其ノ比率ハ六割九分七厘五毛ニ當リ、噸數ニ於テハ千二百九十噸ノ不足トナリ、比率ニ於テハ七割ニ達セザルコト僅カニ二厘五毛ニ過ギズ、殆ンド問題トスル價値ナシ。）此ノ點ニ於テハ何人モ異議ヲ挾マザル所ナリ。

第二、六吋砲巡洋艦、驅逐艦ニ於テハ當初ノ主張以上ノ兵力ヲ得、兩艦種ヲ通ジテ四萬一千四百五十二噸ノ超過ヲ見タルモノニシテ、是レ亦何人モ異議ナキ所ナルノミナラズ、八吋砲艦及潛水艦ノ勢力ヲ補充スル上ニ於テ大ナル價値ヲ有スルモノナリ。（要求量十六萬四千四百九十八噸ニ對シ協定量二十萬五千九百五十噸、其ノ比率ハ要求量兩艦種通計ニ於テ五割六分ナリシガ、協定量ニ於テハ六吋砲巡七割、驅逐七割三厘。）

第三、大巡洋艦、卽チ八吋砲巡洋艦ニ付テハ、次回ノ會議、卽チ千九百三十五年迄ハ對米七割二分二厘ノ比率ヲ現實ニ保有スルヲ得ベキモ、八吋砲艦ノ協定ニ付批難セラルル點ハ左ノ三點ニ在リ。

(一)　千九百三十六年ヨリ千九百三十八年ニ至ル三年間ニ於ケル對米比率ノ遞減、卽チ米國ガ條約上有スル八吋砲艦建造ノ權利（「オプション」ニ非ザル）ヲ十分ニ行使スル場合ニ於テハ、日本ノ對米比率ハ千九百三十六年六割七分七厘、千九百三十七年六割三分七厘、千九百三十八年六割二厘トナルベク、千九百三十九年以後ハ、次回ノ會議ニ於テ帝國ノ主張ヲ貫徹シ得レバ比率ハ漸增スベキモ、少クモ前記三年間ハ、帝國海軍ノ劣勢ヲ免レズ。

(二)　條約ノ有效期限ハ千九百三十六年十二月末日迄トナリ居レルモ、將來永ク六割ノ比率ニテ拘束セラルルノ虞ナキニアラズ。

(三)　米國ガ八吋砲ノ新艦ヲ建造シ得ルニ反シ、帝國ハ千九百三十六年迄一隻ノ新艦ヲモ建造スル能ハザル結果、我八吋砲艦ハ其ノ威力ノ點ニ於テ米國ニ及バザルノ結果トナルベシ。

右(一)ノ批難ニ對シテハ、

甲、僅々兩三年ノ間比率ガ七割ニ達セザルコトアリトスルモ、今回ノ軍縮協定成立ノ結果招徠スベキ國交ノ圓滿ニ依リ、外交ノ働キヲ以テ不安ナカラシムルコトヲ得ベク、

乙、軍縮ノ結果トシテ期待サルベキ民力ノ休養充實ニ依リ、國民ノ實力上之ヲ補ヒ得ベク、

丙、尙ホ軍備上足ラザル處ハ、當初ノ要求以上ニ獲得シタル六吋砲巡洋艦ノ利用ニ依テ之ヲ補充シ得ベシ、特ニ今回ノ條約ニ於テ、排水量一萬噸ニ達スル大型六吋砲巡洋艦ヲ認ムルコトトナリタル結果、此ノ艦種ノ保有量ニ餘裕ヲ得タルコトハ、八吋砲巡洋艦ノ勢力ヲ補充スルニ大ナル效果アルベク、三者相俟ツテ國防ノ不安ヲ除クコトヲ得ベシ。

(二)　ノ批難ハ、批難ト言フヨリモ寧ロ將來ニ對スル危惧ニ屬スルモノトス。之ニ對シテハ、將來ニ涉ツテ永ク對米六割ノ比率ニ拘束セラルルハ帝國ノ承認スル能ハザル所ナルハ勿論ノ次第ニテ、唯ダ今回ノ條約ガ千九百三十六年迄ノ事態ヲ律セントスル短期協定ナルガ故ニ之ヲ承諾シタルニ止マリ、其ノ以後ノ事態ニ關シテハ、次回ノ會議ニ於テ帝國ハ全ク自由ノ立場ニ於テ其ノ必要トスル處ヲ主張スルヲ得ベク、此ノ事タルヤ條約ノ效力性質上當然ノコトニ屬スルモ、特ニ之ヲ明確ナラシメンガ爲、我方ノ主張ニ依リ之ヲ條約ノ明文ニ揭記セシメ、以テ將來ノ立場ヲ留保シタリ（條約第二十三條但書）。此ノ規定ハ我方ノ主張ニ基クト雖、一タビ條約ノ明文ニ規定ヲ設クル以上ハ其ノ適用ハ、締約各國共通ノモノトスベク、又獨リ八吋砲艦ノ保有量ニ限ラズシテ、本條約ノ各規定ニ涉ルベキハ當然ノコトニ屬ス。

右留保條件ノ規定ハ、固ヨリ政府軍部一致ノ主張ニシテ、之ニ依テ國防上前途ノ不安ヲ除クコトヲ得タリ。

(三) ノ批難ハ、ソレ自體ニ於テ必ラズシモ重大ナル問題ニ非ズ、況ンヤ次回ノ會議迄ハ對米比率ハ我國最初ノ主張タル七割ヲ超過スル（七割二分二厘餘）ニ於テオヤ、若シ夫レ尙ホ幾分ノ不安アリトセバ、既成艦船ニ對シテ必要ナル裝備ノ改善ヲ爲スコトヲ妨ゲザルベシ。

以上概述シタル所ニ依リ、八吋砲艦ノ保有量協定ニ關スル批難ハ一掃セラレタルモノト信ズ。

第四、潛水艦ノ協定保有量ハ三國均勢ノ五萬二千七百噸ニシテ、當初ノ主張タル七萬七千八百四十二噸ノ現有勢力ニ對シ二萬五千百四十二噸ヲ減ジタルハ事實ナリ。是ニ於テ、相當ノ困難ト種々ノ論議トヲ生ズ。之ヲ敍述スルニ先ダチ、潛水艦噸數ノ協定ニ關スル世上一部ノ誤解ヲ正シ置クノ必要アリ、卽チ、我國ガ五萬二千七百噸ノ劣勢ニ同意シタルハ一ニ三國均勢トナレルガ爲ナルベク、果シテ然ラバ、苟クモ三國均勢ヲ破ラザル限リハ、將來四萬五千噸ニテモ四萬噸ニテモ協定ニ同意シテ差支ナキヤトノ疑問アルコト是レナリ。此ノ如キハ全然誤解ニ屬スルモノニシテ、今回我國ガ五萬二千七百噸ノ均勢ニ同意シタルハ、其ノ均勢ガ五萬二千七百噸ナルガ爲ニシテ、其ノ以下ノ噸數ナラバ、假令三國均勢ナリト云フモ決シテ同意スベキニアラズ、何トナレバ、五萬二千七百噸ナル數字ハ、我國ガ將來一隻ノ新艦ヲモ建造セズシテ、唯ダ艦齡超過艦ヲ廢棄シツツ千九百三十六年末ニ及ベバ其ノ時ニ於テ殘存スベキ噸數ニシテ、我國ガ交讓協調ノ結果應諾シ得ベキ最少限度ノ噸數ナレバナリ。之ヨリ潛水艦ノ保有噸數ニ對スル批難ノ點ヲ列擧シ、次デ之ガ對策ノ梗概ヲ示スベシ。

(一) 作戰計畫上兵力ノ不足、卽チ潛水艦七萬七千八百餘噸ハ、作戰計畫上最少限度ノ兵力ナルニ拘ラズ、之ニ對シ約三分ノ一ノ減少ヲ見ルトキハ、既定ノ作戰計畫上兵力ノ不足ヲ生ズベシ。

(二) 五萬二千七百噸ノ保有量ニテハ、千九百三十六年末迄一隻ノ新艦ヲモ建造スル能ハザル結果、造艦技術ノ衰退ヲ招キ、工業力ノ維持亦困難トナルベシ。

(三) 英米兩國元來ノ主張ハ、潛水艦ノ全廢ニアリ、(一)(二)ノ兩項ニ依テ漸次我勢力ヲ減殺シ、次回ノ會議ニ於テハ、潛水艦全廢ノ前提タル虞アリ。

右ノ內

(一) 作戰計畫上不足アリトノ批難ニ對シテハ、

甲、輕巡洋艦驅逐艦ノ要求以上ニ獲得シタル餘力、特ニ驅逐艦ノ餘力ヲ以テ、或程度マデ潛水艦ノ足ラザル所ヲ補充スルヲ得ベク、

乙、航空機ノ擴張ニ依リ、或程度ノ補充ヲナシ得ベク、

丙、其ノ他、潛水艦ノ內容充實、及二重定員ノ如キ術力ノ向上ニ依リ、或程度ノ補充ヲ爲シ得ベク、最後ニ、

丁、作戰計畫ノ一部ノ變更モ亦考慮ノ餘地アリ。帝國既定ノ國防方針ハ容易ニ變更スベカラザルコト勿論ナルモ、既定ノ國防方針ニ基キテ案畫セラレタル作戰計畫ニ至テハ、當局ノ研究、兵器ノ改良進步、其ノ他情勢ノ變化ニ依リ一部ノ變更ヲナシ得ベキコトニ屬ス。

以上各種ノ方法ヲ併用スルコトニ依リ、作戰計畫上ノ不足ハ略々之ヲ補充スルヲ得ベシ。

(二) ノ批難ニ對シテハ、軍部ノ意見モ十分ニ斟酌シ、條約ニ明文ヲ設ケ、日本限リノ特別トシテ、艦齡ニ達セザルモノト雖或限度ノ代換繰上ヲナス權利ヲ認メシメタリ。其ノ權利ノ限度ハ、千九百三十六年末迄ニ起工シ得ベキモノ一萬九千二百噸ニシテ、內千九百三十六年末迄ニ竣工シ得ルモノ一萬二千噸ナリ。

(三) ノ批難、卽チ將來潛水艦全廢ノ前提云々ノ危惧ニ對シテハ、恰カモ八吋砲巡洋艦ノ場合ト同樣、條約ノ明文上、次回ノ會議ニ於テ自由ノ立場ヲ留保シアルヲ以テ、其ノ場合ノ問題ニ讓ルベキモノナルノミナラズ (一)(二)ノ批難ガ上敍ノ說明ニ依テ除去サレタル以上、其ノ結果トシテ (三) ノ危惧モ自ラ一掃セラルベキナリ。

以上概說シタル所ニ依リ、適當ノ方途ヲ講ズルニ於テハ、潛水艦協定量ノ不足ニ關スル批難モ略々一掃セラレタルモノト

信ズ。

第五、上述各項ノ外、輕巡洋艦驅逐艦ニ關シテハ、第二ニ述ベタル如ク、帝國最初ノ要求以上ニ四萬一千餘噸ヲ得タルノミナラズ、條約ノ明文ニ依リ新舊兩艦齡（輕巡ハ二十年ト十六年、驅逐艦ハ十六年ト十二年）ヲ認メラレタルヲ以テ、若シ其ノ必要アルニ於テハ、或程度迄舊艦齡ニ依ル代換建造ヲナスコトヲ得ベク、其ノ外、日本限リノ特例トシテ、驅逐艦ニ就テハ千九百三十五年及千九百三十六年ノ兩年ニ於テ各若干（五千二百噸）ノ繰上建造ニ着手スルノ權利ヲ得、輕巡洋艦『多摩』ノ代換ニ就テモ亦一種ノ特例ヲ認メラレタリ。而カモ此等ノ代換建造ノ權利及繰上起工ノ特例ヲ如何ナル程度ニ於テ行使スベキヤハ、今日ノ處軍部ニ於テ愼重考究中ニ屬ス。

上述ノ如ク、兵力重ノ協定ニ際シテハ、我國ハ條約ノ明文上周到ナル用意ヲ以テ相當ノ權利又ハ條件ヲ留保シアルノミナラズ、條約所定ノ兵力量ヲ以テシテハ、用兵作戰ノ專門的見地ヨリスレバ既定作戰計畫ノ維持遂行上多少ノ不足ヲ生ズルコトアルモ、內容ノ充實、術力ノ向上ニ付、上來概說シタルガ如ク、兵力ノ補充ニ付適當ノ方途ヲ講ズルコトヲ得ベキヲ以テ、今回ノ條約ガ短期ノ協定タルニ鑑ミ、帝國ノ國防上不安ナキモノト信ズ、換言スレバ、政府（軍部大臣ヲ包含シタル）ハ之ニ依テ國防ノ責任ヲ取リ得ベキコトヲ言明スルヲ得ベシ。

而シテ條約ニ認メラレタル代換建造ノ權利ヲ如何ナル程度ニ於テ行使スルヲ必要トスベキヤ、將又補充計畫ノ具體的方策如何ニ付テハ、最モ有效ニシテ經濟的ナル方法ヲ撰バザルベカラズ。此ノ點ニ付テハ目下軍令部ト海軍省ニ於テ折角協議中ニ屬シ、未ダ協定案ヲ得爲ニ至ラズ、假令協定案ヲ得タリトスルモ、之ヲ外部ニ發表スベキモノニアラズ、省部一致ノ假協定案成ラバ、海軍當局ハ之ヲ以テ財政當局ニ交渉シ、財政當局ニ於テハ

(イ) 一般財政ノ狀況

(ロ) 軍縮主要ノ目的ノ一タル國民負擔ノ輕減ノ必ラズ實行セザルベカラザルコト

(ハ) 明年度新規事業ニ關スル一般ノ振合ヒ

等ヲ彼此勘案考量シ、緩急ヲ按排シテ、茲ニ海軍ノ要求ニ對スル財政當局トシテノ一應ノ腹案ヲ立テ、之ヨリ大藏大臣ト海軍大臣、海軍大臣ト軍令部長トノ間ニ數回ニ涉ル往復交涉ヲ重ネ、結局三者ノ意見ノ一致ヲ見テ最後ノ案ヲ一般財政計畫ニ包含セシメテ、豫算閣議ニ附スルハ十一月上旬ヨリ中旬ノ頃トナルベシ。閣議ニ於テハ、外務大臣ハ國際關係ノ見地ヨリ、其ノ他ノ大臣ハ又夫々ノ見地ヨリ、相當ノ議論アルベキハ當然ノ次第ニシテ、其ノ結果或ハ再ビ補充計畫減稅計畫ノ數字ニ變動アルヲ免レザルベシ。要スルニ補充計畫、減稅計畫、共ニ一般財政計畫ヲ離レテ具體的ニ之ヲ定ムルコトヲ得ズ、隨テ今日假令軍令部限リノ案成レリトスルモ、將又多少ノ時日ヲ經過スレバ軍令部ト海軍省トノ一致案成ルベシトスルモ、凡テ之一般財政計畫ノ概定セラルル時期、卽チ豫算概算閣議ノ決定迄ハ全然未必不確定ノ案ニシテ、既往ノ事蹟ニ徵スルモ、軍部最初ノ原案ハ、財政計畫決定ノ時ニ至レバ大ナル變更ヲ見ルベキモノナルヲ以テ、豫算編成期ニ至ラザレバ、海軍補充ノ計畫モ減稅ノ計畫モ其ノ大體ノ數字スラ說明スルコト能ハザルナリ。

唯ダ今日ニ於テ政府トシテ言ヒ得ベキ點ハ、軍縮ニ依ル餘剩金（留保財源）ハ、補充計畫（條約上ノ代換權利行使ヲ含ム）ト減稅計畫トノ二者ヲ調和セシメテ適當ニ之ヲ按排決定スベク、而シテ補充計畫ハ之ヲ軍縮ノ精神ニ照シ國防ニ支障ヲ生ゼザル最少限度ニ止メ、輕稅ニ充ツベキ金額ヲ出來得ル丈ケ多カラシムル方針ナリトノ一事ナリ。此ノ程度ヲ超ヘテ、二者ノ大體ノ步合ニ至テモ、今日ニ於テハ固ヨリ說明スルコトヲ得ザルナリ。

（第二回委員會ニ於ケル總理大臣外務大臣海軍大臣ノ說明、及第五回委員會ニ於ケル總理大臣ノ回訓發送事情ニ關スル說明ト共ニ、昭和五年九月十三日、審査報告起草ノ參考トシテ、樞密院書記官ヘ送付）

第十回「ロンドン」海軍條約審査委員會

一、場　所　樞密院事務所

二、日　時　昭和五年九月十二日午後一時開會午後三時五十分散會

三、出席者

樞密院側　倉富議長、平沼副議長、伊東委員長、各委員、二上書記官長、書記官

政府側　濱口總理大臣、幣原外務大臣、財部海軍大臣

四、議事要旨

河合委員　本委員會ニ於ケル海軍大臣ノ説明中、兵力量ニ關スル事項ニ付、頗ル無雜作ニ取扱ハレタルハ其ノ意ヲ得ズ。自分ノ不審トスル所ヲ擧ゲテ、質問スベシ。

(一)　海軍大臣ハ、三大原則ヲ餘リ輕ク見テ居ラルル如ク思ハル。會議ニ臨ム爲訓令ヲ決定スルニ當リ、海軍省ニ於テ準備委員會ヲ設ケ、國務トシテ、海軍省軍務局長主催ノ下ニ、軍令部、艦政本部、技術本部等ノ關係者ヲ集メ審議シタリトノコトニテ如何ニモ屬僚任カセニ事ヲ處理シタル如ク云ハレタルガ、如何ナル準備委員會ニ於テ決定セラレタルモノナルニセヨ、海軍大臣軍令部長ノ同意アリ、政府ノ決定ヲ經テ一旦訓令トナリタル以上ハ、之ニ重キヲ措クベキモノナリト思考ス。然ルニ、海軍大臣ニ於テ之ヲ輕ク見ラレタル理由如何？

(二)　四月二日、軍令部長ハ帷幄上奏ヲ行ヒ、且上奏後其ノ態度ヲ發表シ居レリ。之ニ依リテ見レバ、帷幄機關ニ重大ナル異議アリタルコト明瞭ナリ。然ルニ、格別ノ異議ナカリシ如ク云ハルル理由如何？

(三)　海軍大臣ノ説明ニ依レバ、加藤前軍令部長在任中ニ於テ、補充計畫ニ付大體ノ立案ニ着手シ、現軍令部長之ヲ引繼ギ、大體同一ノ骨子ニテ立案シタルモノガ軍事參議官會議ノ奉答トナリタルモノニシテ、之ニ由テ加藤前軍令部長モ

條約自體ニハ反對ナカリシモノト認メラレ居ルガ如キモ、之ハ理由ナキコトナリ。補充計畫ノ立案ニ着手シタルコトハ、之ヲ以テ直ニ條約ニ反對ナカリシモノト云フコトヲ得ザルニアラズヤ？

(四) 加藤前軍令部長ニ於テ立案ニ着手シ、新軍令部長ニ於テ之ヲ引繼ギ案畫シタルモノノ結果、尤大ナル補充計畫生レ出デタル故、海軍大臣ハ、軍部ト政府トノ間ニ板挟ミトナリ、取捨ニ惑フ苦境ニ立ツニ至リタル爲、茲ニ計畫ノ内容ヲ言明スルコトヲ得ザルモノニアラズヤ？補充計畫ハ頗ル重大ナルモノニシテ、決シテ輕ク見ルコトヲ得ズ、海軍大臣ハ一大決心ヲ以テ之ガ實現ヲ圖ルコトヲ要スルモノニアラズヤ？

(五) 軍事參議官會議ニ於テハ、全會一致ニテ奉答文ヲ決定シタリトノコトナルガ、果シテ然ラバ結構ナルモ、國防上兵力量ノ補充ハ緊要事ニシテ、之ガ實行ヲ第一トシ、減稅ノ如キハ第二ニ考ヘテ可ナリ。抑モ參議官會議ハ、國防ノ安全ニ關シ、財部海軍大臣ノ云ハルル如ク、然カク樂觀的ノ意見ヲ有シタルモノナリヤ？寧ロ事態ハ重大ナルモノアリタルニアラズヤ？

財部海軍大臣　第一ニ、海軍省ニ於ケル軍務局長主催ノ準備委員會ニ於テ、最初ノ訓令ノ兵力量ニ關スル部分ガ立案セラレタルハ事實ナリ。然レドモ、決定シタル訓令ハ固ヨリ重キヲ措キタルモノニシテ、決シテ輕視シタルコトナシ。然ルニ何故河合顧問官ハ自分ガ之ヲ輕視シタリト云ハルルカ？其ノ理由ヲ推測スルニ、過日金子顧問官ノ質問ニ於テ、大正十二年ニ國防方針定マリ、之ト同時ニ三大原則ハ根本的作戰計畫トシテ決定セラレタリト云ハレタルヲ以テ、之ニ對シ三大原則ハ、大正十二年ニ國防方針ガ定メラレタル時ニ決定シタルモノニアラズ、其ノ後ニ至リ、今次ノ會議ニ臨ムニ當リテ定マリタルモノニシテ、多年根本原則トシテ決定セラレ居リタルモノニアラズトノ趣旨ヲ答ヘタルコトアリ。河合顧問官ノ質問ハ、惟フニ此ノ答辯ニ起因スルモノナルベシ。然レドモ、右ノ答辯ハ歷史ヲ述ベタルモノニ過ギズ、即チ、三大原則ハ、今次ノ會議ニ臨ムニ當リ決定シタルモノナリトノ事實ヲ說明シタルモノニシテ、決シテ之ヲ輕視スル趣旨ニアラズ。

第二ニ、四月二日ノ加藤前軍令部長ノ上奏ニ付テハ、軍令部長ニ於テ、妥協案ニ依ル兵力量ヲ以テシテハ國防ノ安全ニ對スル責任ヲ執ルコト能ハズトノ趣旨ヲ上奏シタルモノナルガ如ク世間ニ傳フル者アリト雖、之ハ全ク誤解ニシテ、斯カル上奏ヲ爲セルモノニアラズ。其ノ上奏ノ重點ハ次ノ如シ、即チ、國防方針ニ基ク現在ノ作戰計畫ヲ維持遂行スルガ爲ニハ、妥協案通ニテハ不足ヲ生ズ、即チ、妥協案ノ通條約ヲ締結スルモノトセバ、現在ノ作戰計畫ニ重大ナル變更ヲ要スベシ、之ニ付テハ愼重ニ審議スルコトヲ要ストノ趣旨ヲ述ベタルモノナリ。之ガ上奏ノ重點ナリ。又同日加藤前軍令部長ノ爲セル聲明ニモ、國防ノ責任ヲ執ルコト能ハズトハ云ヒ居ラズ。（加藤前軍令部長ノ聲明書ヲ朗讀）聲明ノ趣旨ハ、現在ノ作戰計畫ノ維持遂行ニハ、妥協案ノ兵力量ニテハ不滿足ニシテ、軍部ハ最善ヲ盡シテ帝國ノ國防ヲ危地ニ導カザル樣全幅ノ努力ヲナスヲ要スト云フニ在リ。畢竟、四月一日ニ岡田軍事參議官、山梨海軍次官列席ノ前ニテ、濱口海軍大臣事務管理ニ對シ加藤前軍令部長ノ示セル態度モ、翌二日ノ上奏及聲明モ、同日「ロンドン」ノ自分ニ宛テタル電報モ、何レモ皆同一趣旨ニ出デタルモノナリ。又軍事參議官會議ニ於ケル加藤大將ノ所見モ亦同一ナリ。之ヲ要スルニ、加藤大將ノ兵力量問題ニ對スル態度ハ、終始一貫シテ渝ハル所ナキモノト認メラル。妥協案ノ兵力量ニテハ、軍令部長トシテ作戰計畫ヲ立ツルコトヲ得ズ、國防ノ責任ヲ執ルコトヲ得ズト云フガ如キ態度ハ、未ダ曾テ之ヲ示シタルコトナシ。

第三ニ、加藤前軍令部長ガ補充計畫ノ立案ニ着手シタルコトヲ以テ、同大將ガ條約ニ反對セザリシ證據ナリト云ヒタルコトモナク、又斯ク考ヘタルコトモナシ。唯ダ條約ノ結果國防ニ支障ヲ生ズルガ如キコトナカラシメムガ爲、加藤前軍令部長在職ノ當時既ニ對策ノ立案ニ着手シ、後ニ新軍令部長ニ於テ之ヲ引繼ギ案畫シ、條約上ノ兵力量ニ不足アリトモ之ヲ補充シテ國防ニ支障ヲ生ゼシメザルコトヲ期シツツアル事實ヲ說明シタルニ止マル。

第四ニ、尤大ナル補充計畫ノ爲、自分ガ軍部ト政府トノ間ニ板挟ミトナリ居ルガ如ク云ハレタルガ、自分ハ決シテ板挟ミトナリ居ラズ。固ヨリ軍令部トシテ、出來得ル限リ充分ナル補充計畫ヲ立テントスルハ當然ノコトナリ。從來ノ實例

ニ徹スルニ、米國ニ於テ大型巡洋艦二十三隻ノ建造計畫成立シタル際、軍令部ニ於テハ之ガ對抗策トシテ對米七割ノ建造計畫ヲ立案シ、其ノ所要金額ハ殆ド十一億圓ニ達セントシタルガ、當時ノ海軍大臣ハ、之ヲ以テ到底實行不可能ナリトシテ、對米七割ニハ達スルコトヲ得ザルモ、現建造計畫ノ完成スル昭和六年度末ノ現有勢力ヲ標準トシテ之ヲ維持スル丈ケノ計畫ニ改メ、之ガ爲八億七千萬圓ノ案ヲ立テタリ。然レドモ、此ノ案モ亦財政上ノ見地ヨリ大藏省ノ承認ヲ得ル能ハズ、結局約五億圓ニ削減セラレタルモノガ、現在ノ財政計畫上ニ於ケル留保財源ナリ。卽チ、約十一億圓ノ軍令部ノ計畫ガ、約五億圓ニ減ジタルモノナリ。固ヨリ現ニ軍令部ト海軍省トノ間ニ攻究中ノ計畫案ハ、斯クノ如ク多大ナル縮少ノ餘地アリト云フニ非ザルモ、何レニスルモ、目下海軍大臣ハ板挟ミノ立場ニ在ルモノニアラズ、必ズ何トカ適當ナル解決ノ途ガ講ゼラルベキモノニシテ、自分ハ其ノ解決案ノ發見セラルベキヲ疑ハズ。尙ホ今回ノ補充計畫ニ付テハ回訓案ヲ議シタル四月一日ノ閣議ニ於テ、主義ノ問題トシテ、抽象的ニ閣僚ノ諒解ヲ得タルモノナルガ故ニ、其ノ實行ニ付テハ、內閣ニ於テモ相當程度ニ考慮ヲ加ヘラルルモノト信ジ居レリ。

第五ニ、軍事參議官會議ニ於テ、國防ノ安全ニ關シ樂觀的ノ意見ヲ有シタリヤ否ヤノ點ニ付テハ、茲ニ軍事參議官會議ノ奉答文ノ內容ヲ言明スルコトヲ得ザル次第ナルモ、軍事參議官會議ノ一員トシテ、奉答文ニ同意セル時ノ自分ノ意見ヲ述ブルコトトスベシ。

軍事參議官會議ニ御下問ノ主旨ハ、今次ノ條約ノ兵力量ヲ以テ、國防上支障ナキヤ否ヤ、又其ノ對策如何ト云フニ在リ。此ノ御下問ニ對シ奉答文ガ捧呈セラレタルモノナルガ、其ノ奉答文案ニ自分ガ同意シタルハ、次ノ如キ意見ニ出デタルモノナリ。卽チ、先ヅ主力艦、航空母艦及制限外艦船ニ關スル條約ノ規定ハ「ワシントン」條約防備現狀維持ノ規定ト相俟テ、國防計畫實施上支障ヲ認メズ。次ニ補助艦ニ付テハ、協定兵力量ヲ以テシテハ、既定國防方針ニ基ク海軍作戰計畫ヲ維持遂行セントセバ、兵力ノ不足、卽チ缺陷ヲ生ズ。故ニ條約ノ效力發生ノ上ハ、協定兵力量ヲ常ニ有效且有力ニ維持スルハ勿論、航空兵力ヲ充實シ、制限外艦船ヲ整備シ、益々內容ノ充實ト術力ノ向上トニ努力スルヲ要ス。此等

對策講ゼラルレバ、當面ノ情勢ニ於テハ、國防上略ボ支障ナキコトヲ得ルモノト認メラル。尙ホ條約ノ有效期限滿了後ノ曉ニ於テハ、我國情上最モ適當ト信ズル兵力ヲ保有シ得ル如ク努力ヲ盡サザルベカラズ。以上述ベタル所ハ、奉答文ニ同意シタル自分ノ意見ニシテ、而シテ此ノ奉答文ハ、軍事參議官會議ニ於テ全員一致ニテ決定シタルモノナリ。尙ホ世上奉答文中ニ、補充計畫ノ程度又ハ其ノ所要經費ノ金額ヲ含ムガ如ク傳フル者アルモ、之ハ誤解ニシテ、奉答文ハ斯カル事ヲ考慮シタルモノニアラズ。

河合委員　海軍大臣ハ、加藤大將ノ態度ガ終始一貫シテ條約ニ反對ナラザリシガ如ク云ハルルモ加藤大將ハ過日海軍大臣ニ對シ、此ノ點ニ付抗議ヲ申込ミタリト傳フ。其ノ間ニ齟齬アリテ、何レガ眞相ナリヤ了解シ難シ。

補充計畫ハ、既ニ海軍大臣ト軍令部長トノ間ニ意見合致シテ成立セルモノナリトセバ、何故之ヲ提示セザルカ？豫算ニ於テ多少ノ削減ヲ見ルコトアリトスルモ差支ナキニアラズヤ？

軍事參議官會議ノ奉答文ニ關シテハ、海軍大臣ハ自己ノ意見ヲ述ベタルノミニテ、何等內容ヲ說明スル所ナシ。我々ハ海軍大臣ノ意見ヲ質問シタルモノニアラズ。

伊東委員長　海軍大臣ハ、奉答文ノ內容トシテハ云ハザルモ、斯クノ如キ意見ヲ以テ奉答文ニ同意シタリトテ、其ノ意見ヲ云ハレタルヲ以テ、既ニ分明セルニアラズヤ？

河合委員　何レニスルモ、兵力量ニ缺陷アリト云フナラバ、之ヲ完全ニ塡補スルニハ三大原則ニ復歸スル外ナキニアラズヤ？然ラバ千九百三十五年ノ會議ニ於テ、三大原則ノ主張ヲ貫徹スル確信アリヤ？總理大臣ハ、次回會議ニ於テ如何ナル要求ヲ爲スヤハ政務ニ屬シ、外交上ノ事項ニシテ、軍部ノ專門的意見ノ活動スル範圍ノ問題ニアラズト云ハレタルモ、尠クトモ兵力量ニ付テハ、軍部ノ干涉アルベキ筈ニアラズヤ？

濱口總理大臣　千九百三十五年ノ會議ニ於テハ、政府ハ最善ト信ズル方策ヲ立テ、其ノ貫徹ニ力ヲ盡スベキコト申ス迄モナシ。我要求中兵力量ニ付テ、政府ハ專擅ニテ之ヲ決定スト云ヒタルコトナシ。恐ラクハ、河合顧問官ハ、一昨日、本

委員會ノ席上自分ガ次回會議ニ於テ滑水艦全廢論ニ導カザルノ措置ヲ執ルハ政治家ノ領分ナリト云ヘルヲ誤解セラレタルモノナルベシ。要スルニ、今次ノ條約ニ依リ國防上ニ不安ナシト云ヘルハ正ニ其ノ通ニシテ、此ノ所信ハ渝ルコトナシ。既ニ反覆申述ベタル如ク、條約有效期間ノ短期ナルコト、及條約ニ依ル兵力量ノ不足ハ補充ノ途アルコト、此ノ二ツノ理由ニ基キ、今次ノ條約ニ依リ國防上ノ不安ナシト斷定シタルモノナリ。

財部海軍大臣　河合顧問官ハ、補充計畫ニ付、海軍大臣ト軍令部長トノ意見一致シテ確定的ニ立案濟ナリト自分ヨリ說明シタルガ如ク云ハレタルガ、右ハ誤解ナリ。補充計畫ノ案ハ未確定ニシテ、目下研究中ニ屬ス。

次回ノ會議ニ於テ、三大原則ノ貫徹ハ絕望ナリト爲ス者アランモ、自分ハ左樣ニハ考ヘズ。海軍問題ノ從來ノ經過ヲ顧ミルニ、「ワシントン」會議、「ジュネーヴ」會議、「ロンドン」會議ト會議毎ニ、一步一步、日本ノ主張ノ達成ニ進ミ來レリ。又今次ノ條約ノ成立ニ依リ國際關係ノ空氣ガ良好トナリタルコトモ、日本ノ立場ヲ有利ナラシムルモノナリ。故ニ次回會議ニ於テ、我主張ヲ貫徹スルコトハ絕望ナリト思料セズ。總テ目的ハ一足飛ビニ達成スルコトヲ得ルモノニアラズ、一步ヅツ進ムコトヲ要スルモノナリ。

山川委員　加藤大將ノ進退ニ付テハ、同大將ノ名譽ノ爲ニ答ヘズト云ハレタルガ、今日ノ說明ニ聞ケバ、加藤大將ノ態度ハ終始一貫セルモノナリト云フ。然ラバ、答ヘラルルコトガ本人ノ名譽ニアラズヤ？

財部海軍大臣　加藤大將ノ態度ガ終始一貫シタリト云ヘルハ、兵力量問題ニ關スル同大將ノ態度ガ一貫シタルコトヲ云ヘルモノナリ。加藤大將ノ名譽ノ爲ト云ヘルハ、六月十一日、同大將ガ參內拜謁シタル成行ニ付テハ、同大將ノ爲答ヘザル方ヨロシカラントト云ヘルモノニシテ、兵力量ノ問題ニアラズ。

山川委員　然ラバ、參內拜謁ノ際加藤大將ニ士君子ノ恥ヅベキ行爲アリト云ハルル次第ナルヤ？

財部海軍大臣　自分ガ本人ノ名譽ノ爲、其ノ進退問題ニ付詳述シ難シト云ヒタリトテ、同大將ニ士君子ノ恥ヅベキ行爲アリタルガ爲ト推測セラルベキ理由ナシ。自分ハ加藤大將ニ於テ、何等其ノ人格ヲ疑ハルルガ如キ行爲アリタリトハ毛頭

考ヘ居ラズ。

山川委員　外務大臣ハ、若槻「スチムソン」兩全權非公式會談ノ際、論爭ノ結果、兩人トモ激昂シ、手ニ持テル紙ヲ破リタリト云ハレタルガ、苟クモ一國ノ全權トシテ、何タル無作法ノ態度ナルカ？

財部海軍大臣　其ノ事ハ外務大臣ニアラズシテ、自分ガ答辯中ニ述ベタルモノナリ。卽チ、若槻全權ガ「スチムソン」全權ト妥協案ニ付最後ニ交涉シタル際、若槻全權ヨリ、其ノ案ニテハ日本ノ要求ノ標準ニ達セザルヲ以テ、日本政府ニ稟申スルコトヲ得ズト云ヘル處、「スチムソン」ハ、然ラバ之ヲ記錄スルモ無益ナリトテ右案ノ數字ヲ書キ付ケタル紙片ヲ破リ、若槻全權モ同ジク齋藤ガ數字ヲ書キ取リタル紙片ヲ破ラシメタリトノコトヲ申述ベタルモノナリ。自分ハ右交涉ノ席ニ居ラズ、後ニ至リ話ヲ聞キタルモノナルガ、山川委員ノ質問ハ、此ノ話ノコトヲ云ハルルモノナルベシ。

山川委員　苟クモ今日一流ノ政治家ヲ以テ任ズル者ニ、斯カル無作法ニシテ禮儀ヲ辨ヘザル言動アリタルハ遺憾ナリ。外務省ハ常ニ米國ハ正義人道的主張ヲ以テ政策ヲ一貫スル國ニシテ、日本ハ帝國主義侵略主義ノ國ナリトノ迷信ヲ有ス。然ルニ、日本程平和主義ナル國ハ世界ノ何處ニアリヤ？ 德川三百年ノ平和ナル時代ハ、何國ニ其ノ例アリヤ？ 近年ノ我對米關係ニ之ヲ徵スルモ、挑戰的態度ヲ執ルモノハ日本ニアラズシテ米國ナリ。所謂二十一箇條條約所定ノ期限到來スレバ、米國ハ莫大ナル富力ヲ以テ南滿鐵道、東支鐵道ヲ買收セントス。支那ハ日支條約ノ無效ヲ唱ヘ、米國之ニ共鳴シテ日本ニ戰爭ヲ挑マントス。日本ノ滿洲ニ進出スルハ自然ノ勢ニシテ、之ヲ阻止スベカラズ。米國ニシテ斯ク挑戰的態度ニ出ヅトセバ、日本モ亦已ムヲ得ズシテ應戰ノ覺悟ヲ定メザルベカラズ。此ノ形勢ニ觀ルモ、日米開戰ノ避クベカラザルコトハ明白ナリ。有名ナル「プラット」提督ハ、米國上院ニ於テ、今後百年ナラズシテ米國ハ支那ノ爲メニ日本ト戰フコトトナルベキヲ豫言シタリ、百年ト云ヘルハ言辭ヲ濁シタルモノニシテ、其ノ眞意ハ今少シク近キ將來ヲ指スモノナリ。日米開戰ヲ見ルガ如キハ洵ニ不幸ナルコトナルガ、之ヲ避クルガ爲ニハ、我國ニ於テ充分ナル戰備ヲ整ヘ、米國ヲシテ我ヲ畏敬セシムルノ外方法ナシ。

幣原外務大臣　外務省ニ於テ、米國ハ正義人道ノ權化ニシテ、日本ハ帝國主義侵略政策ノ國ナリト云フガ如キ考ヲ有スル者一人モナキヲ以テ、此ノ點ニ付テハ御安心アラムコトヲ請フ。

德川三百年ノ平和時代ニ付テハ、若槻全權ノ「シアトル」ニ於ケル聲明中ニモ述ベアル所ニシテ、日本ガ平和主義ノ國ナルコトニ對シテハ、我々ニ於テモ固ヨリ異見アル筈ナシ。

大正四年ノ日支條約ニ付テハ、「ワシントン」會議ニ於テ充分ニ討議セラレタル所ニシテ、此ノ問題ニ關シテハ、當時自分ハ全權ノ一員トシテ、日本ノ立場ヲ演述シ、支那ニ於テ條約ノ無效ヲ主張セントスルモノナラバ、日本ハ斷ジテ其ノ主張ヲ認ムル能ハザル理由ヲ詳述シタルコトアリ。之ニ對シ、米國全權ハ一言ノ反對ヲモ表示セズ、唯ダ日本ガ千九百十五年ノ日支條約ニ依リ許與セラレタル商租權、居住旅行ノ權利、商工業上ノ權利竝ニ支那人ト合同シテ農業其ノ他ノ事業ニ從事スルノ權利ニ付テハ、米國モ最惠國約款ニ依リテ之ニ均霑スベキ旨ヲ述ベタルニ止マル。卽チ、日本ノ條約ガ有效ニ存スルコトヲ認ムレバコソ、米國ニ於テモ之ニ均霑スルコトヲ主張シ得ルモノト解釋スルノ外ナシ。大正四年ノ日支條約ニ對シ、支那トシテハ今日ニ於テモ之ヲ無效ナリトスル主張ヲ有スベシト雖、英米ニ於テハ、誰一人トシテ之ヲ無效ナリト考ヘ居ル者ナキガ故ニ、此ノ點ニ付テハ憂慮ノ要ナシ。「ブラット」提督ガ、百年ヲ出デズシテ支那ノ爲ニ日米開戰ヲ見ルベシト豫言シタリトノコトナルガ、「ブラット」ハ、政治家外交家トシテハ誰ニモ認メラレ居ル者ニアラズ、從テ同氏ガ如何ナル政治上又ハ外交上ノ意見ヲ述ベタリトテ、米國ノ國策ヲ代表スルモノトハ誰一人トシテ之ヲ認ムル者ナカルベシ。米國ガ支那ノ爲ニ日本ト戰フ原因ハ那邊ニ存スルモノナリヤ？若シ支那ノ門戸開放ノ爲ニ戰フトノ意ナリトセバ、門戸開放ノ主張ハ寧ロ日本ノ專賣トモ云フベキモノニシテ、日本ニ對スル開戰ノ原因タルコトヲ得ザルモノナリ。

此等ノ點ニ付委曲ヲ盡シテ說明セントセバ、長時間ヲ費スコトトナルベシ、果シテ此ノ席ニ於テ、御質問ニ對シ詳細ニ御答ヘスルコト然ルベキヤ？

伊東委員長　長講演ニ亙ルコトハ適當ナラザルニ付、詳細ナル說明ノ必要ナカルベシ。

幣原外務大臣　然ラバ、唯ダ一言申述ベ置クベシ。

日米戰爭ハ不幸ナル出來事ナルガ故ニ、之ヲ避クルコトヲ要ス。然レドモ、戰備ヲ整フルコトハ、決シテ戰爭ヲ避クル所以ニアラズ。將タ又將來若シ戰爭ヲ見ルコトアリトスレバ、一二年ニ終了スルモノニアラズシテ長期ニ亙ルモノト覺悟セザルベカラズ、之ガ爲ニハ長ク息ノ續クコトヲ必要トシ、國力ノ充實ヲ圖ルコトヲ最モ緊要トス。又今後ニ於テ一國ト一國トノ戰爭ハ極メテ稀有ノ事ト考ヘザルベカラズ、國際聯盟規約ガ嚴格ニ適用セラルルルニ於テハ、少クトモ聯盟國間ニハ、原則トシテ中立國ハ存在セザルコトトナルベク、戰爭ハ一國對世界ノ戰爭トナル傾向ニ在ルモノナリ。此等ノ諸點ハ、國防問題ヲ考量スル上ニ於テ常ニ念頭ニ置クベキモノト思考ス。

山川委員　「ブラット」其ノ他米國上院ノ調査ニ於テ意見ヲ徵セラレタル海軍將官ハ、何レモ西太平洋ニ於テ米國海軍ガ優勢ヲ保持スルコトヲ必要ナリト陳述シタリ、卽チ、日本ト戰ハザルベカラザルコトヲ前提トスルモノナリ。斯クノ如ク米國ニ於テ戰爭ノ機會ヲ覗ヒ居ル危急存亡ノ時機ニ際シ、國防上ノ缺陷ヲ生ズルコトハ不安ノ念ニ堪ヘズ。總理大臣ハ國防ノ責任ヲ執ルト云ハレタルモ、斯クノ如ク兵力ヲ削減シテ、如何ニシテ其ノ責任ヲ執ルコトヲ得ルヤ？

濱口總理大臣　再三說明シタル如ク、國防ノ安全ハ之ヲ期スルコトヲ得ルモノト確信ス。

特ニ御考慮ヲ求メ度キハ、今次ノ條約成立セズ、會議ノ決裂ヲ見タル場合ニ、果シテ如何ナル事態ヲ生ジタルベキカノ點ナリ。其ノ場合ニ於テ、日本ノ軍事上ノ立場ハ、條約ノ成立ヲ見タル場合ヨリモ果シテ有利ナルコトヲ得タリヤ否ヤ？此ノ點ニ付充分ニ考慮セラレンコトヲ切望ス。

久保田委員　外務大臣ハ、將來ノ戰爭ハ息ノ長ク續クコトガ必要ナリト云ハレ、兵力ノ外ニ、國力ヲ國防ノ要素ト考ヘ居ラルルガ如シ。然レドモ、我國ガ今日ノ國際的地位ヲ占ムルニ至リタルハ全ク兵力ノ强大ナルガ爲ニ外ナラズ。外務大臣ハ國力ノ一例トシテ富ノ力等ヲ擧ゲラレタルガ、日本ノ富ハ昔ニ比シ非常ニ上リ居ルコトハ、郵便貯金ノ額ヲ見ルノ

ミニテモ直チニ分明スベシ。斯クノ如ク、富ノ力ガ増加セリトテ、之ガ爲世界ニ重キヲ成シ得ラルルモノニ非ズ、軍備ノ充實ト國民精神ノ涵養ハ最モ肝要ノコトナルベシ。軍備充實ノ點ニ付テハ特ニ十分ノ注意ヲ要スルモノト思考ス。之ハ自分一個ノ意見ナルガ故ニ、敢テ答辯ヲ求ムルモノニアラズ。

金子委員　「ルーズベルト」一度ビ去リ、米國ノ對日態度ハ總テ敵視的ナリ。「ルーズベルト」ハ、自分ガ米國ニ在ル間ハ滿洲ニ關スル日本ノ立場ハ決シテ動カスガ如キコトヲ爲サズト言明シ居リタリ。然ルニ、小村外務大臣ガ「ポーツマス」ニ於テ談判中、東京ニ於テ「ハリマン」ハ桂、山縣等ヲ說キ滿鐵讓渡ノ約束ヲ爲セリ。實ハ、米國ニ於テ、小村ヨリ、滿鐵ヲ日本ガ經營スルニ付資金無ク困リ居ル由自分ニ相談アリ、依テ自分ハ、米國ノ銀行家ニ相談シ、六千萬弗程ノ出資ヲ受クルコトノ話ヲ付ケ置キタリ。小村ハ歸朝ノ後「ハリマン」ノ話ヲ聞キ、斷然之ヲ排斥シタリ。其ノ際、經營上ノ資金ニ付テハ、小村ハ自分ニ於テ準備アリト云ヘリ。之ハ自分（金子子爵）ガ米國銀行家ト話合ヲナシタルコトヲ意味スルモノナリ。後「ハリマン」ハ其ノ事ヲ傳ヘ聞キ憤然トシテ歸米シ、紐育ニ於テ排日計畫ヲ廻ラシタリ。次イデ、高平「ルート」協定ニ依リ滿洲ニ於ケル日本ノ特殊地位ガ認メラルルコトトナリタリ。「ワシントン」會議ノ後、日本ハ此ノ滿洲ニ於ケル特殊ノ地位ヲ棄テルコトニ讓歩セリ。米國ガ日本ヲ壓迫シタルニ因ルモノナリ。茲ニ至ツテ高平「ルート」條約ノ書面ヲ破リタルモノナリ。斯クノ如ク「ルーズベルト」去ツテ以來、米國ハ常ニ日本ヲ敵視シ來レリ。（史實ニ相違ノ點多キモ、暫ク金子顧問官所言ノ儘ヲ記錄ス。）

帝國憲法制定セラレ、茲ニ列席ノ伊東伯之ヲ英譯シ、自分ガ其ノ英譯ヲ携ヘテ歐洲ニ渡航シ、「ダイシー」博士ニ之ヲ見セタルコトアリ。其ノ時「ダイシー」博士ハ、憲法第十一條、第十二條ヲ讀ミテ非常ニ感動シ、是ナラバ日本ノ國家ノ將來ハ安全ナリト云ヘリ。歸朝ノ後、伊藤公ニ此ノ言ヲ告ゲタル處、伊藤公モ大イニ喜ビ、夫レニテ自分ノ責任ハ解除セラレタリト云ヒ、後　陛下ニ拜謁シテ其ノ旨ヲ言上シタル由ナリ。然ルニ今回ノ海軍條約ニ關シ、憲法第十一條、第十二條ニ關シ疑義ヲ生ゼシムルガ如キ措置政府ニアリタルコトハ、國家ノ前途ノ爲ニ憂慮ニ堪エザル所ナリ。但シ之ハ

政府ニ對スル質問ニアラズ、從テ答辯ヲ要スルコトニアラズ。

伊東委員長　本日ハ此程度ニテ散會シ、質問ノ殘レルモノハ、委員會ヲ尙ホ一回開キテ審議スルコトトシ度シ。

散　會

（和昭五年四月二日、都下各新聞ノ夕刊ニ掲載ノ記事）

○加藤軍令部長參內上奏

加藤軍令部長は二日午前十時半參內し天皇陛下に拜謁を仰付けられ同十一時退下した

○加藤軍令部長聲明

加藤軍令部長は二日午前上奏後左の通り聲明した

唯今上奏致しました、帷幄上奏といふことは今度に限つた事でなく統帥事項に關しては御都合を伺ひ屢々致して居る、但し上奏致した次第は申上げ兼ねる、これは天機として絕對に出來ない、今度の回訓に對しては海軍は決して輕舉することなく事態の推移に對應し善處することを確信する、但し國防用兵の責任を有する軍令部の所信として米國案を骨子とする兵力量には同意出來ないことは毫も變化はない、これ今日迄軍令部のとつた態度方針で御承知の通りである。故に今日の場合及び今後の推移に對しては軍令部はその職責と以上の所信とを以て國防を危地に導かざる樣全幅の努力を拂ふ覺悟である。

第十一回「ロンドン」海軍條約審査委員會

一、場　所　樞密院事務所

二、日　時　昭和五年九月十五日午後一時開會二時四十分散會

三、出席者

樞密院側　倉富議長、平沼副議長、伊東委員長、各委員（田委員缺席）、二上書記官長、書記官

政府側　濱口總理大臣、幣原外務大臣、財部海軍大臣

四、議事要旨

黑田委員　兵力量ノ缺陷補充ニ關シ、政府ヨリ軍令部ニ一札入レタル由傳聞ス。果シテ然ルヤ？

濱口總理大臣　四月一日、回訓案ヲ上議シタル閣議ノ席上ニ於テ、山梨海軍次官ヨリ軍部ノ意見ヲ代表シ覺書ヲ提出シタリ。其ノ要旨ハ、若シ此ノ條約成立ノ場合ニハ、因テ生ズベキ困難ナル諸點ヲ緩和スルガ爲、內容ノ充實及術力ノ向上ニ關シテ政府ノ考慮ヲ煩シ度シトテ、其ノ要目ヲ例示的ニ記述シタルモノナリ。此ノ覺書ハ非公式ノモノナリシモ、列席ノ閣僚ハ之ヲ考慮スベキコトニ承認ヲ與ヘテ、一同之ニ署名シタリ。世間ニテ、政府ガ軍部ニ一札ヲ入レタリト傳ヘラルル由ニ聞及ビタルガ、右覺書ニ於テハ、補充計畫ノ事項ヲ列擧シタルモノニアラズ、又其ノ程度及經費ノ金額等ニ關シ何等記述シアルモノニアラズ、此等ハ總テ豫算編成ノ際決定スベキ問題ナリ。右以外ニハ、一札ヲ入レタリト傳ヘラルルガ如キ事實ニ付、何等思ヒ當ルコトナシ。

黑田委員　補充計畫ニ關シテハ、政府ニ於テ責任ヲ以テ其ノ計畫ヲ決定スト云ハレタルハ、如何ナル意味ナルヤ？

財部海軍大臣　當初ノ我要求ニ對シ條約上生ジタル不足ニ付、特別ノ補充ヲ要スルモノアリ（條約上ノ協定兵力量ニ於テ當初ノ要求兵力量ニ比シ、一艦種ニ不足ヲ生ズルモ、他ノ艦種ニ生ズル餘裕ヲ以テ補充スルコトヲ得ル部分アリ、而シ

テ斯ク條約上ノ兵力量ニ於テ各艦種間ニ當然補充スルコトヲ得ルモノ以外ニ、特別ノ補充ヲ要スルモノアリトノ意ナリ)、此ノ補充ヲ行フトスレバ國防上支障ヲ生ズルコトナシ。此ノ點ニ付テハ、海軍大臣タル自分ノミナラズ、軍令部長ヲ含ム帷幄機關ニ於テモ同一ノ意見ヲ有ス。自分ハ今後ニ於テモ、前述ノ特別ニ補足ヲ要スルモノニ付、軍令部長トノ意見ノ一致ヲ以テ、其ノ補充ヲ行フ見込アルコトヲ信ジテ疑ハザル者ナリ。

荒井委員　具體的補充計畫ニテ、既ニ海軍大臣軍令部長ノ間ニ意見ノ一致ヲ見タルモノアリヤ?

財部海軍大臣　大體ノ計畫ハ、自分ト軍令部長トノ間ニ意見一致シタルモノアリ、然レドモ、具體的數字ニ亙リ決定シタルモノナシ。計畫ノ具體案ニ付テハ、目下海軍省軍令部ノ間ニ攻究中ナリ。

荒井委員　大體ノ計畫ヲ示サレ度シ。

財部海軍大臣　大體ノ計畫ニテ、海軍省軍令部ノ間ニ意見一致シタル點アルモ、今後豫算關係ニ於テ如何ニ變更スルヤ豫知シ難ク、今之ヲ大體ノ計畫トシテ說明スルコトハ、自分トシテ無責任ノ嫌アリ、又大體ノ計畫ト云フモ、之ヲ具體的計畫ニ實現スルニ付テハ尙ホ研究ヲ要スル點幾多アリ、例ヘバ、新艦ヲ建造スルニハ速力、防禦力ノ何レニ重キヲ措クベキカ、愼重ニ攻究スルコトヲ要スベク、其ノ結果ニ依リテ經費モ異ナルモノナリ。而シテ此ノ種攻究ヲ要スル點ニテ未ダ決定ヲ見ザルモノ多シ。

荒井委員　若シ「ロンドン」條約ニシテ不成立ニ歸シタリトセバ、我建造計畫ノ所要經費約八億六千萬圓ナリト聞ケルガ果シテ然ルヤ?

財部海軍大臣　前內閣時代ニ於テ、造艦計畫ニ約八億七千萬圓ヲ要スル案ヲ立テタルモ、財源ヲ得ルコト能ハザル爲決定ニ至ラザリシガ、現內閣時代ニ至リ、保留財源約五億圓ヲ作リ、之ヲ以テ主力艦及補助艦ノ建造費ニ充ツルコトニ一應定マリタルモノナリ。

荒井委員　現ニ留保セル財源五億圓餘ナリトノ由ナルガ、之ハ主力艦ノミノ建造ニ充ツベキ筈ノモノナリシヤ?

財部海軍大臣　然ラズ、補助艦ヲモ含メル造艦費トシテ、五億圓餘ノ財源ヲ留保セルモノナリ。

荒井委員　今回ノ條約ノ結果、其ノ五億圓ノ留保財源ヲ以テ補充計畫ト減稅トニ充ツルトノコトナルガ、千九百三十六年以後主力艦建造休止ノ協定效力ヲ失ヒ、主力艦代換ヲ行フコトトナレバ、更ニ之ガ財源ノ調達ヲ要スルモノナリヤ?

濱口總理大臣　然リ。

財部海軍大臣　實ハ五億圓ノ財源留保シアルモ、夫レニテハ實際ハ不足ナリ。然レドモ、財政ノ現狀ニ鑑ミ、不取敢之ニ決定シタルモノナリ。之ヲ補充計畫ト減稅トニ充テタル後、若シ主力艦ヲ千九百三十六年以後建造スルコトトナレバ、再ビ其ノ財源ヲ調達スルコトヲ必要トスベシ。

所謂三大原則ガ貫徹シタリト假定シ、其ノ三大原則ノ下ニ艦齡超過艦ノ代換ヲ行フモノトスレバ、建造費約三億三千萬圓ヲ要スベシ。然ルニ今次條約ノ規定ニ依ルニ、最大限度迄權利ヲ利用スルモノトシテ、代換建造費約三億二千萬圓ナリ。果シテ最大限度迄條約上ノ權利ヲ利用シテ建造ヲ行フヲ可トスルヤ、或ハ斯クノ如ク條約上ノ權利ヲ利用スルヨリモ、寧ロ補充計畫ノ急施ニ重キヲ措クヲ可トスルヤ、兩者如何ナル程度ニ實行スベキハ、目下攻究中ノ問題ニ屬ス。

荒井委員　主力艦ノ代換建造休止ニ依リ生ズベキ餘剩三億四千萬圓ナル由ナルガ、留保財源五億圓ヨリ右ノ額ヲ控除シタル一億六千萬圓ノ內ニテ、補助艦代換ヲ行フ次第ナリシヤ。

財部海軍大臣　要スルニ、補助艦ノ代換ハ、五億圓ノ留保財源中ヨリ之ヲ行フモノトナリ居タリ。

荒井委員　補充計畫ナルモノガ、若シ海軍大臣ノミノ責任內ニテ立案スルモノナリトセバ可ナルモ、軍令部長トノ意見一致シアルベキモノナリトノコトナレバ、果シテ五億圓ノ財源內ニテ計畫ヲ立ツルコトヲ得ベキヤ、甚ダ不安ニ感ゼザルヲ得ズ。補充計畫ハ何時頃決定スルコトヲ得ル見込ナリヤ?

財部海軍大臣　補充計畫ヲ立ツルニハ、軍令部長ト協議シ意見ノ一致ヲ圖ルベキモノナル故、計畫ニ對スル自分一個ノ意見ヲ云フハ無責任ナリト考フルガ故ニ、今日具體的ニ補充計畫ヲ言明スルコトヲ得ザルモ、五億圓ノ財源內ニ於テ支辨

シ得ベキ見込ナルコトハ、屢々説明セル通ナリ。

濱口總理大臣　補充計畫ニ就テ、假令海軍大臣軍令部長ノ間ニ意見一致スルモ、一般財政其ノ他ノ關係ト照合シテ、財政當局ニ於テ考慮ヲ加ヘザルベカラザルガ故ニ、結局豫算編成期タル十一月中旬迄ハ、確定セル補充計畫ヲ立ツルコトヲ得ズ。

黒田委員　海軍大臣ハ、軍令部長トノ間ニ大體ノ意見一致シタル計畫アリト云ハレタル處、其ノ計畫ヲ示サルルコトヲ得ザルヤ？

財部海軍大臣　自分ト軍令部長トノ間ニ意見一致セル大體ノ計畫アリトスルモ、大藏大臣ノ同意ヲ得ルニアラザレバ、確定案トシテ決定セルモノニアラズ。而シテ海軍大臣ヨリ大藏大臣ニ交渉ノ結果、要求總額中或程度迄承認ヲ得タル場合ニモ、直ニ其ノ程度ニ應ジ按分比例ヲ以テ計畫各項目ヲ削減スルコトヲ得ルモノニアラズ。海軍大臣ハ大藏大臣ノ承認シタル程度ヲ基礎トシテ再ビ軍令部長ト協議シ、改メテ計畫ヲ立案シタル上ニテ確定案トナルモノナリ。斯クノ如ク、補充計畫ノ確定スル迄ニハ、尚ホ幾多ノ曲折アルヲ免レズ。

金子委員　明治二十九年、伊藤内閣ノ當時、兵力量ノ決定ニ關シ帷幄機關ヨリ上奏勅裁ヲ經タル後、之ヲ總理大臣ニ回付シタルコトアリタルガ、斯クノ如ク帷幄機關ノ決定セル所ニ御裁可アリタル上ハ、政府ハ單ニ之ヲ執行スル形トナルガ故ニ、此ノ種問題ノ決定ニハ、帷幄機關ヨリ陸海軍大臣ニ對シ豫メ大體ノ計畫ヲ示シ、其ノ間ニ意見ノ交換ヲ行フコトニ定メタリ。又明治四十年三月、西園寺内閣ノ下ニ於テ、參謀總長ヨリ或ル計畫ヲ上奏シタルニ、明治天皇ハ、御裁可ニ先ダチ、總理大臣ヲ召サレ其ノ意見ヲ御下問アリ。仍テ總理大臣ハ、該計畫ヲ其ノ儘直ニ遂行スルコトハ財政上ノ見地ヨリ困難ナルモ、漸ヲ追フテ實行スルコトヲ得ベキ旨奉答シタルコトアリ。斯クノ如ク、大體ノ計畫ニ付、先ヅ政府ト帷幄機關トノ間ニ意見ノ交換アル筈ナリ。大藏大臣ニ於テ財政上ノ見地ヨリ金額ヲ削減シ、爲ニ計畫ハ其ノ儘ニテ實行セラレザルヤモ計リ難シトスルモ、夫レハ手續ノ問題ニシテ差シテ重要ニアラズ。仍テ補充ニ關スル大體ノ計畫其ノ

モノヲ承知シ度シ。

潛水艦兵力ノ缺陷ハ飛行機ニテ補充スト云ハレタルガ、然ラバ飛行機ハ幾隊程設備スルヲ必要トスルヤ？

濱口總理大臣　金子顧問官ハ、兵力量ノ計畫ニ付軍部ヨリ大藏大臣ト協議スルコトハ、手續ノ問題タルニ過ギザルモノノ如ク述ベラレタルモ、大藏大臣トノ協議ハ決シテ手續上ノ問題ニアラズ、大藏大臣並ニ政府ハ、財政上ノ見地及國際關係ノ情勢等ヨリ稽ヘ、軍事當局者ノ立案セル兵力量ノ計畫ニ對シ、其ノ實質ニ亙リテ査定ヲ行フモノナリ。而シテ其ノ査定ニ付テハ、各方面ノ意見ガ結局ニ於テ一致スベキハ勿論ナリ。

金子委員　過日總理大臣ハ、今次條約ニ依ル剩餘財源ノ半分ヲ減稅ニ充テ、他ノ半分ヲ補充計畫實行ノ經費ニ充ツル如ク云ハレタルガ、然ラバ剩餘財源ノ半分ニテ、如何ナル程度ノ補充ヲ行フコトヲ得ルヤ承知シ度シ。

財部海軍大臣　先刻金子顧問官ヨリ、潛水艦兵力ノ缺陷ヲ補フ爲飛行機幾隊ヲ設備スル必要アリヤトノ質問アリタルガ、今日如何ナル專門家ト雖、原則ノ問題トシテ、潛水艦幾千噸ニ對スル補充トシテ、飛行機幾隊ヲ要スト云フガ如キ計算ヲ立ツルコトヲ得ルモノニアラズ。

金子委員　潛水艦兵力量ハ、當初ノ要求ニ比シ二萬五千噸不足ス。之ニ對シテハ、飛行機十六隊ヲ以テ補充スル計畫ナリト傳聞セリ。果シテ然ルヤ？

海軍大臣ハ、如何ナル專門家ト雖斯カル計畫ヲ立ツルコトヲ得ズト云ハレタルガ、專門家ニ於テ必ズ計畫ヲ立ツルコトヲ得ル筈ナラズヤ？

財部海軍大臣　單ニ空漠ナル原則ノ問題トシテ、潛水艦幾噸ニ對シ飛行機幾隊ト云フガ如キ計算ヲ立ツルコトヲ得ズト述ベタルモノナリ。今回ノ補充計畫ニ關スル具體的ノ問題ニ付、飛行機幾隊ヲ要スルカハ、固ヨリ專門家ノ立案スベキ所ナルガ、今日ノ處未ダ確定案ナシ。

濱口總理大臣　金子顧問官ハ、自分ニ於テ剩餘財源ノ半分ヲ補充計畫ノ經費ニ充テ、他ノ半分ヲ減稅ニ充ツル旨ヲ述ベタ

ルモノト解セラレタルガ如キモ、自分ハ單ニ剩餘財源ノ一部ヲ補充計畫ノ經費ニ、他ノ一部ヲ減稅ニ充ツル考ナルコトヲ說明シタルモノニシテ、半分ト云フガ如ク其ノ割合ヲ示シタルコトナシ。

伊東委員長　其ノ點ハ諒承シ居レリ。

金子委員　米國ハ今回ノ條約ニ依リ、大型巡洋艦十八隻迄建造スルヲ得ルコトトナリ居ルモ、同國ニ於テ現ニ竣工セル大型巡洋艦ハ二隻ニ過ギズ、然ラバ、今回ノ條約ハ、軍備ノ縮少ニアラズシテ、軍備ノ擴張ヲ行フモノニアラザルカ？

財部海軍大臣　大型巡洋艦ニ付テハ、米國ニ於テ現ニ建造中ノモノ並ニ豫算ノ成立セルモノ十三隻、豫算ハ未ダ成立セザルモ、法律ニテ建造ヲ認メタルモノ十隻、合計二十三隻ノ建造計畫ヲ有シタルモノナルガ、今回ノ條約ニ依リ、之ヲ十八隻ニ縮少制限シタルモノナリ。又米國ノ大型巡洋艦竣工セルモノハ二隻ナルモ、既ニ工事ノ餘程進捗セルモノ六隻アルコトモ考慮セザルベカラズ。

尙ホ、金子顧問官ハ、潛水艦ノ不足二萬五千噸ハ、航空機ノミヲ以テ補充スルモノト了解セラレ居ルガ如キモ、補充ノ途ハ航空機ノミニ限ラズ、驅逐艦、制限外艦船ニ依リテモ之ヲ補フコトヲ得ルモノナリ。

金子委員　米國上院ノ議事錄ヲ讀ムニ、米國ハ今回ノ條約ニ依リテ初メテ balanced fleet ヲ作ルヲ得ルコトトナリタルモノナリ。卽チ、今日迄釣合ヒノ取レ居ラザル艦隊ヲ、釣合ヒノ取レタル艦隊ニ作リ上グルコトトナルモノニシテ、從テ軍備擴張ヲ行フモノニ外ナラズ。此ノ點ニ付議論スルモ、結局意見ノ相違ニ歸著スベキヲ以テ之ニテ止ムベシ。

荒井委員　補充計畫尨大ナレバ、財政之ニ堪エザル事態ヲ生ズベク、然ラバ條約ノ根本ニモ觸ルルコトトナルベシ。故ニ補充計畫ノ大體ヲ知ルコトハ、條約ノ審議上極メテ必要ナリト云ハザルベカラズ。然ルニ政府ニ於テ補充計畫ヲ提示スルヲ得ズトノコトナレバ、條約ノ審議ニ非常ナル困難ヲ生ズベシ。豫算ハ十一月中旬ニ至ラザレバ決定セザルコト事實ナランモ、自分等ハ確定的數字ヲ知ランコトヲ求ムルニアラズ、從テ改變ヲ豫期セラルル案ニテ差支ナキニ由リ、條約ノ審議上、補充計畫ノ大體ニテモ之ヲ知ルコトヲ必要ナリト思考シタルモノナリ。政府ガ本條約ノ審議ヲ急ガルル理由

如何？

濱口總理大臣　先刻申述ベタル如ク、五億圓ノ留保財源ノ範圍內ニ於テ、減稅ト共ニ補充計畫ヲ立ツルコトヲ得ル見込ナルハ、海軍大臣ヨリモ之ヲ明言セル所ナリ。此ノ際具體的ノ計畫決定スルニ至ル迄審議ヲ行フヲ得ズトノコトナレバ、重大ナル結果ヲ見ルベシ。政府ガ本條約ノ批准ヲ急グ理由ハ、主トシテ內政上ニアリ。此ノ席ニテ公言スルヲ好マザル所ナルガ、今日ノ財界ハ決シテ安心スベキ狀態ニ在ルモノニアラズ。(此ノ間財界不安ノ現狀ヲ概說ス。)然ルニ此ノ上更ニ本條約ノ審議延期セラルルコトトモナラバ、其ノ間種々ノ流言蜚語行ハレ、政界ノ不安、一般人心ノ不安ヨリ、延ヒテ財界ニ重大ナル惡影響ヲ及ボスベシ。故ニ此ノ際本案ノ審議ヲ此ノ儘長ク未了ノ狀態ニ置クコトハ、自分トシテ到底同意スルコトヲ得ザル所ナリ。是レ決シテ政府ノ都合ヨリ言フニアラズ、國民經濟全體ノ爲ニ言フモノナリ。樞府ニ於テハ速ニ審議ヲ了セラレンコトヲ望ム。

伊東委員長　此ノ際顧問官諸君ノ御了解ヲ求メ、又政府ニ對シ希望ヲ申述ベ度キコトアリ。顧レバ去月十八日以來、委員會ヲ開クコト玆ニ十一回、或ハ「ロンドン」會議ノ經過、條約文ノ誤謬、或ハ統帥權問題、其ノ他補充計畫、財政計畫等ノ問題ニ付質問應答ヲ重ネタリ。其ノ內、統帥權問題ニ關シ、軍令部長ガ回訓案ニ同意シタリヤ否ヤノ點ニ付テハ、問題ヲ他日ニ留保シタリ。政府ハ既ニ軍令部長ノ同意アリタリト認ムル旨ヲ答ヘタルモ、顧問官中ニハ尙ホ之ニ疑ヲ挾ム者アリ。故ニ前軍令部長加藤大將ノ出席ヲ求メ、事實ノ眞相ヲ聽カンコトヲ提議シタリト雖、政府ハ之ヲ應諾セズ。又四月二日附加藤前軍令部長ヨリ在「ロンドン」財部海軍大臣ニ宛テタル電報寫ヲ提出シ、其ノ內容ヲ明カニセンコトヲ要求シタルモ、政府ハ之ニ對シ未ダ回答ヲ與ヘズ。加藤前軍令部長ノ出席ハ、政府ニ於テ既ニ拒絕シタル以上、樞密院トシテハ此ノ上其ノ出席ヲ强要スル職權ヲ有セズ。統帥權問題ニ關シテハ、濱口總理大臣ハ、既ニ兵力量決定ノ問題ニ付テハ軍令部長ノ同意ヲ必要トスル主義ヲ認メラレ、此ノ點ニ付、總理大臣ハ議會ニ於ケル答辯ト其ノ態度ヲ一變セラレタリ。本問題ニ就テハ質問ヲ留保シアリタル處ナルモ、此ノ上更ニ論議ヲ重ヌルトキハ、樞密院ト政府トノ間ニ正

面衝突ヲ避ケ難ク、審議ヲ進ムルコト能ハザルニ至ルベシ、故ニ統帥權問題ハ、略ボ自然消滅ニ歸シタルモノト認メ、茲ニ質問ヲ打切ルコトトスベシ。從テ他日意外ノ事實現ハルルガ如キコトナキ限リ、本問題ハ終結シタルモノト看做サントス。前軍令部長ノ海軍大臣宛電報ニ關スル問題モ、既ニ統帥權問題ヲ打切リタルヲ以テ、改メテ其ノ提出ヲ要求セザルベシ。

兵力量ノ缺陷ニ對スル補充計畫ニ付テハ、政府ノ責任ニ於テ之ヲ決定スベキガ故ニ、政府ノ決定ヲ信任セヨト云ハルルモ、斯クテハ今回ノ御諮詢ニ盲判ヲ捺押セヨト云フニ異ナラズ、之ハ政府ヲ信任スルヤ否ヤノ問題ニハアラズ、樞密院トシテハ、此ノ儘ニテハ本案ノ審議ヲ愼重ニスル所以ニアラズ、其ノ職責ヲ盡シ難シト思考スルモノナリ。就テハ、政府ニ於テモ、本問題ニ對シ、冷靜且公平ニ考慮ヲ加ヘラレンコトヲ希望ス。軍事參議官會議ノ奉答文ニ關シテハ、海軍大臣ヨリ其ノ内容ニ亙リ一部ヲ説明セラレタリ。既ニ其ノ内容ニ付説明ヲ與ヘラレタルモノナル以上、奉答文ヲ提示スルコトヲ得ザル理由果シテ何處ニ在リヤ？本問題ニ付テハ襄ニ倉富議長ヨリ請求アリタルニ拘ラズ、總理大臣ニ於テ提出ヲ拒マレタルモノナルガ、茲ニ改メテ奉答文ヲ提出セラレンコトヲ要求ス。此ノ席ニテ卽答ヲ求ムル次第ニアラザルニ付充分御協議アリ度シ。

濱口總理大臣　唯ダ今伊東委員長ノ述ベラレタル所ハ、要點三アリ。第一ハ統帥權問題ニシテ、之ニ付テハ質問ヲ打切リ既ニ問題トセズトノコトナルガ故ニ、自分ハ深ク論及セザルベシ。唯ダ一言辯明ヲ要スルハ、政府ノ議會ニ於ケル答辯ト樞密院ニ於ケル説明トハ、其ノ態度ヲ一變セリトノ一事ナルガ、斷ジテ政府ハ態度ヲ變更シタルコトナシ。帷幄機關トノ交渉顚末ノ如キハ、議會ニ於テ詳細ニ亙リ答辯スルコトヲ得ル性質ノモノニアラズ、從テ自分ハ議會ニ於テハ、全權ヘノ回訓案ニ對シテ軍令部ノ同意アリタルヤ否ヤノ問題ニ觸ルルコトヲ避ケ、特ニ用語ヲ愼ミ、軍部ノ專門的意見ヲ尊重斟酌シタリト云フニ止メタルモノナリ。本委員會ニ於ケル用語ノ異ナルハ、自分ノ態度ヲ一變シタルガ爲ニ非ズ、答辯ノ場所ガ異ル爲ニシテ、趣意ハ一貫セルモノナリ。

第二ニ補充計畫ト減税トノ問題ナルガ、之ニ關シテ、政府ハ樞密院ニ對シ、單ニ政府ヲ信任シテ御諮詢案ニ盲判ヲ捺押センコトヲ求メタルモノニアラズ、補充計畫ニ付、此ノ際説明シ得ラルルモノハ充分ニ開示シタリ。然レドモ、政府ハ補充計畫ヲ樞密院ニ提出スルノ義務アリトハ認ムルコトヲ得ズ、御參考ノ爲必要アルニ於テハ、確定セル補充計畫案ノ成立セルモノアラバ、固ヨリ欣然之ヲ樞密院ニ提示スベシト雖、補充計畫ノ提示ヲ義務トシ、之ヲ提示セザルコトヲ以テ義務ヲ怠ルモノトナス見解ナラバ、之ニハ承服スルコトヲ得ズ。補充計畫ノ具體案ハ、前來屢説セル如ク、今日未ダ決定ノ時機ニアラザルガ故ニ、御參考トシテ示シ得ザルハ遺憾トスル所ナリ。

第三ニ、軍事參議官會議奉答文提出ノ問題ニ關シテハ、委員會開催前ニ倉富議長ヨリ協議アリタル節、奉答文ハ政府ノ手許ニ存セズ、政府ハ之ガ提出ヲ拒絶シ又ハ承諾スルコトヲ得ル立場ニアラザルモノナルコトヲ明白ニ御答ヘ致シタリ。當時ハ未ダ委員ノ指名モナキ際ナリシヲ以テ、自分ヨリ倉富議長ニ對シ、先ヅ委員會ヲ作リ審査ニ着手セラルルコトヲ緊要トスベク、委員會ノ席上ニ於テ、自分ハ、外務大臣海軍大臣ト共ニ、胸襟ヲ開キテ何事ニテモ及ブ限リ説明スベシ、然ルニ委員會ヲ開クコトヲモナサズ、前提條件トシテ奉答文ノ提出ヲ要求セラルルハ、其ノ意ヲ解シ難シトノ趣旨ヲ申述ベタルガ、今日ニ於テモ全ク同樣ノ意見ヲ有スル者ナリ。而シテ事實ニ於テ、奉答文ノ内容ハ之ヲ云フコトヲ得ザル所ナルモ、奉答文ニ對スル海軍大臣ノ所信ハ、本委員會ニ於テ縷々説明セラレタル通ナリ。其ノ説明ニ不明ノ個所モアラバ、同大臣ヨリ繰返ヘシテ答辯セラルベシ。海軍大臣ノ説明中奉答文ノ内容ニ觸レタル點一個所アリ、卽チ、奉答文中ニハ補充計畫ノ程度及所要金額ニ言及セラレ居ラズトノ點ナリ。從テ奉答文ニ依リ、補充計畫ノ程度及金額分明如ク考ヘラレ居ルモノトスレバ誤解ナルヲ以テ、此ノ際トシテハ、奉答文ニ對スル海軍大臣ノ述ベタル説明ノ程度ニテスルガ諒解セラレンコトヲ求ムルノ外ナシ。又唯ダ今迄諒解サレタルモノト信ジ居タリ。

伊東委員長　奉答文ノ提出ニ付テハ、卽答ヲ求ムル次第ニアラザルニ付、熟考ノ上回答アリ度ク、回答ハ書面ニテ差支ナシ。

濱口總理大臣　奉答文ノ提出ハ、委員會ノ希望ニ出ヅルモノナリヤ？

伊東委員長　委員會ノ意見ヲ當席ヨリ傳ヘタルモノナリ。

濱口總理大臣　然ラバ、此ノ席上ニテ即答致スベシ。奉答文ノ提示ハ之ヲ取計ヒ難シ。此ノ點ニ付テハ、倉富議長ヨリ協議アリタル節、充分ニ愼重考慮ヲ遂ゲタルモノニシテ、今更考慮ノ餘地ナシ。軍事參議院ノ奉答文ハ政府ノ手許ニナキモノニシテ、又手許ニアルベキ性質ノ書類ニアラザルヲ以テ、政府ニ於テ之ガ提示ヲ取計ヒ難シ。

伊東委員長　總理大臣ノ答辯ハ、唯ダ今御聞キノ通ナリ。本日ハ之ニテ散會スベシ。次回ノ十七日ニハ、政府當局ノ參會ヲ求メズ、委員ノミノ委員會ヲ開クコトト致度シ。政府當局ノ出席ハ必要アラバ、當方ヨリ申上グベシ。

散　會

第十二回「ロンドン」海軍條約審査委員會

一、場　所　樞密院事務所

二、日　時　昭和五年九月十七日午後一時開會午後二時四十分散會

三、出席者

樞密院側　倉富議長、平沼副議長、伊東委員長、各委員、二上書記官長、書記官

四、議　事　樞密院側ノミニテ開會シ、審査委員會ニ於ケル從來ノ政府當局ノ說明ニ基キ、御諮詢案ニ對スル審査委員會ノ最後ノ意見ヲ決定シタルモノナリ。審査員タル一顧問官ヨリ得タル情報ニ依レバ、各委員ヨリ種々ノ意見出デタルモ、結局伊東委員長ヨリ「軍部ト完全ナル協調ノ上、堅實ナル補充計畫ヲ遂行シ、且人民負擔ノ輕減ヲ實行シテ本條約ノ目的ヲ達成スルニ於テ萬遺憾ナキニ於テハ、本條約ヲ御批准アラセラレ可然ト存ズ」トノ趣旨ニテ審査報告ヲ作成センコトヲ提案シ、一同之ヲ承認シタリト云フ。(右文案ハ主旨ヲ示スニ止マリ、其ノ儘ニ報告書ノ文章トナルモノニアラズ、又右ハ條約ノ批准ニ條件ヲ附スルモノニアラザル由。)

第十三回「ロンドン」海軍條約審査委員會

一、場　所　樞密院事務所

二、日　時　昭和五年九月二十六日午後一時開會

三、出席者

樞密院側　倉富議長、平沼副議長、伊東委員長、各委員、二上書記官長、書記官

四、議　事　樞密院側ノミニテ開會シ、審査報告ヲ決定シタリ。